戦鬼絶叫ノイズギア

ネク

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
男は求めている。
自分を変えてくれるものを。
何もかもを壊す拳を包み微笑んでくれる者を。
未来へ響く希望の唄――叫びを掻き消す唄声を。

※この作品はぶなしめじさんの作品キャラクターと一部コラボしています
未読の方はぜひあちらの作品もご覧ください
（ご本人からの許可も得ております）
※完結しました

目次

本編

はじまりの大地――1
英雄―ぎせいしゃ―――5
バケモノの証明―ノイズギアー――10
戦士に架せられるもの―フォア・ザ・ピープル―――17
疾走する本能―きけんなちから―――23
本当に求めるものは―にちじょうと―――33
戦士の力―さよなら、にちじょう―――41
力と強さと戦い―ノットイコール―――50
握られない拳―こころつなぐもの―――58
変身―けついとかくご―――65
並び立つ防人―ダブルライダー―――74
各々の変化―いっぽまえへ―――84
伸ばしきれない手―しんじたいココロ―――90
守るということ―ロスト―――96
守りたい、戦いたくない―キレイゴト―――102
手に入れたもの―しあわせ―――110
相棒への贈り物―ドナシュラーク―――118
ある意味全滅している二課―じょうしきとは―――125
開戦―めざめろ、そのたましい―――132
佳く澄んだ空の下―”あること”のはじまり―――138
切り札、そして疾風―ふたりの―――143
受け継がれる想い―アクセス―――152
金色の三つ首竜―マザーギードゥラ―――160

ZとΩの先に―みらいにひびけ― ―――――― 166
滅亡の黒鎧邪神―ハイパーゼロメガ― ―――――― 176
継槍―ガングニール― ―――――― 184
相対する恋心―ファイナルゲーム― ―――――― 192
英雄となった者―あいぼう― ―――――― 198
赤い瞳の古唄―つどいしねがい― ―――――― 203
終わりへ向かえ―ゼット・オン― ―――――― 211
Let the good times all―フィーネ―
220
登場人物紹介（随時更新・ネタバレ注意）
大地古唄（2／19 追記） ―――――― 224

本編

はじまりの大地

『二課にこい、大地(おおつち)』

二日前、最近ややご無沙汰になりつつあった友人に呼ばれ、彼はこの街に訪れた。

大地古唄(おおつちこうた)、２８歳。誕生日は８月１５日で血液型はＡ型。身長は少なくとも大学を出た時には１９８ｃｍ。体重は仲良くなくても教えられる９２ｋｇ。

趣味はツーリングで好きなものはライス＆ごはん。彼女いない歴は年齢と同じ。バイクが恋人としてカウントしてよいのなら未だラブラブ。

（……随分とガソリン代が高くついたな。後で弦十郎に請求しよう）

実家のある京都から東京まで、高速道路も使うことなくひたすらバイクで下道をのんびり走り続けた彼自身にも非があるように思えるが、しかし呼び出しが急であったこともまた事実。

友人――風鳴弦十郎は、相手の都合を無視して自分の都合に引き摺り込むような男ではない。確かにそれができるだけのオーラやカリスマはあるが、あくまで相手の意思を尊重する、真の意味での大人。

故に、古唄は文句を垂れながらも蒸し蒸しとした空気の中を走ってきた。時期の割に湿気の少ないこの頃ではあるが、逆に言えば湿気が少なくとも時期は時期。来月には梅雨を迎える５月現在、ライダーグローブの中はわずかに汗と湿気がこもりやすい。

（というか、そもそも二課ってどこだよ……。せめてマップくらい転送してくれてもいいだろ……。名前からして警察とか行けばいいのか？）

これだけ広い街だ、おそらく賑わいのある場所に行けばシティマップくらいあるはずだし、その途中で役場か目的地を見つけられれば上々といったところ。

恋人――ＺＺＲ１４００のカウルを見て、「俺の彼女はやはりこい

つくらい野性的な傷痕がなければならんな」と心の中で盛大にノロケるのはここらで中断し、黒いシステムタイプのヘルメットを被ろうとするが、あることに気付く。
（ん？　あっ、しまった呆けすぎた。前後に車停められちまってる。しかも間隔せまっ。ファック、ＺＺＲの取り回しの悪さを知らないのかッ！　ムダに高そうな外車乗りやがってッ！）
ＺＺＲ１４００の最小回転半径は３．１メートル。前方車両との幅はおおまかに見積もって１．４メートル。後方車両も同じくらいか僅かに広いくらい。両方足して３メートルになるかどうかというところ。
出られそうで出られなさそうな幅だ。少々イラ立ちながらも、古唄は冷静にこのまま前後車両の運転手を待つのは賢くないと判断する。
何せ明らかに今停めたばかりという様子だし、このあたりは飲食店が多く、時間もちょうどいい頃合いだ。きっとこの車の主たちもそのために停めているのだろう。となれば、戻るとしたら早くて３０分、遅ければ１時間程度はかかる。
（……やれやれ、これはもう俺もメシを食ってきた方がいいだろうか。戻ってくる時には空いていてくれるといいんだが）
盗難防止用のＧＰＳとアラームをチェック、ディスクロックを取り付けると、ヘルメットはミラーにひっかけておくべきか悩んだが、地元ならともかく見知らぬ土地では安心しきれず、持ったまま適当な店を探した。

◆

歩いて数分も経たぬ内に彼が見かけたのは、あるアーケード街の「ふらわー」というお好み焼き屋。
アーケード街と呼ぶには随分と狭い通路だな、と古唄は思ったが、片道式にしたら普通だろう。外観の割に店の扉の外から窺う内装は綺麗なものだった。
（ここにするか……。あんまり離れてもアレだし）

そのまま入ろうとするとぶつける頭を少し下げて店に入ると、テーブル席は埋まっていて、カウンター席だけが余裕のありそうな空き具合。

だが縦にも横にも大柄な古唄は、必然的に左右のスペースをとってしまうので、一番端の席に窮屈そうに座った。

「いらっしゃい、ご注文は？」

「豚玉三つ」

「豚三つね。ウチは少し大きめだけど、あんちゃん大丈夫かい？」

愛想のよさそうなおばちゃんがそう尋ねると、古唄はただ首を縦に振るだけで答えた。

「あいよ。飲み物はいいかい？」

また首肯。だがおばちゃんはそんなことを気にすることもなく、

「はいはい、じゃあちょいとおまち」と言って戻っていった。

口の下手な古唄にとって、ありがたい店員だ。いや、他に店員がいるようには見えないし、店主なのかもしれない。客も平日の割に入っているし、常連も多そうだ。

（雰囲気のいい店だ。これでお好み焼きも美味ければ、弦十郎の用事が終わるまで通いつめよう。あの電話の様子じゃ、きっと数日はかかるような用事だろうし）

胸ポケットからケータイを取り出して、履歴確認。今のところ、誰からも連絡があった様子はない。メールも同様。

弦十郎から連絡が入ったのが二日前の夕方。着替えや生活必需品もいくつか持ってこいと言われたことから、一日や二日で終わるような用事でないことはすぐに悟って、昨日の日中はほとんど買い出しとバイクのメンテナンスに費やした。

京都を出たのは午後１１時過ぎ。どう考えても朝までの到着にはならないであろうということは先だって伝えているため、そろそろ向こうから連絡が来ると思っているのだが、音沙汰ない。こちらからかけるべきかと悩んでいたところに、ピリリリッ、というコール音が鳴り響いた。

『よう大地。東京にはついたか？』

着信から間を置かずに通話ボタンを押したため、ディスプレイに映った相手の名前は確認できなかったが、予想通り弦十郎がその相手であった。
「東京にはな。お前が目的地を言わなかったせいで、年賀状とナビを頼りにお前の住んでる街の周辺をうろうろしてる。もっとも、お前の家を通り過ぎてからは適当に走りやすそうな道を走ったから迷子に近いが」
『近くに目印になりそうな建物はないのか？』
「一応、今は『ふらわー』ってお好み焼き屋にいる。えーっと……近くには何があるだろうな。わからん。店を出たらまたそれらしいものを見つけて連絡しようか？」
『いや、こちらから迎えを寄越そう。もっともお前のことだ、どうせバイクで来たに違いない。だから特別に専用のトラックも出してやろう』
随分と太っ腹な話だ。
『二課についてはお前が到着してから詳しく説明しよう。迎えはおよそ４０分ほどでそちらに到着するが、慌てる必要はない。ゆっくりメシを食ってから合流してくれ』
了解、という返事を返す間もなく、通話が途切れた。
おそらく、これもまた彼の気遣いなのだろう。しかしいくら口の下手な古唄でも、返事くらい返せるのだが、弦十郎の中では古唄のコミュニケーションレベルはかなり低評価であるらしい。
（……とりあえず会ったら少しくらい文句を言ってやろう）
「はいお待ち、豚玉３つね」
「……これならもう少し食えるな。ミックス１つ追加」
一時間後、豚玉３つとミックス１つに加え、さらに餅チーズ２つとイカ玉２つを完食しきった古唄は、それを『腹８分目』と称し店を出た。

英雄―ぎせいしゃ―

（まるでＳＦだな。なんだこの施設は。あれだ、きっとこの建物はその内ロボットとかそんな感じのものに変形するに違いない）

食事を終えて店を出たあと、黒服の怪しげな男たちにいきなり声をかけられ、特に事情も聞かずここまで黙ってついてきた古唄は、その施設の常識外れぶりに驚いていた。

フィクション作品に縁のなかった古唄は、子供時代に見ていたヒーローモノにおいて地下施設がことごとく悪の組織のアジトであったことを思い出したが、さすがにそんなベタな、と内心苦笑いしていた。

確かに黒服の男たちはご丁寧にもサングラスまでかけて「それっぽさ」を演出してくれてはいるが、それでもたかだか８人。

古唄思考では「３０人未満＝戦う意思がまるでない」であるため、彼らが悪の存在であるという思考は切って捨てられている。

もちろん、そんな思考が世に通用するのなら世界中は善人だらけなのだが、彼は愚かしくも自分の力を「一般的なレベル」だと錯覚しているらしく、無駄に一般人のハードルを上げている。

しかし、それをおかしいと思えないのも仕方のないことで、彼の友人――今回この東京まで彼を呼び寄せた人物もまた人間扱いしづらいアレなタイプの存在だ。そんな人間を友人に持てば、感覚が麻痺しても仕方がない……だろう、おそらく、きっと、たぶん。

「こちらへ」

やたらめったら長いエレベーターが止まり、黒服の男の一人が外に出てドアを押さえる。

こちら、と言う割に通路は直線一本道で、わざわざ案内されるまでもなく道筋はわかるのだが、そんな細かいことを指摘するのは面倒好きな人間くらいだろう。

何人かの黒服はここで別れて、一人がエレベーター前で待機、三人ほどはエレベーターに残ってまた上がっていった。

（エレベーターの奴は警備として、今また上に行った奴は地上勤務なんだろうか？　仕事だろうとは思うがご苦労なことだ。上に行った

時また会えたらのど飴のひとつくらい差し入れようか）
そう思いながら、エレベーターからでも見えていた扉の前まで歩いてきた古唄は、自動ドアだと思われていた扉がまったく動かないことを疑問に思った。
横にある装置を確認すれば誰がどう見てもカードロック式のドアだとわかるのだが、それをうっかり見落としてしまった古唄は、とんでもない暴挙に出た。
「……ふんッ！」
右手につけていたライダーグローブを外し、力任せにドアを殴りつけたのである。
慌てて黒服たちがそれを止めようとした時には既に遅く、どう見ても鉄板数枚分の幅と強度がありそうなドアは見事に貫通、開けられた穴に手をかけてドアをスライドさせた。
（殴って壊れるドアとか警備ヌルいな）
そもそもドアを殴って壊せるような奴は限られているし、ましてそれを実行した奴にそんな指摘はいれられたくない――という壮絶なツッコミが黒服数人の内心でシンクロしていた。
ドアの向こうにいた何人かは驚愕・敵意・警戒という好ましくない三拍子を視線に織り交ぜて古唄に向けるが、そんな彼らを一人の男が制した。
「やれやれ……お前は本当に単細胞だな、大地。全員、警戒を解け。敵襲でもなんでもない。バカがバカをやらかしただけだ」
溜息ながらに指示を出す赤いライオンのような髪型をしたその男こそ、風鳴弦十郎――古唄をここに呼びだした張本人だ。
（……いくら故障しているドアを開けるためとはいえ、やはり壊すのはまずかったんだろうか）
ほぼ新品と同じくらい役割をきっちりと果たしていたドアを、開かないからといってロックの可能性も考慮せず破壊しているあたり、故障しているのはむしろ古唄のおつむではないのか。
そんな的確極まるツッコミを決して口には出さず、黒服たちは弦十郎に一礼してその場を後にしようとしたが、それを古唄が呼びとめ

た。
「あ、待ってくれ」
「はい？」
「……これ、よかったら」
そう言って差し出された野球用のグローブ並みに大きな掌の上に乗っていたのは、プラスチック製の包みにレモンの絵が描かれた少し大粒ののど飴。
運転中の眠気覚ましにと携帯しているもので、レモン味が少しきつくて刺激の強い味だが、それもちょっと強いミント程度のもので、もちろんのど飴なのだから喉に支障が出るようなことはない。
「これはどうも、ありがとうございます」
その場にいた数人の黒服たちがひとつずつ古唄の手に乗ったのど飴を取っていき、今度こそ去っていった。
（あの男たちとは今日初めて会ったが、やっぱりいい奴らだったな。この施設のやつらが、みんなああいう奴らだといいが）
さすがに黒服サングラスばかりは嫌だが――などと思いながら、入口前の階段を下りてソファーに腰掛けた。
生憎とテーブルはなく、対面式にしては階段をはさんでさらにスペースがあるため、彼は弦十郎の横に座り、お互いの間を区切るように愛用のヘルメットを置いた。
「さて……まずは長旅ご苦労だった。何か飲み物でも出そう。何がいい？」
「さっきメシを食ったばかりだ。三食以外であまり飲み食いしすぎるのは避けたい。気持ちだけ受け取っておく」
「そうか、じゃあさっそくだが、お前をここに呼んだ理由を話そうか……」

◆

「特異災害対策機動部二課、ね。京都（こっち）じゃノイズなんてそうそうお目にかからないから、一課すらただの税金イーターだと思ってたよ。い

や、一課だってやる時ゃちゃんと仕事してんのはわかってるけど」
「主な仕事は一課と同じくノイズ発生の際の避難誘導およびノイズの進路変更、あとは被害状況の処理などだが、決定的な違いは今も説明した通り『シンフォギア・システム』の存在だ」
シンフォギア・システム。単純にシンフォギアと称してもよい。
こちらの物理法則を無視し、人類のみを無差別に襲う別位相の存在――認定特異災害『ノイズ』は、基本的にあちらが攻撃する瞬間以外はこちらからの攻撃を受け付けず、触れたものを炭化させる。
シンフォギアはその炭化を防ぎ、別位相に存在する彼らをこちらの位相に合わせるよう『調律』することで任意攻撃を可能とする対ノイズ戦における唯一の兵器である。
（歌を力の根源として起動し、現代の対ノイズ戦において有効性を見出せる無二の兵器……か。だが今現在『シンフォギア』を起動できる奴のリストを見る限りじゃ、そのほとんどが……）
女性。年齢を確認すると、低ければ小学生すらそのリストに名を連ねている。
（……胸糞悪い。女や子供を戦場に駆り出すなんて考えるだけで鬱になる。そういうのは大人の男がやることだ……後ろで花冠を作りながら笑う女や、無邪気な表情で夢を語る子供を守るのが大人の男の役目。それなのに、このシステムはまるで……！）
「正義感の強いお前には残酷な話だろう。俺だって、本当は女性や子供に戦わせることなんざ御免だ。できることなら俺が奴らと戦いたい。だが、奴らの脅威性を前に俺たちではあまりにも無力……。故に、被災者（ぎせいしゃ）を減らすためには……」
「英雄（ぎせいしゃ）を造るしかない、ってことか……。チッ、吐き気がする。だからヒーローモノは観たくないんだ。誰も彼もが好き勝手言って英雄の立場と功績ばっかり見やがる……」
片足を抱え、顔を俯かせながら額を膝につける古唄。やりきれないことや、納得のいかない出来事に直面した時の、彼の癖だ。
悔しげな表情を隠すように下を向いているが、空いた片手はいつも血が滲むほど強く握りしめられていて、その頬には一筋の線が走る。

「……弦十郎。俺の性格を知ってるお前が、それを俺に教えるってことは……いいんだよな……？」
「ああ。大学時代に特異災害科学について専攻していて、フィジカル面でも俺とタイマンを張れるお前なら、ノイズに対抗できるだけの精神と肉体を持ち合わせているはずだ」
「成功すれば……この世から英雄（ぎせいしゃ）は消える……！　そんなものはいらなくなる……！　俺がノイズを殺すバケモノになれば、俺以外の犠牲者はいなくなる。英雄（ぎせいしゃ）はこの世で俺だけでいい……!!」
黒曜石のような黒紫色の瞳をギラつかせながら、古唄はその身の内側に宿る憤怒と憎悪を滲ませるように言葉を洩らす。
既にバケモノになる覚悟はできている。いったいどんな手段を以てノイズに対抗しろというのかはわからないが、なんの策もなくただ戦えというわけではないはずだ。
「で？　具体的に俺にどうしろってんだ、なんか面白おかしい武器でもくれるのか？」
「いや……大地、お前には……」

―ノイズになってもらう―

バケモノの証明―ノイズギアー

―生きるのを諦めないでッ！―

いつだったか、自分を助けてくれた人がいた。

朦朧とする意識の中で、「死ぬな」「目を開けてくれ」と何度も生を叫んでいたことを未だに覚えている。

あの日――あの人が自分に遺してくれたもの。あの人がくれた想い。それは、力となって今の自分を包んでいる。

Φ　バルウィシャル　ネスケル　ガングニール　トローン　Φ

不意に頭の中に浮かんだ唄が、無意識に声として――唄声として放出されたと同時に、胸の傷痕が橙色に輝き始めた。

何が起きているのかなんてわかるわけもない。ただ、何もかもがさっぱりわからないこの現状でも、彼女――立花響の胸にはたったひとつだけ不協和音に掻き消されない強い音色が響いていた。

「ぐぅ……ッ！　うっ……うウぅッ……！　うぅウぅぅッ……!!」

背中から飛び出す巨大なナニカ。熱くて熱い何かが全身を駆け廻り、己が意識を明確に朦朧とさせていく。

「ああァあぁァァぁぁあアッ!!」

だが、薄れゆく自我を抑え留めるものは、自分の後ろで不安そうに、けれど自分を信じてくれている少女の存在。

明確に朦朧としていた意識が、朦朧と明確になり、目の前の出来事を、自分に起きている現象を再認識する。

「え……ええっ!?　な、なんで!?　わたし……どうなっちゃってるの!?」

橙と黒でカラーリングされたスーツの上から、白を基調として同じく橙のラインが引かれた武装が各部に装着された姿――明らかに普通ではない現状に困惑する響だが、そんな彼女を恐れもせず、守るべき少女は言った。

「おねーちゃんかっこいー！」

自分がどうなってしまったかわからない、明らかに普通でなくなっている自分を、少女はその一言で繋ぎとめてくれた。
明確に明確な意識は、既に自分の身に起きていることが『異常』だということを理解していた。それでも、わかっていることがある。
(そうだ……なんだかよくわからないけど、ひとつだけ確かなのは……力持つ者がこの子を助けなきゃいけないって、ことだよね!?)
問いかけたのは誰でもない自分自身――あるいは、かつて自分に生きろと叫んでくれた人物か。
差し伸ばした手のひらを、こんなにも変わりきってしまった自分の手を、少女は恐れることも疑うこともせず繋いだ。この手だけは離せない。絶対に絶対、どんなことがあっても、離すことはできない。
強く踏み込んだ足は、自分の予想を大幅に上回る力でこのやたらめったら高い建物の屋上を飛び降りた。
「ええっ……えええええっ!?」
確かに逃げようとは思ったが、まさかたった一回の踏み込みでこんな力が出るとは夢にも思わず、慌てながら叫ぶ響だったが、落下しながらも咄嗟に体勢を整え、自分に宿る力が腕の中の少女を潰してしまわないよう気を遣る。
どうにか着地に成功したが、今度は先程までいた屋上から飛び降りてくる大量のノイズ。どんな力が湧いても、相手はすべてを炭素化させてしまう特異災害だ、人が災害に抗う手段など持っているわけがない。
故に、響はただ逃げることしかできなかった。その身を射出し、襲い来るノイズを横にステップしてかわそうとしたが、やはりこの姿の影響か力が出過ぎる。自分の力を制御しきれない響は、勢いよくすっ転んでバウンドしながら吹っ飛んでいった。
(危なかった……力を入れ過ぎなくてよかった……!　ノイズから守るためでも、この子にとって危険なのはノイズだけじゃないんだ。わたしのこの手も、この子には凶器なんだ……!)
またも迫るノイズの自身を射出する攻撃。横へのステップはまずいと思い、今度はジャンプでかわした響だが、今度は跳びすぎてタン

クにぶつかってクレーターを作ってしまう。
幸いにして、タンクにぶつかったのは自分の背で、少女をサンドイッチにすることはなかったが、足場のないここではすぐにまた落ちてしまう。
慌ててタンクにの側面に取り付けられたパイプを掴んで落ちまいとするが、次ぎ次いで現れたノイズはこの建物と同じほど大きな巨人型。
（こ、こんな時に大型ノイズ!?）
逃げ場のないここでなんてタイミングの悪い、と思いながらも、相手の巨腕による攻撃が向けられると迷うことなくそこを離れ、足がもつれそうになりながらもどうにかこうにか着地に成功。
だが、ここまで続いたビギナーズラックもこれまでと言うように、丸いカエルのような動きをする小型ノイズがプレス攻撃を仕掛け、響たちは逃げ場を失う。
もうダメかと思って本能的に拳を突き出したその時、その拳を叩きこまれたカエル型ノイズが己が身を炭素と換えて砕け散った。
（わたしが……やっつけたの……!?）
どこからか聞こえる二つの音。
その質からして、おそらくはどちらもバイク。
ノイズの群れをかき分けて、響も知る『ある女性』の乗ったバイクがこちらに向かってきていた。
（あれは……っ!?）
自分の横を通り過ぎ、決して安くはなさそうなバイクを盛大に乗り捨てた女性は、空中で自分と同じような姿に変身し、ノイズたちに立ち向かっていった。
それとほぼ同時、もう一人のライダーが現れて響と少女の横に停車する。
「呆けてる場合か！　死ぬぞッ！　その子と一緒に乗れッ!!」
真っ黒な車体に緑の爪痕が刻まれたバイク――ＺＺＲ１４００に乗ったその男は、後部シートを指してそう叫んだ。
「は、はいっ！」

バイクは基本的に二人乗りが限界だが、響は少女を落とさないよう自分と男の間にはさみこむように乗せ、それとほぼ同時にバイクの怒号にも似たマフラー音が鳴り渡る。
パワフルな外見や走行力とは裏腹に、驚くほど振動が少なく安定性のあるＺＺＲ１４００は、その大きなボディも相俟って二人乗りも軽々とこなせるジェントルマンだ。
少々スペースに無理は出るがそれは三人乗りの際にも変わらず、小柄な女子高生と小学生を乗せるほどならば、紳士的な態度で「随分と軽いお嬢さんだ」と笑いながら走ってくれる。
「とりあえずはノイズから離れるだけだ！　あれを駆除したら家に帰してやる!!」
「く、駆除って……相手はノイズですよ!?」
「だからこそだ！　ノイズの相手は、同じバケモノである俺がやる!!」
ノイズから１００メートルほど離れたところでバイクを停めた彼は、バイクのエンジンキーを引き抜いて、それを左腕のウォッチベルトに差し込み、捻ると同時に叫んだ。

Ω　――――ッ!!　――ッ！　――――ッ!!　Ω

まるで野獣の咆哮に似たそれを叫びながら、男の全身が黒に塗り潰されていき、ウォッチベルトからキーを引き抜く動作に伴って全身を覆う武装が展開された。

『チッ、やっぱエンジンが温まりきってなかったか。変身時間が短すぎる……!』
ウォッチベルトに刻まれた時間は『１：３４』……だんだんとカウントを減らしていくそれは、間違いなく彼の変身限界を表していたが、彼は落ち着いた調子で二人に向き直った。
『君たちはここにいろ。そのバイクの半径５メートル以内にはノイズの位相差障壁を無効にし、攻撃を遮断する二重構造の不可視バリアが

展開されている。そこから動いたりバイクを倒したりしなければ、ひとまずは安全だ』
「け、けどあなたは……ッ！」
『大丈夫だ。奴らの炭素転換は俺には通じないし、俺からの攻撃も奴らには通用する。なにせ俺は――』

―ノイズだからな―

黒紫のゴーグルバイザーを煌めかせて一歩を踏み出した男は、ノイズの群れへと一直線に突っ込んだ。
（ノイ……ズ……？　でも、あの人はわたしたちを……！）

◆

『『ノイズギア・システム』……より正しくは対ノイズ用兵器・試作型。シンフォギア・システムを見出すよりも早い段階に見つけ出されたものだが、人体にノイズ因子を打ち込むというところが倫理的観点から問題視され、研究が中断されていた』
『シンフォギア・システムとは異なり装者の身体能力を向上させる機能はないけれど、自身がノイズと同じ存在となることで同位相の彼らを攻撃でき、炭素化においてはそのプロセスを逆ベクトルから実行することで炭素転換を無効にできる』
『人間がノイズを殺せないのなら、ノイズがノイズを殺せばいい……ってことか。なるほど、ムカつくほど理に適っている。倫理的観点から問題視された、ってとこも含めてな』
『そしてもうひとつ、このシステムには大きなメリットとデメリットが存在する。シンフォギアとは違い、このノイズギアには『適合者』というものは存在しない。これを装着できる可能性だけなら、誰にでもある』
『ただし、その『可能性』を『現実』にできるのはシンフォギア装者よりもさらに稀少。おそらくこの地球上に、弦十郎君とあなた以外だー

れもいないわね』
『どういうことだ？』
『言っただろう。ノイズギアは『ノイズの因子』を人体に打ち込むと。シンフォギアは聖遺物を加工し、アクセサリー状にして携行可能だが、ノイズギアは『人体』が『装甲』に変異する。ノイズ因子は一種の猛毒でもあり、体力の無い者や健康な肉体を持たない者はすぐに毒に蝕まれ、死亡する。運よく順応しても、ノイズの本能を抑え込める精神を持たなければ人を襲うようになる』
『……なるほど、だから俺か。お前と俺が喧嘩したら、十中八九お前が勝つ。仮にお前がノイズの因子を受け止めきれずに暴走したらまさに最強最悪のノイズになる。だからこそ俺をノイズにして、いざという時に弦十郎が俺を仕留める……賢いな、反吐が出る』
『すまない……恨みたければ、恨んでくれて構わない。そうされて然るべきことを、俺はお前に頼んでいる』
『構うかよ。俺がノイズになることで、女子供が助かるなら……戦うことが罪なら、俺が背負ってやる！』

◆

『ウガぁぁあアぁァァッ!!』
サメのように凶悪な口部のクラッシャーを開いて獰猛な雄叫びをあげると、全身から凶悪な刺や刃がむき出しになり、ノイズの群を殴り、蹴り、引っ掻き、引き裂き、咬み千切る。
とても戦士とは思えない、まさにバケモノのようなバトルスタイル。だがそれ故に規則性の生まれない動きがノイズたちを困惑させ、一撃ずつに重みを与えている。
（なんと禍々しい戦い方だ……！　元人間とはいえ結局はノイズ……奏を殺したあいつらと同じ存在ということか……!!）
『ウオぉォおァあぁあァぁァッ!!』
戦闘と小奇麗に呼ぶにはあまりにも相応しくない――蹂躙、と称すべきそのスタイルは、彼自身が得意とする格闘スタイルとはかけ離れ

ている。

技術などなく、ただ力任せに、ただ闘争本能の赴くままに、敵性と判断したものを嬲り殺しにしていくその力の使い方は、まさに英雄（ぎゃくさつしゃ）。まさに英雄（バケモノ）。まさに英雄（げどう）。

誰も求めようとはしない暴虐なる英雄（ぎせいしゃ）の絶叫は、彼の脳裏に反響する不快な不協和音が治まるまで終わることがなかった。

戦士に架せられるもの―フォア・ザ・ピープル―

『グるルァぁあアぁァァ……ァ、あ……ァ、ウ……』

ノイズの掃討を終えて絶叫を絶やすと、彼――古唄の全身を覆っていた装甲が解除され、元の大男の姿に戻る。

◆

（あとは全て二課任せ……いや、ゴミ処理と逃げのびたノイズの調査は一課任せか。なんにせよ俺の役目はひとまず終わり。あの子たちの親ももうじき来るだろうし……いや、あのガングニールの子の方は二課で事情聴取と身体検査だな）

タイムウォッチに刻まれている時間は余裕の『０：４１』――僅か１分とかからず殲滅することができたのは、やはり彼のみならず青い髪の少女――風鳴翼の力あってか。

あちらも既にギアを解除し、到着した二課の男と険しそうな表情で話し合っていた。

（さて……そろそろ退却したいところだが、あの子たち早くバイクから退いてくれないかな）

早々にこの場を立ち去りたい古唄ではあるのだが、未だにバイクに跨っている二人の少女が邪魔でバイクに寄ることができない。

なぜなら、あの英雄（バケモノ）としての姿を晒した今、不注意に近づくのは彼女たちに無用な恐怖を与えるだけ。それを避けるためにも、彼女たちがその場を離れてくれるのを待つしかなかった。

（……飴、残ってたかな。レモンのど飴もう食っちまったしなぁ。ミルクミントのは……あ、バイクだ。やらかした）

どうにも手持ち無沙汰になってしまい、気抜けしたように座り込むと、彼の前にひとつの人影が現れた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

それは、先程あの橙色のシンフォギアを纏っていた少女、立花響。戦いを終えてバイクに戻ることなく近くの建物に凭れかかって座り

込んだせいか、心配そうな視線を向けている。
　しかし、その心配は古唄にとってどうでもよかった。問題なのは、彼女がなぜ自分に声をかけるのか。恐れるのではなく、自分の身を案じてくれているのか。そちらの方が重要だった。
「元々、体は頑丈な方だからな。というか、怖くないのか？　俺はノイズだぞ」
「でも、さっき触っても大丈夫でしたから。それに、人を襲うような人とは思えませんし」
（まぁ……そりゃシンフォギアを纏ってたら炭化しないだろうよ。そうでなくともノイズギアを展開してない時はノイズ因子を宿してるだけの普通の人間だけど）
　ただの人間とは言うが、シンフォギアと違ってノイズギアは装者の身体能力自体は変わらない。単に炭素化耐性と位相調整が可能で、ノイズ因子が装者の性格を攻撃的にさせるというだけだ。
　あれだけのノイズを殲滅した身体ステータスと格闘能力は、完全に古唄のスペック頼りなのである。無論、全身鎧の形状をとっているだけにそこそこの防御力はあるし、その硬度が攻撃力に加算されることもあるが。
「さっき、助けてくれてありがとうございました！　自分の身に何が起こったのかすらさっぱりで、パニックになっちゃってて……翼さんとお兄さんが助けれくれなきゃピンチでした！」
「……礼を言われるようなことをした覚えはない。俺はただ、君みたいな女の子に戦ってほしくなかった……ただそれだけだ。あとは、ノイズが憎かったってのもあるしな」
「それでも、お兄さんのお陰で助かったことには変わりありませんから！」
　屈託のない微笑みを古唄に向ける響。シンフォギア装者に代わってノイズを狩るために己の肉体をノイズに変えたことで、絶対に得られるはずのないものだと思っていたもの。
　元々あまり愛想もいい方ではなく、身丈の大きさや口数の少なさが災いして人に好かれるタイプではなかったが、ノイズとなったこと

で、手にしていたはずの微笑みすら壊れるかもしれないと思っていた古唄にとって、自分の手に乗った新しい微笑みは、彼の心を大きく揺さぶった。
「……お兄さんじゃない。大地古唄だ。できれば、名前で呼んでくれ。お兄さんは少し、むずがゆい」
「大地、古唄……古唄さん、ですね！　わたしは立花響って言います！　古唄さんはこの近くに住んでるんですか？　できれば今日のお礼が――」
「やめとけ。俺みたいなオッサンと一緒にいるところを学校の連中に知られて妙な噂を立てられたくないだろ。会うのもきっとこれきりだしな。今日のことは、早い内に忘れた方が立花のためだろう」
　明確な拒絶。しかし、その言葉の端々から滲む古唄の思い遣りや優しさは響にも十分すぎるほど伝わっていて、だからこそ彼女も引き下がれなかった。彼に、真心を込めた「お礼」がしたかった。
「そんなことありません……忘れたくなんかありません！　翼さんと古唄さんがわたしとあの子を守るために戦ってくれたこと、忘れたくありません！」
「……なら、せめて君が使った力のことくらいは忘れろ。あれは人の命ひとつを助けたが、それは同時に人の命ひとつを消すことができる力だということを証明している。君はそんな力を、安易に使いたくはないだろう？」
　眠たげな視線はブレることなく、古唄はぼんやりと響を見上げて忠告すると、ようやく立ち上がって彼女の頭を撫でた。
「君の優しさと勇気は、俺が継ごう。君に代わって、俺がノイズと戦おう。だから立花は堂々と日向を歩き、温かい陽だまりのような日常を過ごすんだ。それが俺にとって、何より嬉しい「お礼」だ」
　じゃあ、と言い残して古唄がバイクの方へ歩んでいくと、それを追おうとする響の前に黒服の男たちが立ち塞がり、その両手にいかつい手錠をかけた。
　立花響、１５歳。思い当たる節がなくもない。主に器物損壊とか。しかしそれにしたって何故おまわりさんじゃなく黒服なのか、そして

彼らの奥で「貴女を逃がすわけにはいかない」とか言っている先輩兼恩人兼防人はどうして助けてくれないのか。
いろいろと困惑する中、彼女は抵抗する暇も与えられず車に乗せられ何処(いずこ)かへと連れ去られていった。
(……あっ、事情聴取と身体検査のこと言い忘れた。まぁいいや、別に戦力に加えようとか思ってないだろうし)
そんな彼の思いは、後日見事に、これでもかというほど盛大に裏切られることになる。

◆

(弦十郎に許可を得て、二課の一員ではなく民間協力者という扱いにしてもらったはいいが……屋根無し(ホームレス)になるくらいなら二課に部屋をもらうべきだったか)
響との邂逅から2時間後、古唄は愛機に跨りながら特に宛もなく都内を走り回っていた。
弦十郎から『ノイズが頻繁に現れるのは私立リディアン音楽院高等科の周辺』だと聞いているため、そう遠出はできないが、しばらく屋根無し(ホームレス)に近い生活を強いられる以上、夜風で体を冷やすのは眠気覚ましに丁度いい。
それに、ノイズ因子を打ち込まれた影響か、彼はノイズが出現すると直感的にその時間と場所を察知することができる。そういう意味でも、車より小回りが利き、徒歩よりも高い機動性を持つバイクは常に乗っていた方が都合がいいのだ。
(いや、二課に加わればノイズとの戦いの際にも色々な制約がつく。強引に戦闘に加入すれば、俺はあくまでも『所属不明のシンフォギア装者』扱いになるはずだ)
シンフォギアも相当のものだが、ノイズギアの存在はそれ以上に認知度が低い。たとえシンフォギアの存在を知る者がいても、ノイズギアの存在は知らない者が多いほどだ。
だからこそ、二課側の戦力でありながら二課所属でない古唄の存在

は極めてステルス性の高い戦力。民間協力者としての扱いもあくまで書類上のもので、ほとんど古唄と弦十郎の口約束による協力関係だ。

ノイズである以上、聖遺物が起動の際に歌に反応して発生させるアウフヴァッヘン波形もなく、ノイズとしてのエネルギー反応は相手のノイズに紛れて捉えられない。

(しかし……あんな普通の子でもあれほどの力を発揮するなんて、やはりシンフォギアは危険だ。風鳴……とか言ったか。本当はあの子も戦わせたくはないが、彼女は幼い頃から戦うための術を学んでいる。今さら何を言っても逆効果にしかならなさそうだった。それに、彼女はきっとノイズという存在そのものを……)

風鳴翼の経歴は、簡易的な資料と弦十郎の口から知った。二年前のコンサートで、彼女は自分の半身とも呼べるような親友をノイズによって喪った。そして、その親友もまたシンフォギア装者であり、そのシンフォギアは――。

(残酷、だな……。風鳴の親友がかつて纏っていたガングニールというシンフォギアを、どういうわけか今まで戦いなど知らずに日常を過ごしていたはずの子が所有している……。風鳴の視点から見れば、立花の存在はきっと……)

古唄はそれ以上、そのことについて深く考えるのをやめた。

きっと、翼が響に心を開くことはないだろう。彼女たちを繋ぐものは、今のところガングニールひとつ。響がなぜそれを所有しているかは不明だが、彼女がこのまま日常に戻れば、翼は何も言うことはできない。

彼女とて、わかっているはずだ。戦場(いくさば)に立つ者が守るものは、いつだってその後ろで怯える者たちであること。人を防(まも)るからこその防人なのだということを。

(風鳴には悪いが、あの子の日常はあの子のものだ。強い力を『戦い』のために振るう奴が、日向を歩く普通の子を責めたりしちゃいけない。勝手な情でその暗黙のルールに背けば、その時は……)

真っ黒なシステムヘルメットのシールドの向こうに潜んだ黒紫色

の瞳が、僅か鋭くギラついた。

疾走する本能―きけんなちから―

（……結局、朝まで異常なし。いいことなんだが、どうにも眠い。ノイズなら眠くならないかと思ったが、そうでもないらしい。ギアさえ纏っていなければほとんど普通の人間と変わらないというのは本当らしいな）

ガソリンスタンドですっからかんになった愛車のタンクを満たしながらそんなことを考える古唄。

普通の人間は夜通しツーリングなどしていたら体力的にヘトヘトだろうに、それらしい疲れをまったく感じないことに一切の疑問を感じず『普通』を語る古唄を、彼を知る者が見ていたらきっと鼻で嗤ったに違いない。

「お待たせしました。お会計３２１３円になります。……３５００円からお預かりします。少々お待ちください」

お釣りを待っている間にキルスイッチをオンにし、サイドスタンドを左足で蹴り上げると、右手でフロントブレーキレバーを握ってギアをニュートラルへ。

今度は左足を地につけて右足をリアブレーキペダルにかけ、左手でクラッチを握りながらスタータースイッチを押す。字に直すと非常にめんどくさいプロセスだが、それなりに年季の入ったライダーならほとんど感覚的にやっている。

体が覚えるというのはまさにこういうことだろう。スタータースイッチを押した時の「キュルルッ」という小気味のいい音が、ぼんやりとしていた古唄の意識を明確にさせ、続く「グルルル……」という唸りが彼の表情を引き締めた。

「あ、よろしいですか？　こちら２８７円のお返しです。お確かめください」

お確かめください、とは言われるがそんなものを真面目に確かめるわけもなく、返された小銭を胸のポケットにしまって発車する。

大型二輪と聞くとどうしても爆音をブチ撒けるイメージを抱きがちだが、この紳士あるいは淑女たるＺＺＲ１４００にそのような心配

は無用。
（静かだ……。ＺＺＲのマフラーは基本装備で十分すぎるほどセンスがいいのに、どうしてみんな換えたがるんだろうか……）
　意外に意外を１０乗するほど、おそろしく静かなマフラー音と、脳筋っぽさを感じさせない安定性とスマートさに満ちた走りは走行中だというのにうっとりしてしまうほど整っている
　女性で喩えるのなら、やたら胸や尻に肉がいきすぎず、かといってぺったんこでもないスリム体型。しかしそのスリムさの中にはしっかりとした土台があり、スポーティな魅力をありありと見せつける。まるでどこぞの防人のように。
（まぁ、風鳴よりは胸（パワー）あるか……）
　きっと彼はこれまでもこれからもその口数の少なさに助けられることになるのだろう。
（それより、問題は日中の予定だな……。ノイズもそうだが、主に金と食事と風呂……と、昨日の子が結局どうなるか、だな。後で弦十郎に確認しておこう。まぁ、きっといい方向に計らって、今頃は家に帰っているだろうが）
　彼が口に出せば言葉を偽り損ねる性格であることは、昨夜の響との会話で知れている。
　彼女の持つ力が強大であることは理解している。彼女がそれを正しいことに使える心を持っていることもわかっている。それでも、昨夜ほんの少し言葉を交わしただけの彼女を必死に戦場（いくさば）から遠ざけようとしたのは、言葉を偽れなかったから。
　もっと巧い言い方はいくらでもあったはずだ。偽りが下手ならば言葉の伝え方を変えればよかったはずだ。だが彼はそれができなかった。嘘や誤魔化しが下手すぎた。何より、彼女に平穏に過ごしてほしいという想いが強すぎた。
　だから彼は、自分の本心を全力で伝えたのだ。必死に、必死に、ただひたすらに、「幸せな日々を送ってほしい」という想いを、全力で。
（……良い子、には違いないんだろう。色々と危うかしいが、誰かのために必死になれる気持ちは、たとえどんな言葉にも汚せない。素晴ら

しいことだ。……行き過ぎなければ、だが）
今の彼の心を占めているものは、そのほとんどが響のことばかり。なぜか、放っておけない。まるで今すぐにでも崖から落ちそうになっている仔犬を見ているような、そんな感覚が彼の心を締め付けていた。
まだ会って一日も経っていない相手に対して言う言葉ではないが、彼の心に少しずつ灯りかけているその感覚は、まさしく『親心』……無茶をしすぎる娘の一挙一動にハラハラする父親のそれと同じだ。
（俺があの子くらいの歳の頃は……ああ、ダメだ。俺の青春時代はアテにならん。灰色……というより、赤色に染まりすぎている。なぜあの頃は喧嘩などを繰り返して……ああ、親父のせいか）
彼の青春時代に、いい思い出はほとんどない。正当防衛とはいえ、１０歳の頃に父親を殺してしまったのが尾を引いていたのだろう。
小・中・高・大と通しても、弦十郎を除いて『友達』といえるような存在はいない。それは今でも変わらないが、少なくともバイクの免許をとってＺＺＲに跨るようになってからは、地元にいる時間が減って幾許か楽になった。
いっそ関西を離れて誰も自分を知らないような地で全てを一からやり直すかとも考えたが、彼の懐はそこまで潤沢ではない。自動車学校に通う金とバイクを買う金で、貯金をほとんど使いきってしまったせいだ。
今でも出かけた先々で短期のバイトを繰り返して実家の母親に仕送りはしているものの、貯金に関してはほとんどすっからかん。残高は１０万もあったかどうか怪しい。
（彼女のご両親は、さぞ素晴らしい人なのだろう。彼女みたいな普通の子が、あんなにも優しく勇気のある行動をとれるということは、それに相応するだけの親でなければありえない）
ふと脳裏に過ぎったのは、親の腕の中で抱かれて微笑む響の姿。きっと幸せになってくれる。きっと平穏で優しい日向を歩いてくれる。そんな、古唄の心からの願いが溢れ出た時だった。

――――――！

（この感覚……ノイズが現れたかッ！）

古唄の全身の体毛が逆立つような、厭な寒気。ノイズの出現パターンを彼の体内に存在するノイズ因子が感知し、仲間（ノイズ）の元へと向かおうとしているが故のものだ。

この感覚に頼ることで、古唄はノイズのいる方向と距離、おおよその数を知ることができるのだ。

『大地、聞こえるか？　ノイズが出現した。場所は――』

「聞こえている。俺も感知した。幸いにも俺が今いる場所からそう遠くないし、相手の数も少ない。俺一人で十分だろう」

『だろうな。我々もそう判断している。ただしくれぐれも油断はするな。お前がいかにノイズギア装者であろうと、相手は特異災害。緊急の際には翼も向かわせよう』

必要ない、と言いたかったが、やめた。確かに今感じられるノイズの数は古唄一人でも十分相手にできるし、むしろ余裕があるほどだが、油断はできない。

というか、そもそもこの周辺で起きるノイズ発生というのがリディアン周辺という時点で、『災害』らしくない。明らかに人為的なものだ。となると増援くらいは当然あるだろう。むしろその増援が本命でこっちは囮用のエサかもしれない。

そう考えると、この罠に敢えて乗るのは自分の役割。単なる思い過ごしならそれに越したことはないし、思っている通りなら翼には間を置いて出てきてほしい。

「……了解した。では危険時にはこちらからコールしよう。ワンコールでもあれば救援要請と思ってくれ。そういう時には喋る余裕なんて無いだろうからな」

『わかった。ただしノイズを掃討した場合にもコールを入れること。一課をそちらに向かわせる。本来なら昨夜するはずだったメディカルチェックもしていないからな』

「……風呂と食事を用意してくれるのなら従おう。でなければ逃げ

る。あの施設は二課のテリトリー内だからな、俺にとってはデメリットだらけだ」
　既に対象は目視可能な距離。周囲に人の気配はないが、いくつか手遅れになった跡――粉末状の炭が残されており、古唄はギアを手際よく落としながらノイズの居場所と数を改めて確認する。
　至近距離にそれらしい気配はゼロ。前方２００メートル地点に４体。そしてそのさらに５０メートルほど奥に中型のものと思われるやや強い反応がひとつ。人の気配はなく、街の方からは警報らしき音が聞こえる。
（この距離なら……）
　ノイズから少し離れた木陰にＺＺＲ１４００を隠し、停車してからギアをニュートラルに入れる。
　ローギアに入れた状態でもバイクに害はないが、エンジンをかける時にローギアでセルを回していきなりバイクが飛び出していくという経験は、ライダーなら一度はやらかすミスだ。
　特に坂道停車をする時はローギアで停車するせいでかなり焦る。古唄自身、免許取りたての頃は何度もやってＺＺＲのカウルに擦り傷を作って後悔したが、それが経験というものだ。
　エンジンキーを抜き取って左腕のウォッチに差し込んで捻ると、ウォッチから『キュルルッ』という音が出て、続くように古唄の叫びが響き渡った。

Ω　――――ッ!!　――ッ！　――――ッ!!　Ω

　叫びとほぼ同時にエンジンキーを引き抜くと、ウォッチから下手な空ぶかしの音が響き、一度目の音でインナースーツを、二度目で四肢、三度目で胴体の装甲が展開され、四度目の少し強いマフラー音で頭部装甲が現れた。
　細長の鋭いゴーグルバイザーを除いて、全身が黒一色で塗り潰されていて、とてもではないが正統派ヒーローらしい外観とは言えない。
『ウガあアぁぁあァッ！』

獰猛な野獣のような叫びを上げながら、ノイズへと向かっていく古唄。大柄な外観からは想像もつかない身軽さと、障害物をするすると抜けていく独特の動きは、猿とトカゲを兼ね合わせているかのようだ。

１００メートルを僅か7秒で駆け抜けるその尋常ならざる素早さは、時速に直せば約４０ｋｍ／ｈ程度。軽く世界新だ。

『グルルるル……!!』

両手の甲から鋭く伸びた長い鉤爪が、小型の人型ノイズを瞬時に切り裂き、彼の背を狙った蛙型ノイズに対して、彼は振り向きもせず蹴りを叩きこみ、上斜め後方に吹き飛ばされた先まで先回りしてこれも爪で一閃。

もう一体の蛙型ノイズが体を槍のように捻って射出したが、古唄はそれを鷲掴みにして引き千切る。残るは人型ノイズと、その向こうに構える紫色の葡萄のようなノイズだが、どういうわけか葡萄型ノイズは既に逃げの姿勢で、背中に生えたボールから新たな小型ノイズを撒き散らし、そそくさとこの場を離れた。

（まずい！　取り逃がした！）

野性的なスタイルになっているとはいえ、理性はしっかりと働いている古唄は葡萄型ノイズを取り逃がしたことに焦りを覚えるが、その葡萄型ノイズが残した小型ノイズも掃討しなければならない。

二課に連絡を入れなければ、と思ったが、よくよく考えてみればケータイはポケットの中。この姿になっている時はどこにあるのかすらわからないが、少なくとも装甲の内側ではない。なぜならこの装甲は古唄にとって『肌』のようなものであり、彼は裸同然の状態で戦っているからだ。

どうすれば、と迷っていると、不意にインカム型のアタッチメントが頭部に展開され、その使い道が頭の中に流れ込んできた。

『コール！　ナンバー特異災害対策機動部二課指令室！』

言葉というものは、ヒトという生物にとって知性の象徴的存在だ。それを口にするということ自体が知性的行為であり、野性よりも知性が勝っていることを意味する。

故に、このヒトの言語を強制するＯ（オペレーション）Ｃ（コール）Ａ（アタッチメント）は彼のバトルスタイルを一気に彼本来のものに変え、我武者羅な攻撃特化状態ではなく相手の各部位の駆動を正しく理解した合気と日本拳法の混合格闘術を駆使するものとなる。

『どうした、大地。救援が必要か？』

『ああ。中型を一匹取り逃がした。おそらく街に出るより早く自然消滅（タイムアウト）するだろうが、念のため周辺の避難誘導を徹底してくれ。こっちのカタがつき次第、俺も追う』

『わかった。至急その近辺の警備員、および一課を向かわせる。無理はするなよ』

『勿論だ。あと、通信はこのまま切らないでくれ。おそらくこれが切れるとまたあの頭の悪いスタイルになりかねない。まだノイズ因子をしっかり抑えきれてないんだ』

そう、実は古唄が本来得意とするスタイルとはかけ離れた野性的なバトルスタイルをとっているのには理由があった。ノイズ因子を打ち込まれた彼は、ノイズギアを纏った際に内包するノイズ因子が活性化され、一種の暴走状態に陥ってしまうのだ。

理性はしっかりと働いているが、体の動きは本能任せになってしまい、敵と見做すべき標的を正しく定めることで手一杯なのである。普段の理性的なスタイルにおける体と心の関係が『バイクとライダー』であるとすれば、ノイズギア装着時は『乗馬用でない暴れ馬と騎手』という状態。まさに心身剥離。

無理に抑えつけようとすれば、当然ながら暴れ馬はいっそう暴れるようになり、振り落とされれば即死級の馬蹴りを受けることになる。だからこそ、古唄はその抑えきれない破壊衝動を敢えて抑えつけず、力のベクトルを定めることに全霊を注いでいるのだ。

『無論、既に感覚は掴んでいる。もう少しかかるだろうが、ノイズ因子に飲み込まれることはないと思っている。絶対に絶対、とは言えないが』

迫り来る人型ノイズを掌で押さえ、足を払ってひっくり返し、動作を封じるように踏みつけながら邪魔な鉤爪を引っ込めてストン、と軽

く落とすような拳撃を打ち込む。
　これで、最初にいたノイズ４体は掃討。続いて、葡萄型ノイズが残していったノイズ６体へと駆け出す。
（ヒトに比べて動きが緩慢なのが救いだな。狙いをつけやすい。むしろほとんど動かない的だから逆に腕が落ちそうなくらいだ）
　同じ位相にさえ干渉してしまえばノイズの肉体というものは存外に脆い。おそらくバイクで突進しても粉砕できるのではないかとも思えるほどだが、さすがにそれは愛機のヘッドに傷がつきかねない。
　だがそれでも厄介になタイプというのも当然ながら存在し、人型のような衝撃を与えやすいサイズならまだしも、蛙型のように丸くスライム状の相手には、拳技や脚技は衝撃が通り難く有効打になりにくい。
（球状のせいか真正面にブチ込まないと衝撃が逃げる。いっそ槍状になって射出してくれればもう少し楽なのだが。というか人型の手はどうしてあんなアイロンみたいな形をしてるんだ……。いや中には鎌みたいになってる奴もいるけど）
　素朴な疑問は案の定心の中だけに留め、左の掌で人型ノイズのアイロン（仮）を外側やや下向きに押しどけて右の拳で面を突く。続き、右前方から迫る刺のついたナメクジのようなノイズを正面から右面突（ストレート）で打ち抜いて、すかさず左拳による揚（アッパーカット）打。
　ノイズに対する『攻撃手段』であるシンフォギアに比べ、炭化を防ぐことを最優先にした『防御手段』のノイズギアは、バリアコーティング機能にほとんどの出力を割いていて、一撃で相手を沈められることはほとんどない。
　もちろん『シャウト』による出力向上によりバリアコーティングはその意義を『炭化防止』よりも『アンチノイズバリア』に近い一種の毒へと変えて機能するのだが、まだノイズ因子を制御しきれない彼に今以上の出力を求めるのは危険極まる。
　それは本人も自覚しているようで、一撃で沈まないのなら何回か攻撃をブチ当てればいい、という単純ながら理に適った手段をとっている。

（アームドギア、だったか……？　シンフォギアと違ってノイズギアにはそれがないのが痛いな）

これもまた防御機能を優先した弊害のひとつ。元々試作型ということもあって、ひとまずは鎧としての機能に着目していたこともあり、ノイズギアにはアームドギア生成機能がない。

身体能力向上機能もない上、さらには武器の生成も出来ないというのは対ノイズ兵器としてあまりにも欠陥品だが、それも込みで『古唄と弦十郎しか装着できないギア』ということなのだろう。

それに、アームドギアがなくとも彼なら海くらい割れる。弦十郎と一緒に映画を見ていて、それに触発された弦十郎に付き合ってモーゼごっこをしたのは記憶に新しい。

「残り2体……と、葡萄型か」

健気にも蛞蝓型ノイズが刺を触手のように伸ばして攻撃するが、生憎と古唄は全身鎧。貫通力や破砕力に欠くその攻撃ではまともなダメージどころか古唄を怯ませることも出来ず、静かに素早く接近した彼の右面突（ストレート）が炸裂。

寄り足後ろで一歩分後退し、転開替足（１８０。振り返ると同時に左右の掌と脚を前後逆に）で向き直ると、接近する人型ノイズを右面突（ジャブ）で怯ませて左胴突で沈めて再び転開替足で両足の前後を戻し、動きの鈍っている蛞蝓型にトドメの胴横突蹴（脚を横向きにして上体をやや後方に逸らした蹴り）。

転開後の胴横突蹴は足元がフラつきがちで非常に安定性の悪い繋ぎだが、古唄は躊躇いなくそれを叩きこみ、一呼吸を置いて増援・再生などの非常事態に備えるが、それらしい気配がないことを確認するとゆっくり後退し、ある程度離れてからＺＺＲの方へと駆け出した。

（葡萄型の反応は……少なくとも俺の感知できる範囲にはもうない。自然消滅したと考えるのが妥当だが、念のため追った方がよさそうだ）

ウォオン、という独特の落ち着いた音を奏でてその場を去っていく古唄。しかしそんな彼を見つめるひとつの影が、すぐ傍にあった。

「なんなんだ、あいつ……！　シンフォギア……じゃねーな。偽善ぶったカン違い野郎が……ぶっ潰してやる！」

本当に求めるものは――にちじょうと――

特異災害対策機動部二課。

古唄が『協力』している組織であり、そのアジトとも呼ぶべき施設の中枢――指令室のソファにて、大地古唄はいつも通りのムスッとした顔をどことなく不機嫌そうに変えていた。

「……弦十郎。俺は今日ほどお前を軽蔑したことはない。立花のような、今まで争いに触れたこともないような平凡無垢な子供に、戦力加入の要請をするなんて言語道断だ。最終的な決定権は彼女にあるが、そんな風に頼めば彼女の性格では断れん。詐欺と同じだ。それに、彼女のような存在を増やさないための俺だろう。立花を戦士に迎えるのなら、俺はどうしてノイズ因子を打ち込まれて、人間をやめてまでノイズギア装者になったんだ」

普段は口数の少ない古唄の、静かで理性的で饒舌で、それでいて怒気に満ちた重苦しい語気は、その視線の先にいる弦十郎だけでなく指令室の職員全員を怯ませた。

「聖遺物の欠片が体内にあって、それをシンフォギアとして纏えるとはいえ、立花は一般人だ。力を使わないよう注意を呼び掛け、立花がそんな力を使わないでいられるように彼女らの日常を守るのが俺たちの務めじゃないのか？」

「まったく以て、その通りだ……。だが、彼女の協力を得られればより早くノイズの掃討が可能になり、行動範囲も広がる。それが結果として多くの命を救えるのなら、彼女の力を……いや、すまない。これでは多くを救うために少なきを犠牲にしているようなものだ。言い訳にもならんな……」

明らかな反省の色が見られたことで、古唄の怒気が少しだけ弱まるが、それでもまったく無くなったわけではない。古唄にとって大事なのは彼らが反省しているかどうかよりも、彼女――立花響の決断だからだ。

どうやら彼女は弦十郎の説得を受けた際、一度は頷きかけたのを、それを取り消してしばらくよく考えさせてほしいと頼んできたらし

い。古唄が初めて出会った時の響は、どこか自分を軽視しがちで、何かを頼まれたらすぐに頷いてしまうタイプだと思っていただけに、彼女が躊躇ってくれたことを喜んだ。
躊躇いは大事だ。迷うことも大事だ。振り返ることも、立ち止まることも。勢いや思いきりも必要だが、そのためには安定した土台が必要だということを知らなければならない。
昨日出会った時の響は、その土台がまったくできていなかった。ただアクセルと車輪だけがついた歪なバイク。ブレーキもなければクラッチやギアチェンジペダルもない。状況に合わせた判断ができない我武者羅で向こう見ずなマシンのようだった。
だが、弦十郎の頼みを一時的にとはいえしっかりと断り、保留にしてもらうよう頼んだのは、少なくとも自分のペースに合わせるためのギアチェンジができるようになった証。まだ初心者のようでぎこちないが、まだブレーキの緩い彼女には大きな制動力になっているだろう。
「……ひとまず、立花が結論を出すまではこちらから干渉するのはやめてくれ。今はそれだけを守ってくれれば、当分はこの件について何も文句を言わないと約束する」
「もちろんだ。今回のことは、俺もいざ彼女に誘いを断られてから己の失態を深く省みて、あれが大人のやることではないと自らを恥じた。もしも彼女が戦士となることを望んだとしても、彼女の口から納得できるだけの覚悟を聞くまでは仮戦力としてのみ扱おうと思っている」
「それと、もしも立花がその結論を持ってきた時は、俺もその場に入れてほしい。まだ自分を省みることに慣れていない奴が、そうそう理性的な考えなどできるはずがない。まして、今回のことは誰にも相談ができないはずだ。省みたつもりになって、結論を早まってもいけない。彼女のような子には、ストッパーが必要なんだ」
これにも、弦十郎はただ静かに頷いた。
今回は事を急いでしまった彼だが、元々は古唄と同じ、口先だけでなく心の底から『組織の体裁』よりも『誰かの日常』を守りたいと願っ

ているのが、風鳴弦十郎という男。
だからこそ古唄は彼を慕っているし、彼もまた古唄をノイズギア装者に選ぶことができた。誰よりも互いを自分に似ているとわかっているからこそ、自分の全ての想いを預け合い、背負い合うことができるのだ。
「今頃思い出した……。大地……出会ったばかりの頃のお前が、いつも口癖のように語っていた『誰ひとり、悲しい涙を流さない日常』の話を」
「あの言葉を、理想論や綺麗事だと嗤わなかったのはお前くらいだったな。誰もが俺を変人扱いした……親殺しの世迷い言だ、と……。実際、まったくもってその通りだが……理想も綺麗事も、最初からできないと思い込んで何もしない奴らがそう言うのは、滑稽だったな……」
豪快に笑う弦十郎と、静かに口角を上げる古唄。真逆だけどそっくりな彼らの会話は、そこにいたオペレーターたちの耳に、心に……確かに届いていた。

◆

私立リディアン音楽院高等科・第一学年教室。
立花響は、昨晩の出来事と、そこで出会った真っ黒な長身男のことを思い出していた。
『君の優しさと勇気は、俺が継ごう。君に代わって、俺がノイズと戦おう。だから立花は堂々と日向を歩き、温かい陽だまりのような日常を過ごすんだ。それが俺にとって、何より嬉しい「お礼」だ』
（古唄さんは……わたしにこの力を使わず日向を歩いてほしいと言ってくれた。司令は……わたしの力が誰かを守れると言ってくれた。わたしの……あの『力』で……）
力――それは響の胸に宿る第3号聖遺物『ガングニール』の力。

限定特異災害『ノイズ』への抵抗力を持ち、それを葬ることのできる唯一無二の盾であり矛。
（昨日までのわたしなら、司令の頼みをなんの疑いもなく引き受けてたかもしれない。けど……古唄さんはわたしにあの力を使ってほしくないみたいだった……。人助けをしたいという願いが、あの人を……誰かを傷付けることになるかもしれないなんて、考えたこともなかった……）
今までも、考えたことがなかったわけじゃない。自分のことを大切にしてくれる人の存在を、知らないわけじゃない。だが、人助けに命を懸けたことはなかった。
無我夢中で突っ走る自分を、いつも親友が止めようとしてくれていたことを思い出す。その親友もまた、古唄と同じ思いだったのだろう。ただ、その人助けもまた響自身を形作っているもののひとつだからこそ、強く言えなかった。響が響のままでいてくれるのならと、それを見逃していたのだろう。
しかし、古唄は見てしまった。響が人助けのために命を懸けているその瞬間を。だからこそ無視できなかった。止めることしかできなかった。彼女自身の優しい望みのひとつを否定してでも、響を平凡で平和な世界に送り返すために彼女の優しさと勇気を奪い、引き継いだ。
（あんなにも、わたしのことを想ってくれている人が、わたしに『日常を過ごしてほしい』と望んでくれているのなら……わたしは、この力を使えない……！）
今日、司令に昨日のことを断ろうと、響は決めた。
「ビッキー」
「んぇっ？」
不意に横から声をかけられ、おかしな言葉で返事を返すと、そこには四人の少女たちが立っていた。それぞれ右から板場弓美、安藤創世、寺島詩織――そして、親友の小日向未来。
特に未来とは小学生の頃からの幼馴染で、ルームメイト。二段ベッドなのに上の段で一緒に寝るくらいの仲良し。なかよし。

「これから「ふらわー」に行ってみない？」
「ふらわー……？」
「駅前のお好み焼き屋さんです。美味しいと評判ですよ」
友達からの誘い。それは、古唄の望んでいた響が本来送るはずだった『日常』のひとつ。彼が望んだから、というわけではないが……指令に断りの返事を入れるのは、彼女たちと別れた後でも構わないはずだ。
そう考えて、響はそんな創世たちの誘いに「わかった」と短く返した。しかしその表情の一片に、ほんの僅かな陰りがあることを、ただ一人……未来だけが見落とさなかった。

◆

（朝は弦十郎たちに強く言いすぎてしまったかもしれない……。あいつらは俺と違い、組織に属する人間だ。義務に追われて已むを得ない行いをしなければならない時も、当然あるはずだ。それなのに俺は、弦十郎たちの都合も考えずにずけずけと……あれでは、俺も弦十郎のことを怒れない……）
夕方。昨日みつけたお好み焼き屋「ふらわー」にて、古唄は少し早い夕食をとっていた。人よりも胃の広い体をしているだけに、懐はやや涼しくなりがちではあるが、二課に『協力』している内は、弦十郎が『小遣い』をくれるというので、それに甘えた。
金をもらって人命を救うつもりはないが、どうせ『協力』は口約束。ならばそこに契約的強制力の働かない金銭の遣り取りは大したことではない。コンビニで何か買ってこいと言われて金を渡され、「お釣りはやる」と言われる程度のものだ。
もちろん、彼が貰っている金銭の額は『小遣い』と呼ぶにはやや大きい金額ではあるのだが、彼の『協力』は、それだけの影響力を持っているのだから仕方がないだろう。
（しかし……今日は学生が多いな。下校時とはいえ……女子が多いのはやはりリディアンの生徒が多いからか？　となると……あの黒地

に赤いラインの服は制服なのか？　随分と派手な制服だな。さっき店に入ってパッと見た時はコスプレ集団かと思ったが……違うみたいだな）

女子が油分に躊躇がないというのはどうなのだろうか、と古唄は少し頭を捻ったが、なにぶん彼は女性の好みというものがイマイチ理解できない。

少なくとも彼が学生だった頃は、女性は油分を避け、その割に糖分には手を出していたようだが、これがジェネレーションギャップというものか、と今さらながら三十路手前の現実を突き付けられ溜息が洩れた。

しかし、自分の体は既にヒトのそれではない。今さら異性に焦がれることもなく、結婚願望も薄い。大地家はここが末代か、と内心で笑いながら3枚目の豚玉に手を伸ばすと、店の入り口からガラガラ、という音が聞こえ、新しい客が入ってきたことを知らせた。

「へー、ここがふらわーかぁ……」

「くぁー、もうここからいい匂いするわぁー。アニメみたいなリアクションとれるかなこれ」

「いや、別にそれは義務じゃないんだから……。ていうか他の客に迷惑でしょ」

「すみません。5人なんですけど、テーブル席あいてますでしょうか？」

学生の寄り道に5人とはまた大所帯な、と思って意識を自分の皿の方に戻そうとすると、彼女ら4人に次ぐもう一人の声に、古唄は驚愕した。

「悪いねぇ、テーブルはもういっぱいで……カウンターならすっからかんだから、そこじゃダメかしら」

「あ、いえっ！　じゃあカウンターで！」

「げほっ!?　ごふっごふっ……！　けほっ……！」

つい最近出会った、予想外ながらもやけに印象強い人物の声を聞いて盛大にむせ、慌てて口の中のものを飲みこもうとしたせいか器官に入ってしまってさらに悪化する古唄。

そんな彼の様子に、客――そして『彼女』の視線が集中するのは何もおかしいことではなく、店内の客の誰もがそのまま視線を戻していく中、その『彼女』だけは食い入るように古唄を見ていた。
「古唄、さん……？」
「な……なんで立花がここに……！」
知り合い？　と問う黒髪リボンの少女――未来に、響は躊躇いなく「うん。わたしの、い……ろんな意味で恩人って感じの人」と答えた。
命の、というのは憚られた。人助けが自分の趣味であることは、未来だけでなく創世・弓美・詩織の三人も知るところだが、それのために命を張ってしまったことを、言いたくはなかった。
「古唄さん、昨日はありがとうございました。わたし……わたしのまで出来る人助けをしようと思います」
「……ああ、それがいい。代わりに、君らが笑っていられる日常は俺が守ろう。立花が、立花のままでいられるように」
のんびりとした無表情。クールというよりは、静かな能天気といった印象を受ける表情で、響の頭を撫でる。響は、そんな彼のごつごつとした手に、懐かしい何かを感じた。
異性としての手ではなく、ただただ、自分を労って慈しんでくれる優しい手――それは……。
（お父さん……）
二年前、あのライブ会場で起きた惨劇を生き延びた自分が原因（トリガー）となり、響の父親は会社内で孤立し、立花家を去ってしまった。
しかし、そのが父親が孤立したのは彼が響の生存を心から喜んだ結果でもあり、元々は響のことをとても大事にしており、幼い頃はいつも優しく頭を撫でてくれていた。
そんな父親を――古唄の手が思い出させた。
「……彼女たちは、立花の友達か？」
「あ、はい！　紹介しますね！」
古唄と響の再会。そして、響の友人たちとのファーストコンタクト。
非日常を受け継いだ者。非日常を託し、日常を歩もうとする者。日

常を歩んでいる者。
　三者のバラバラな存在証明は、この瞬間を始めとして複雑に絡み合っていく……。

戦士の力―さよなら、にちじょう―

「へー、古唄さんって京都の人なんだ？　東京にはやっぱり仕事で？」
「いや……旧い友人に呼ばれただけだ。普段は旅をしていて、仕事は各地で色々とやっている」
「旅っ!?　くぁーっ！　ロマンですなーっ！　まるでアニメじゃん！」
「男の一人旅はなかなかアニメにならんだろう。むさ苦しいだけだからな。移動手段も、もっぱらバイクだし」
「そんなことありませんわ。素敵だと思います。バイクはあまり詳しくありませんが、お似合いだと思いますよ？」
「そう言ってもらえると、お世辞でも嬉しくなるな。なんせ、もう３０手前のオッサンだから」
お好み焼き屋「ふらわー」で響と再会し、彼女の友人たちと出会った古唄は、意外に早い段階で彼女たちの信頼を得て、雑談を広げられる仲になっていた。
独特の眠たげな目つきと、その逞しい――というよりは厳つい肉体のギャップがウケたのかもしれない。古唄に最も積極的に声をかけているアニメ少女――板場弓美も、彼のそれを指摘しながら笑っていた。
そんな彼女たちを、古唄はやはりあまり動かない表情のまま、少し羨ましげに、微笑ましげに、慈しむように見ていた。
「いまさらかもしれませんけど、昨夜は響がお世話になったみたいで、ありがとうございました。この子、いつも無茶しがちで……きっと昨日も、そんなところを助けてもらったんじゃないかと思いますし……」
古唄は前回同様、カウンターの一番奥に座っているため、彼女たちは響をはさんだ右側にずらりと並んでいる。
そんな中で、響のすぐ横に座っているのが、彼女の幼馴染で親友だという未来だった。彼女はまるで手のかかる妹に代わるように、古唄に頭を下げながら、響が『お世話』になったことへの礼をする。

「ええっ!?　み、未来ぅ!。わたしそんなにいつもいつも無茶ばっかりしてないよぉ……」
「どうだか。そういうのは、本人より見てる側の方がずっとよくわかってるんだからね」
慌てて未来の発言を否定しようとする響と、そんな彼女にぷい、と顔を背ける未来。
しかし、そんな二人のやりとりに気まずさや険悪さは窺えない。本当に気心を知り合った関係――この程度の言葉をかわしただけでは、絶対に壊れないと信じ合える関係。
そんな響と未来の会話を見て、古唄はいっそうその胸に宿る気持ちを大きくさせていった。
(やはり彼女たちは日常の側にいるべき存在だ……。こんなにも温かくて優しい場所を、ノイズなどに壊させるわけにはいかない……。もっと、もっと、もっと……もっと俺がノイズ因子を使いこなし、膨大なノイズ因子を内包することができれば……)
今日のメディカルチェックでわかった古唄の『ノイズ』としての肉体は、そのほとんどが人間的ではなくなっていた。
彼の血液中には、投与した分と比べ明らかに多すぎるノイズ因子がめぐっており、遺伝子情報の一部が突然変異を起こして変質、五感の一部が鋭敏化・鈍感化している。
これは彼がノイズギアを纏う度、内包するエネルギーを表皮に表し、硬質化させたことによるノイズ因子の自己増殖能力によるもので、これが発達すればするほど人間から離れていく代わりに、強大な力を持つ対ノイズ兵器になることができるということが判明した。
(平和を守るためには力が必要だ……どんなものをも破壊する究極の力、俺(ノイズ)という生体兵器の力が。だからこそ俺は進化しなければならない……ノイズを殺すノイズとして、日常を守るバケモノとして)
失うものが少なければ、救えるものが多ければ、それでいいわけではない。自分の全力を尽くすことで、何も犠牲にすることなく全てを救えるのならば、それが何よりもいいことだと古唄は知っている。
だからこそ自分が失うものが、単純な喪失であるとは思わない。こ

れは犠牲（ロスト）ではなく代償（コスト）……炎を燃やすために必要な酸素と燃料こそが、彼の『人間性』であり、それによって彼自身が失われることはない。

彼は姿こそ変われど、大地古唄という存在だけは絶対に失わない。だから、彼は全てを賭して自らの体を『ノイズ』へと変えることができるのだ。

「すみません、追加のイカ玉をふた――」

――――！

（この感覚……ノイズ！）

全身の毛が逆立つような感覚を肌で感じた古唄は、その気配の数と距離に驚愕する。

（数、およそ１７……距離４００メートルもないだと……!?）

古唄がノイズギアを装着するためには、彼の体内に存在するノイズ因子を体表に放出・硬質化させ、健全な精神状態を維持できる制限時間を表す安全装置『ウォッチベルト』を起動する必要がある。

しかしそのためには十分な熱エネルギーを溜めこんだエンジンキー型の稼働スイッチ『スパークキー』を使わなければならず、エネルギー不全の状態ではノイズ因子を十分に制御できなくなってしまう。

即ち――本来ならば食事をとり次第すぐに出ていく予定だったのでエンジンキーを抜いしまっていた古唄は今、ノイズギアを装着できないのだ。

「逃げろ……」

「へ？」

「逃げろ！　すぐそこまでノイズが来ている！」

彼の叫びに呼応するかのように、突如店の外で無数の悲鳴が響き渡った。

◆

「ノイズ出現を確認！　ノイズギア装者のものではありません！」
「本件を我々二課で扱うことを一課に通達！　場所を特定し次第、大地に連絡！」
「出現地特定！　ノイズギア装者のノイズ因子反応地点と併せて座標を出します！」
　モニターに映る複数の赤いポインターと、青色の他とは異なる反応。青色のものがノイズギア装者に埋め込まれたノイズ因子反応であることは疑うまでもないが、ギアを体外に放出する様子は一切みられない。
「大地がノイズギアを装着しない……？　まさか……！　おい！　その近辺に大地のバイクがあるはずだ！　そのバイクに積まれているエンジンの熱量を確認しろ！」
「既に行っています！　ですがこれは……ウォッチベルトを起動するために必要な熱エネルギー量に及んでいません！」
　やはり、と弦十郎が舌打ちする。
　ノイズギアは、シンフォギア以上に装者を選ぶ。研磨された体と健全なる心を兼ね備えた者だけが装着を許されるそれは、最も重要な部分として『暴走を嫌う者』だけが装者となることができるのだ。
　そして古唄もまたそんな人物の一人。装者が暴走を嫌うからこそ、開発者である櫻井了子はノイズギアを開発する際にノイズ因子の活性化よりも拘束具（ウォッチベルト）の起動プロセスを複雑化させた。
　それは、ノイズ因子を内包する大地古唄の心自体が既に強力な拘束具となっているが故のもの。弱い心の持ち主がウォッチベルトに頼ってノイズギアを使わないようにしたのだ。
「ウォッチベルトを介さずにノイズ因子を活性化させ、ギアを纏うことは不可能ではない……。けれどそれでは古唄くんの体力と精神力を著しく消耗するばかりか、よほどのことが無い限り暴走は避けられない。ノイズの性質に彼の運動能力が加われば、その脅威は大型ノイズの群れをも凌ぐわよ……」
「くっ……！　市民の避難を急ぎ、可能ならばノイズを市外に誘導し

ろ！　翼は今どのあたりだ！」
「既に現場に向かっていますが、到着まで早くても１０分は必要です！　このままでは避難が間に合いません!!」
古唄にノイズギアを展開するよう命令することは不可能。人気の多い場所だけに、翼の到着を待っているだけでは手遅れになる。
手詰まりかと思った、そんな時だった。ノイズ発生時とは異なるアラートが指令室に鳴り渡ったのは。
「ノイズとは異なる高出量エネルギーを検知！　これは……！」

―ＧＵＮＧＮＩＲ―

「ガングニールだとぉッ!?」

◆

（ごめんなさい、古唄さん……！　でも、古唄さんあの時……！）

『逃げろ！　すぐそこまでノイズが来ている！』

（あの時……あの無口で優しい古唄さんは声を荒げてわたしたちに『逃げろ』と言った……！　昨夜の古唄さんなら、きっと何も言わず『あの姿』になってノイズに向かっていったのに、そうしなかった……！　それはきっと、そうできない理由があるからなんだ！）
その理由というものがなんなのか、それはわからない。しかし古唄はあの時、他に何も言わずただ避難誘導だけに専念していた。あの無表情を崩して、心底悔しそうで悲しそうな表情を浮かべながら、未来たちを逃がそうと必死になっていた。
そんな彼を見て、響は本能的に察した。彼は自分の姿を晒すことが嫌でそうしてるわけじゃない……彼は今、自分にできる精一杯のことをやっている。だから、響も今の自分にできる精一杯をやろうと決意し――その唄を口にする。

「古唄さん……」
「立花！　なぜ戻ってきたんだ！　早くみんなのところに戻れ！　このままじゃお前も……！」
「ごめんなさい……わたし、唄います！」

Φ　バルウィシャル　ネスケル　ガングニール　トローン　Φ

聞こえる。自分を止めようとしている彼の悲痛な叫びが。
彼を悲しませているのは自分だ。それはわかっている。だが、それでも響は唄うことを――拳を握ることをやめはしない。
（古唄さんのおかげで、商店街の人たちは普通よりずっと早く避難できてるけど……もうノイズはこんなにも近いところまで来てる……！　このままじゃ逃げ遅れた人たちが襲われるのも時間の問題だ！　わたしがここでノイズをくいとめないと！）
拳が震える。こわい。今まで感じたこともないような恐怖が、強い力を手にした今でも全身を駆け廻る。
昨日、古唄に幸せな日常を送ってほしいと言われ、今日一日をかけて改めて『日常』を振り返ったからこそわかる、日常を失うことへの恐怖……普通じゃない力を持ってしまったことへの恐怖。それが今になって実感できるようになってしまったからだ。
「クソッ！　俺のせいで、この子はまた戦うハメになるのか……ッ!!　だったら、せめて……！」
目の前に広がる悲しい現実。しかし、古唄はそんな現実を直視してなお、感情的になることなく自分にできる最も効率的な手段を模索し、ＺＺＲ１４００に跨る。
（エンジンの痛む運転はしたくないが、そんなことを言っていられる状況じゃないからな……許せよＺＺＲ！）
ヴォン、という普段とはまったく異なる荒々しい音を立てて目を覚ましたＺＺＲ１４００が、古唄の気持ちを代弁するかのように吠え、エンストギリギリの急速シフトアップで３速まで上げた古唄が、ノイズへと突進する。

響の戦闘を援護するため、彼女が一度に多数のノイズを相手にしなくてもいいように、他のノイズの足止めを引き受けたのだ。
（このＺＺＲの半径５メートル部分にはノイズの位相差障壁を無効にして攻撃を防ぐ不可視のシールド『アンチノイズバリア』がある……決定打は与えられないが、ＺＺＲの機動力を併せて使えば、ノイズの動きを止めるくらいはできるはずだ！）
古唄が群れの中心まで突っ込んでアクセルターンでアンチノイズバリアをぶつけながら四方に撒き散らし、起き上がったノイズを響にライトで合図してから吹き飛ばすと、響がそのノイズに向けて拳を伸ばす。
急な攻撃には反応できないかもしれないが、いつどこから来るかわかっている、特に速くもない相手を迎え討つ程度なら、今の響にでもできる。要領だけなら、野球のバッティング練習と大差ない。
そして、いざ響が襲われそうになると古唄がノイズが響の半径５メートル以内に入る瞬間をねらって彼女の背後を通過し、ブレーキを使うことなくアンチノイズバリアで彼女を守る。
「反射的に相手を殴れない内は最初から両手を握っておけ！　相手に対して半身になり、利き腕を胸と腹の間くらいの高さで構え、逆の腕は相手のほうへゆるやかに曲げながら伸ばすんだ！」
「こ、こうですかッ?!」
こうですか、と言われてもすぐにそちらに視線をやれる状況ではない、と古唄は内心苦笑いしたが、自分の周囲にいるノイズを振り払うと、響の方へと一瞬だけ視線を向けて確認する。
「そうだ！　じゃあもう一体とばすぞ！　拳は正面に真っ直ぐ、絶対に打ち上げたり振り下ろしたりするようなフォームにはなるな！　ちゃんと正面に行くようとばしてやるから、拳は肩とほぼ同じ高さになるよう伸ばすんだ！」
「わ、わかりましたッ！　やってみますッ！」
拳を握り、足を開き、相手を見据え、左手で照準を定め、重心をやや沈めながら前に向け、呼吸は浅く小さく、拳を突き出すタイミングとその軌道をシミュレートする。

「行くぞッ！」
ライトを下向き状態から上向きに変えて合図を送ると、ノイズの一体を響へ向けてアンチノイズバリアで撥ね飛ばすと、待ってましたとばかりに彼女はその右拳を突き出し、ノイズを穿つ。
続いて、再びライトを下向きに直してすぐ上向きにすると、今度はアクセルターンの要領でノイズを吹き飛ばし、まだ右拳を後ろに戻しきっていなかった響は、右手を後ろに戻そうと正面を向いた体を真横にするように捻って、その勢いを使って左拳をノイズにぶつけた。
素人感が丸出しのフォームではあるが、その上体の捻りと、拳をぶつける方の腕をまったく伸ばさず『V』の字のままアッパーカット気味にぶつけるこれは、まさしく日本拳法の基本技のひとつ、揚打（あげうち）である。
（素人らしい素人のフォームではあるが、この短期間で響は『反射的な攻撃』ができるようになった。これは戦士としては初歩的な技術だが、日常を送る上では必要のないものだ……むしろ、うっかり護身に使えば相手を必要以上に傷付けかねないくらいに……。これ以上、彼女に戦わせるわけには……！）
幸いにして、これだけ無茶な運転をしたせいかエンジンが普通よりも早い段階で温まり、ウォッチベルトを起動するために必要な熱エネルギーを確保できた。
あとは自分がやろう、そう思った時だった。響が自分からノイズたちへと突っ込み、残る数体の残党をものの数十秒で片付けてしまった。
戦いの感覚や戦場の空気に、本能と肉体が馴染み始めたことによる一時的な高揚感と、その高揚感を満たせるだけの戦闘手段を学習してしまったためだ。
（まずい……!!）
すぐにＺＺＲ１４００のギアを落としてエンジンキーを抜き取ると、古唄は左腕のウォッチベルトにそれを差し込みながら響に声をかけた。
「……立花……」

「……古唄、さん……」
すると響は驚くほど素直に、古唄の呼びかけに応じた。
しかしその瞳にはあまりにも悲しい感情が溢れかえっていて、古唄はそんな彼女をただ見ているだけで、どう声をかけて励ませばいいかもわからなかった。
なぜなら、彼女が涙を流す理由を、彼は痛いほどわかってしまっていたから。
（既に立花の体は戦いに適応し始めている……。日常の大切さを痛感した今だからこそ、自分の無茶に迷いが生まれた今の彼女だからこそ……彼女は……）
最後の猛攻。あれは古唄の指示とは異なる、彼女自身の闘争本能によるもの。戦闘の中、誰に指示をされることもなく自立的な攻撃ができるのことこそが戦士への第一歩であると、響は直感的にわかってしまったのだ。
そんな行動は、日常で過ごす中で起こすはずのない反応なのだから……。
「わたし……もう、もどれないのかな……？」
「……」
「戦うことを、受け入れなきゃいけないのかなぁ……？」
「……」
返事は、返せない。

力と強さと戦い――ノットイコール――

古唄と共にノイズとの戦いを制した響。

しかし勝利の代償として失ったものはあまりに大きく、彼女の優しく脆い心を無慈悲に貫いていた。

「……すみません、古唄さん。言いつけを破ってしまって……」

「……過ぎたことだ。今は、君が生きていることがただただ嬉しい。それに、今回は俺の不注意が君に戦いを強いたんだ。謝るべきなのは俺の方だ。すまない、立花……」

商店街の入り口の方から、低く大きい排気音が聞こえる。おそらく救援に駆け付けた翼だろう。

古唄は咄嗟に響を後部シートに乗せると、この場を立ち去った。ただ一度だけなら言い訳もできただろうが、彼女は既に二度――今回は自分の意思でシンフォギアを纏っている。ここに留まっていれば、二課も彼女を捕獲せざるをえなくなる。

「古唄さん……？　いったいどこに……」

「……リディアンの女子寮まで送る。もしも二課の者がきても、何も知らないとシラを切り続けろ。小日向たちと逃げた、と」

「けど……それじゃ未来が疑われちゃいます！」

「平気だ。二課の奴らはお前を疑ったという名目がほしいだけだ。お前と第三者が「知らない」と言えば、あいつらは嬉々として帰っていく」

問題は翼だ。響の所有する『ガングニール』は、彼女にとって浅からぬ縁を持つシンフォギア。

古唄にとっても触れにくい事柄であるだけに、こればかりは響を守ることができない。だからこそ、なおのこと響には二課に捕まってほしくない。

◆

響を女子寮まで届け終えた古唄は、再びノイズたちと交戦したあの

商店街に向かった。おそらく、もう二課の面々も到着しているだろう頃合い。
あまり二課と接触することに積極的でない古唄にしては、少し珍しい行動かもしれない。しかし、彼にはそうしなければならない理由があった。
（あの時、ノイズは俺がギアを装着できないタイミングを見計らったかのように現れた。それはつまり、あの襲撃が偶然ではなく人為的なものであるということ……。だとすれば、あの時すぐ近くに元凶はいたことになる……）
おそらくその元凶は古唄をシンフォギア装者だと思って攻撃を仕掛けてきたのだろう。響が装者であることを知っているとは考えにくい。彼女が装者であることは、弦十郎の計らいにより二課内部ですら秘匿しているくらいだ。
となると、相手もなんらかのシンフォギアを所有しているか、あるいはそれに代替される聖遺物を持っているか。既に起動されている聖遺物ならば常人でも扱える。無論、知識は必要になるが。
（シンフォギアを製造するための技術および知識は、現在この日本に存在する二課がほとんど専有していると言っていい。もちろん櫻井理論さえ開示されればギアを製造する技術自体は他国にもありそうだが、今はそうでないものとして考えるべきだろう。となると、やはり相手は装者ではなく起動済みの聖遺物の所持者か……）
体をノイズ因子によって定形化している以上、相手がシンフォギア装者ならこのことを翼に伝えて任せるべきなのだろうが、相手が聖遺物を戦力としているのならば自ら動くことに躊躇はいらない。
まして相手はノイズを放出するタイプの聖遺物。オペレーションコールアタッチメントの有無により正常モードと暴走モードを切り替えることのできる古唄なら、一時的に暴走モードになってノイズを吸収（たべる）することもできる。
対シンフォギア装者戦では苦戦どころか一方的にボコボコにされてしまいかねない古唄も、対ノイズ戦ならシンフォギア装者以上のメタとして機能するのだ。

（さすがに長居はしていないだろうが、相手が徒歩なら機動力はこちらが上。聖遺物がノイズを放出する際にノイズ因子が付着していれば御の字だ）
　もっとも、微量のノイズ因子だけでははっきりとした道筋まではわからないため、アジトを特定することまではできないだろうが、途中で相手側に追い付ければそれが一番いい。
　そう思っていた時だった。
『大地ッ！』
「……どうした」
　突然、ＺＺＲ１４００のマルチディスプレイがオペレーションモニターに切り替わり、弦十郎の声がヘルメットの内部に響いた。
『ノイズ発生の直前に事件現場周辺で確認された聖遺物由来のものと思わしき反応と同一のものがお前の後方を追尾するかのように接近中だ！　周辺住民の避難は既に完了している！　全力で迎え討ち、対象を確保しろ！』
「……了解。風鳴については、できるだけ早く救援に来るよう計らってもらいたい。嫌な予感がする……！」
　ブレーキングを行うことなくコーナリングしながらアクセルを一気にふかし、ドリフトターンによる方向転換を行うと、オペレーションモニターに映されたマップに従って自らに迫る反応へと向かっていく。
　すると、その相手は意外に早く見つけることができた。
「ハッ、そっちの方から向かってきてくれるたぁありがたいね！」
「……また子供か」
　古唄の前に現れたのは、銀の鎧を纏った銀髪の少女。装甲が上体に偏った外観は非常に上下のバランスを損なっており、外観的にも機能的にも秀逸とは言い難いが、しかしながらまず間違いなくそれは聖遺物。
　その手に持っている奇妙な棒状の装置も気になるが、それもまた聖遺物だろう。二種の聖遺物を保有している時点で、彼女が『普通』でないことは確定している。故に、古唄はＺＺＲを降りると、スパーク

キーを抜いた。
「悪いが……既に臨戦態勢であることが明確な君を前に、無抵抗のまま自らのやりたいことを放棄することはできない。俺が拳を握る前に、武装を解除してもらいたい」
「武装解除？　何をナマっちょれえことを！　テメーが『力』の持ち主ってこたぁとっくに割れてんだ！　さっさと構えろよバケモノがッ！」
「何故、俺が『力』ある人間だと知っているかはわからないが……少なくとも俺は、君のような子供に拳を向けたくはない。頼む、俺に拳を握らせないでくれないか」
　スパークキーをウォッチベルトに差し込んだ古唄だが、それを捻ることはなく、ゆっくりと腕を下ろす。それは、戦意がないことの意思表示と、いざという時にはすぐに応戦できるという警告の、矛盾する二つの意味を兼ねていた。
「戦場（いくさば）で何をバカなことを！　そういう綺麗事がムカつくんだよ！　力を向ける気が無いなら力を見せびらかすんじゃねえ！」
「……わかった。ならこれを君に渡そう。このウォッチベルトがなければ、俺は力を制御できない。他には何が必要だ？」
　スパークキーを引き抜き、ウォッチベルトを腕から外すと、それを鎧の少女に向けて投げ、スパークキーはＺＺＲ１４００に戻す。
　ベルトは少女の足元に転がり、キーは手元になく、バイクは完全に停車しているので急発進はできない。鎧の少女から見れば、今の古唄はまさに「ただデカいだけの人間」に成り下がった。
「余裕のつもりかよ……！　ギアも纏えないただの人間が、あたしに勝てる気でいるのかよッ！　バカにすんじゃねえ！」
「バカになどしていないさ。俺は大人だ……子供を守る義務があるし、子供を守りたいという我儘もある。だがそのためには子供に信用されなければならない……。だから俺は、君に信用されるために全力を尽くしたい。それだけだ」
「それがバカにしてるってことだろ！　守るってのは力のある奴が力のない奴に言うことだ！　あんたはあたしより弱ぇくせに『守る』な

んて抜かしやがる！　あたしはそれが気に入らねえっつってんだよ!!　これだから大人は嫌いなんだ!!」
　鎧の少女は足元に転がったウォッチベルトを踏み砕くと、古唄に向けて鞭を放った。しかし古唄はそれを避けようともせず、生身で受ける。
　対ノイズ用の聖遺物でないにしても、聖遺物が聖遺物である以上は通常の兵器とは比べ物にならない戦力を持つが、古唄はそれに動じることもなければ抵抗しようともしない。
　ただ従順に、彼女の攻撃をその身に刻まれながら立っているだけ。その拳を握ろうともせず、表情もまた苦痛を表さない。
「弱い、か……。どうやら君は、力と強さを同じものだと勘違いしているらしい。もしも君が俺にぶつけているこれが『強さ』だと思ってるのなら、それは間違いだ。これはただの力だよ。君は俺に『力を見せびらかしてる』だけだ」
「なんだと……ッ!?　このあたしが、力を見せびらかしてるだけ……？　ざけんじゃねえッ！　あたしは強い！　あたしには力があるッ！　力ある奴が強ぇんだ！　お前みたいな……力を戦いの道具にする奴にとやかく言われたくねぇんだよッ！」
「力を戦いの道具にしているのはどっちだ。俺は君に力を制御する術を渡し、抵抗もしていない。ただデカいだけの木偶の坊だ。そんな『ただの人間』に、力をぶつけて暴力を振るうのが『強い』奴のすることなのか？　それは君の嫌う『力を見せびらかす』行為ではないのか？」
　古唄は頭に被っていたヘルメットを外し、鎧の少女をまっすぐ見据える。
「……ッ!!　うるせえうるせえうるせえッ！　あたしはこの世から戦いを無くすんだッ！　けどあいつらは誰も彼も子供の声なんて聞いちゃくれない！　だったら、力ある奴をみんなズタズタにするしかねえだろッ!!」
「なら、そうやって力を力で潰して……その力を潰そうと他の誰かがお前を襲い、お前はそれを撥ね退けて……その先にもしも平和があっ

たとして、そこにどれだけの人間が残るんだ？　人は……力ある奴を恐れる生き物だ。君が力を持つ限り、人は君を襲い続けるぞ」
「じゃあどうしろってんだよッ！　戦わなければ生き残れない！　戦っても生き残れない！　じゃあどうやったら戦いを無くせるんだッ!!　この世から力を消し去ることができるんだッ！　大人ならそれが出来るとでも言うのかよッ!!」
「少なくとも、子供よりは出来る可能性が高い」
古唄の返答に、鎧の少女の怒りが炸裂した。

▽　ＮＩＲＶＡＮＡ　ＧＥＤＯＮ　▽

肩の突起から巨大なエネルギー球を生成し、鞭で打ちつけるように古唄へと放ったが、これすらも古唄は怯まず、恐れず、かわさず、身構えず、拳を握らない。
明らかな直撃。生身の人間がこれを受けて生きていられるはずがない。鎧の少女は、それを正しく認識した途端に崩れ落ち、全身を小さく震わせた。
「なんで……なんで避けないんだよ……！　あんなの受けたら……し、死んじまうってわかるだろ……！　なんで逃げねぇんだ……ッ!!」
もくもくと砂埃の舞う中、鎧の少女は立ち上がり、その場を去ろうとした。が――、
「逃げるな。自分のやったことを直視しろ」
「ンなッ……!?」
その砂埃の中から現れた古唄は、あの攻撃に直撃してなお無傷のまま立っていた。
「どうだ……無抵抗の奴に力を向けた気分は。一瞬でも人を殺してしまったかもしれないと思った時の恐怖は。それが『戦う』ということだ……」
「なんで……あの攻撃を受けて無傷なんだよ……ッ！　お前、まだ何か力を持ってんじゃねえのかッ!?」

「そんなものいるかッ！　……このくらいのこと、メシ食ってバイク乗って寝りゃ誰でも出来る。そんなことより、君はただの人間に力を向ける行為を正しく認識していたのかどうか、俺はそれを訊いているんだ」

古唄はゆっくりと少女に近づき、彼女の目の前まで迫ると、ゆっくり片膝をついて視線を下げ、バイザーの奥にある少女の目を見つめた。

振り解かれるかと思って取った手も、少女はただ呆然としている様子で、彼の目から視線を放せなくなっていた。それは彼の目が自分だけを――自分の心だけを真っ直ぐ見ているからだと思ったからか、鎧の少女はその視線に嘘をつけなくなっていく。

「戦いってのは……そういう嫌な気分とか恐怖を覚悟した上でやることなんだ。君のは自分の思い描いた世界を実現できないイライラを他人にぶつけているだけ……ただの八つ当たりだ。本当にこの世界から戦いを無くしたいなら……恨むのは力そのものじゃない。力を戦いに使おうとする『心』だ。そんな心に……暴力をぶつけたら新しい暴力が生まれるだけだぞ」

「嘘だ……！　人と人とは、痛みでしか通じ合えないってフィーネが言ってたんだ……！」

「……それも、間違いではない。確かに人と人とが繋がり合うために、拳や剣を向けなければいけない時もある。でもそれは、その拳や剣を通じて……『心』を繋いでいるからじゃないか？　心の繋がり合えない痛みは、本当にただの暴力だ」

鎧の少女の手を握っている方とは逆の手で彼女を撫でた。

人の手は、決して何かを壊し殺すものではなく、今泣く誰かを慰めあやすものだということを伝えるかのように、優しく、温かく、けれどごつごつとした手で。

「頼む……君の願いを無駄にしないよう、俺たち大人が頑張ってみせる。だから、君は戦わないでくれないか……俺は君のような子供に戦ってほしくない。傷付いてほしくない。何より……さっきも感じた嫌な気分とか、恐怖とか……そんなものを感じさせたくないんだ」

「……それは、ダメだ……。これはあたしがやらなきゃいけないことだ……！　この力は……あたしの戦いは、あたしのパパやママを奪った奴らに対する怒りでもあるんだ……!!」
「怒り……か。それは、確かに俺が口出しできることじゃない……けど、相手は見極めることだ。俺のように、と言うつもりはないが……力を持ちながらも誰かを守りたいと願う大人もいるということを、覚えておいてほしい」
　何も言い返せなくなった鎧の少女はただ頷き、それを見届けた古唄は納得したように口元を緩めると、ＺＺＲ１４００に跨りエンジンをかけた。
　ギアはローに入れてハンドルを左に切って車体をやや深めに傾けながらスロットルを捻り、後輪をスピンさせて１８０。回転。鎧の少女に背を向ける形でアクセルターンした古唄が「そこのメットとってくれ」と頼むと、彼女は文句もなく「ほらよ」と投げ渡した。
「あとは俺が適当に言い訳しておくから、君はもう行け。聖遺物も、悪用しなきゃ俺が誤魔化しておく」
「……そんなんでいいのかよ。お前、そういうの取り締まらなきゃいけないんじゃないのか？」
「俺は友人の頼みを自発的に手伝ってるだけだ。義務らしい義務なんてなんにも無い。それに、俺が裏切らないのは友人だけだ」

―借りってことにしとくぞ―
―わかった。返さなくていいぞ―

握られない拳―こころつなぐもの―

鎧の少女との交戦から一週間が経過した。

古唄が二課の資料を借りて調べたところによると、あの少女が身に纏っていた鎧は第４号聖遺物『ネフシュタンの鎧』と呼ばれる完全聖遺物のひとつ。

そしてもうひとつの弓にも似た棒状のものは弓でも棒でもなくまさかの杖――『ソロモンの杖』というものだった。

前者は鎧が損傷すると装着者の都合をまったく考えずに再生し、後者はノイズを発生・制御することを可能にするものということで、古唄は特に後者を危ぶんでいた。

（あの時、彼女は俺がなんらかの力を持っていることと、それがシンフォギアでないことは知っていた……。彼女自身が完全聖遺物を装着していたところを見ると、おそらく俺も完全聖遺物の個人所有者だと思われたんだろう。もし俺がノイズだとバレていたら危なかった……）

もしも彼女が古唄の正体を知り、話を聞こうとしなかったら……想像するだけで背筋が寒くなる。

最近になってようやくノイズギアを制御できるようになり始めた古唄ではあるが、彼の暴走態は時としてノイズでありながらシンフォギアの一撃に耐えるほどの耐性と再生力を持つ。

そこにノイズの炭素分解能力・位相差障壁・物理法則無視と、古唄の運動能力が加わるのだから、そんな彼を武器として使われれば二課に勝機はほとんどないと言っていいだろう。

ていうか先日また新しくノイズギアの制御装置（ウォッチベルト）を作ってもらって試しに装着してみた際、きちんと装置が作動せずに数分間だけ暴走した時には、体長が１２メートルまで巨大化してしまったと弦十郎から聞いた。

その時の記憶ははっきりと覚えていないにしても、記録はしっかりと残っているし、彼が古唄にそんなくだらない嘘をつく意味など無いので本当のことであるに違いない。

だって12メートルって。3メートルくらいならジョークかとも思うが12メートルなんて嘘だったら一発でバレる。だからこそ逆に信憑性があるのだ。
(そういえばあれからあんまりノイズを見かけなくなったな。あの子があの時言ってた『フィーネ』って誰なんだろうか。名前からして女性みたいだが……そいつがあの子に戦いを強いているのか？　それとも、そいつもまた戦いに身を置いているのか？　できれば、彼女の独断でやっていてくれた方がまだ説得がしやすいんだが……)
どちらにしても、古唄は出来る限り話し合いで解決させたい。相手が大人の男ならまだしも、女子供に拳を向けるようなマネはしたくない。それは古唄が徹頭徹尾守らなければならないポリシーだ。
しかし、鎧の少女が2種類の完全聖遺物の持ち主である以上はどこかで決着(ケジメ)をつけなければならないのも事実。彼女を説得し、納得してもらった上で二つの聖遺物を回収できれば、それが一番の理想案だ。
そしてそんな理想案を見出した以上、古唄はもう妥協できない。彼女に拳を向ける気は、これでさらさら丸きり無くなってしまったし、彼女自身の意思で聖遺物を返してもらうまでは、絶対に二課には邪魔をさせない。
二課の側にこそついているが、古唄はあくまで第三勢力。イレギュラーなのだ。双方の都合をひっちゃかめっちゃかにするくらい、躊躇はない。
(誰ひとりとして傷付けることなく、誰ひとりとして救い零すことなく、何もかも誰彼構わず全部みんなひっくるめてハッピーエンドに持っていく手段(コース)はないものか……)
ここのところ身なりに無頓着だったせいか無精髭が生え始めている顎元に手を当てながら、手元の資料をめくる、めくる、めくる。しかしどれほど探しても『フィーネ』に相応する人物の名は見つからない。
偽名、という可能性も考えたが、その名を連想させる本名は無数に存在し、その無数の可能性を思いつく限りの著名人に照合してみても、それらしくはならない。ただひとつわかっていることは、あの鎧

の少女はおそらく今もその『フィーネ』なる人物の傍にいるということだけだ。
（……そういえば、ネフシュタンの鎧は本来この特異災害対策機動部二課が所有していたんだったか？　弦十郎に聞いた限りでは、確か二年前の惨劇で――ん？）
ふと、古唄の脳裏にひとつの仮想が浮かぶ。
事実１――二年前の惨劇でネフシュタンが奪われる直前、特異災害対策機動部二課ではライブ会場にて発生した膨大なフォニックゲインを利用し『ネフシュタンの鎧』の起動・解析が行われていた。
事実２――事実１の最中、ライブ会場にてノイズの群れが襲来。ライブ会場に訪れていた観客らが襲われ、天羽奏が絶唱を放ちノイズの掃討に成功するが、絶唱時のバックファイアに加え、ＬｉＮＫＥＲ切れと低い適合係数が災いして死亡。
仮定１――この時に現れたノイズの群れがソロモンの杖による誘導を受けたものであるとする。
仮想１――何者かが『ネフシュタンの鎧』強奪のためにソロモンの杖を使用し、ライブ会場を襲わせた。ただしその『何者か』が先週出会った『鎧の少女』である可能性は限りなく低い。
仮定２――その何者かが特異災害対策機動部二課の内部に潜む者であったとする。これは『ネフシュタンの鎧』の起動実験がライブの最中に行われたことと、ノイズ襲撃の因果を考慮した結果の推論である。
仮想２――その人物は起動実験の日付を明確に記憶し、なおかつ聖遺物について特に精通していなければならない。これは起動実験の最中に、それと異なる聖遺物（＝ソロモンの杖）を起用することへの躊躇のなさを考慮した結果の推論である。
仮想３――その人物は起動実験の現場に居合わせている。これについては根拠と言えるほどのものはないが、これだけ周到な計画を用意しているからには、実験の最中に起きたイレギュラーに対処できないのでは全てが台無しになってしまうからだ。
そして、これらを満たす人物を――これらを満たす『女性』を、古

唄はたった一人だけ知っている。
「あらぁ？　バレちゃったかしらぁ……？」
不意に聴こえる声と、背を下から上になぞるような不気味な気配を感じながらも、古唄は動揺を表に出すことなくゆっくりと振り返る。
すると、やはりそこにいたのは彼の思っていた通りの人物がいた。
「櫻井……。やはりキミがあの子の言っていた……」
「ふふっ……。「やはり」はむしろこちらの台詞よ、古唄くん。やはり……あなたが私にとって一番の障害であり、そして一番の理解者となる人間……」
目の前の『櫻井了子』が蝶を模した髪留めを外し、豊かに蓄えられた細い茶髪を下ろすと、その髪はみるみるクリーム色に近い金へと変わり、紫色の瞳も同じように金へと染められていく。
古唄はそれをただ静かに見守りながら――否、手元のボールペンをすぐ近くの監視カメラに向けて投げつけると、今の彼女の姿が誰にも見られないよう、記録されないようにした。
「あら、優しいのね」
「……女には最大限の敬意と礼節を持たなければ、大人の男として恥をかくからな」
最後に眼鏡を外し、真の意味で古唄と『対峙』した了子――ではなく、
「初めまして、と言うべきか？　大地古唄……」
「どっちでもいいさ。初めましてでも、改めましてでも。そんなことよりも、ずっと大事なことが目の前にあるんだからな……フィーネ」
古唄は左手のウォッチベルトを外し、それをテーブルの上に乗せてすべらせるように手元から遠ざけた。鎧の少女の時と同様に、自分には戦う意志がないことを伝えるかのように。
そんな彼の行動に、彼女――フィーネは特に驚く様子もなく、彼を見ていた。どうやら彼の行動は鎧の少女から聞いていたか、それとも特異災害対策機動部二課にてモニタリングしていたからか、むしろ納得したような表情ですらある。
「先週、キミの仲間に出会った」

「仲間……？　ああ、クリスのこと。そんなに優しい言葉で彩らないで頂戴……。『あれ』はただの駒、初歩的な言葉遊びに踊らされて理想と幻想を読み違えている愚かな人形……」
クリス。鎧の少女の名を頭の中で繰り返すと、次に会えた時はその名で呼ぼうと決める。
そして同時に、フィーネの目をじっと見つめ続ける古唄は彼女の心を見透かすような優しい声で、まるで駄々をこねる子供をさとすように言葉を返した。
「フィーネ……キミがそう言う割に、彼女は……クリスはとてもキミを想っているようだったぞ。先週、俺と対峙していた時も、彼女はキミの名を叫ぶ時が最も感情的だった。彼女をあれほど感情的にさせるものが、人形に向けられた無感情な使命だとは思えないほど」
「そんなもの、彼奴（あやつ）が勝手に懐いているだけだ。我が愛は崇高なるあの方のためのもの……聖遺物の玩具に汚れた小娘に分け余すことなど有り得ぬ……。駒はただ駒として扱うのみが何にも勝る温情なのだ」
「……だとするのなら、なぜそんなにも言葉を選ぶ？　クリスのことをそれほど軽視するのなら、もっとストレートに侮蔑のひとつくらい口にしたらどうだ。そんな上辺限りの『冷たさ』なんて、子供はすぐに見抜いてキミに懐くぞ」
古唄は胸のポケットから飴を2つ出すと、その片方を破って中身の飴玉を頬張り、もう片方をフィーネに向けて投げた。
「キミが俺に理解を求めるのは、俺が特異災害『ノイズ』との融合症例第一号だからだろう？　元々は聖遺物との融合症例第一号である立花を使ってネフシュタンと己の肉体を融合させるために必要な予備知識を得たかったんだろうが、俺が立花を二課から遠ざけたことでそれが難しくなった。だからキミは俺を狙ったんだ。今度はソロモンの杖を使って、ノイズと己が肉体の融合が可能なものであるかどうかを知るために」
「驚いた。まさかそこまで的確に事を把握しているとは……いや、むしろそれでこそ私の求める『究極の理解者』だ、大地古唄……」

「気付いたのは今さっきだけどな。ネフシュタンの持つ力、キミがネフシュタンを求めて起こした二年前の騒動、俺に託されたノイズギア、そして俺が二課に訪れるたび執拗に繰り返されるメディカルチェック……どれもこれもキミが『無限の再生能力』を得るためのものと考えればひとつに結びつく。ただ……気になるのはその先だがな。無限の生を得て、キミが何をしようとしているのか……さすがにそこまではわからなかった」

わかったことは少しだけ。わからないことは尽きない。それでも、古唄は思考を止めない。今回の事件――ノイズの発生の根源がフィーネによるものなら、彼女を『助ける』ことで止めなければならない。ただ力で解決しても、それは彼女の根源を正すことにはならない。

だからこそ古唄は思考する。なぜフィーネは無限の生を必要とするのか。聖遺物に固執する理由は、本当にネフシュタンの再生能力だけが目的なのか。彼女ほどの頭脳の持ち主ならば、もっと他の方法を選ぶこともできたのではないか。

そして今最も気になるのは、ついさっき彼女が口にした『あのお方』というのが誰を指すものなのか。その人物がフィーネに今回の事件を唆したのか。そうでないのならば、なぜ自らが動かないのか。あるいは、フィーネ自身が自発的に行ったことだとして、それが『あのお方』とやらとどう関係するのか。

少しずつ、少しずつ、ほんの僅かなキーワードと仮定を織り交ぜて仮想を繰り返す内、ほんのちょっと見えてくる結論を繋ぐ。

「現時点で『アタリ』をつけるとすれば、キミはおそらくネフシュタンとソロモンだけではないもう一つの何かを……完全聖遺物を必要としているはずだ。そして、それを用いて何かバカげた規模の大事件を起こそうとしている」

「ほう……？　その根拠はどこにある？」

「ネフシュタンの再生能力は確かに魅力的だ。現代人類の持ちうる医科学力では、いかにキミの頭脳と技術を使ってもネフシュタンと同じ効果は得られない……。しかし、無限の再生能力は言い換えれば『永

遠の時間』を手にするということ。時間とは即ち『計画』から『結果』までの繋ぎだ。キミほどの智者がそれを弁えていないとは考えにくい。ならばこの先……二年前の惨劇を遥かに越える『結果』を欲しているに違いない。しかし、そのために用いるものがソロモンとは考えにくい。となれば、他の聖遺物を用いると考えるのが妥当だ」

言葉と思考は同時進行。仮定仮想仮説と採用却下を繰り返していくつもの可能性を作っては潰していく。無限に等しいもしかしたら（コース）を消去法にも似た方法で決めては戻り、再び進む。

どれが正解なのかはある程度まで踏み込まなければわからない。だからこそ結論は臆病なほど慎重に。これは正しいのか、それが正しいのか、あれは違う、どれが違う？　そんな無謀で頭の悪いやり方で、どこまでも賢く気取る。

「フィーネ。キミの目的がなんなのか、ネフシュタンの力をなんのために必要とするのか。それはまだ俺にも想像のつかないところにある。だが、もしもキミが求めるのであれば俺はいくらでもキミに協力するし、キミの望む限りこの身を託そう。それでキミの心を取り戻せるのなら」

「私の心を取り戻す、だと……？　知った風なことをッ！　お前に私の心の内がわかるものか……数えることもおぞましい幾星霜の中、あのお方を想い、寂寞に塗れたこの胸の痛みを、お前のようなただの人間が……ッ！」

「知った風なことも言うさ。キミが言ったんだ、俺を『究極の理解者』だと。だから俺はキミを理解する。恋心も知らない木偶の坊の戯れ言でも、キミの心にある恋心を理解してみせる。それがキミの望む俺の姿なら……」

――俺は君のその心に恋をしよう。

変身―けついとかくご―

――俺はキミのその心に恋をしよう。

そんな古唄に虚を衝かれたフィーネは、僅かにフリーズしかかった思考をどうにか繋ぎとめて彼に反論する。

「たかだか数十年生きただけの赤の子がこの私に急拵えの恋だと……。どこまでも見下してくれる……！　なぜお前はそうも人の心を見透かすような偽善染みた戯言ばかりを……!!」

「見透かしているつもりはない。急拵えの恋と言われるのも仕方がない。しかし、俺はキミを見下してなんかいない。俺はそういう気持ちを知らないから、キミの心にある美しさへの憧れを恋心と勘違って知ったかぶるしかないんだ」

古唄の目に偽りはない。目というものは、心境を最も顕著に表す部位だ。故に、彼の心にも偽りがないことを示している。――だからこそ、フィーネの苛立ちは高潮へと登る。

「俺はキミの力になりたい。キミの望むものを与え、キミの望む限りを成し遂げてみせたい。……でも、今のままでは出来ない。俺がそう思う人物は、キミだけじゃないから」

誰かを大好きになるという感情が恋心、などという安い恋愛観が通じないことは、フィーネに言及されるまでもなくわかっている。

なぜなら、古唄はみんなが大好きだからだ。弦十郎が、響が、クリスが……そしてフィーネが。彼は誰にも格差をつけずみんなを愛している。だから、これは恋心ではない。

しかし、もしもこれからそういう感情を抱くとしたら、それは彼の言う通り『心』への愛情。弦十郎たちなどの『人間性』への愛情ではなく、その個人が持つありとあらゆる個性を全てひっくるめて愛さなければ恋はできない。

だから古唄はフィーネに恋をする。フィーネを知りたい、フィーネと分かち合いたい、フィーネを受け入れたい、フィーネを慰めたい、フィーネ、フィーネ、フィーネ……次々と溢れるフィーネへの愛情（よくぼう）。

「ならば私と共に来い……。お前が素直に従えば、クリスを解放する

のも吝かではない……」
「解放なんてしなくていい。あいつはお前の傍にいられるのが幸せなんだ。どれだけ騙されていても、どれだけ傷付けられても……クリスはお前が大好きだから、きっと解放されることなんて望んでない」
「たった一度会っただけの、それも敵対しているはずの娘の感情を、これという確証も確信もなく勝手に決め付けるのは横暴が過ぎるのではないか……？」
　呆れと一緒に吐きだされたフィーネの言葉を、古唄は抑揚のない口調ですらりと返す。
「愛だの恋だのを知らない俺が言っても説得力はないが、愛はそういうものだろう。愛とは即ち底なしの渇望……永劫に満たされることのない欲望の連鎖。ほんの少しの満足感を得られれば、それを得るまでに支払った全ての代償が小さく感じる魔性の感情」
　だから、クリスはきっとフィーネの傍を離れようとはしない。
　古唄はそう言って、たった今とっさに作り上げた即席の愛情論を述べる。
「キミの傍にいられるだけで、キミの声が聞けるだけで、キミが触れるだけで、キミがクリスに何かを求めるだけで、クリスはキミから受ける全ての苦痛よりも大きな幸せを得られるはずだ。俺がクリスなら、間違いなくそうだからな」
「被虐嗜好家（マゾヒスト）なのね」
「……至極まっとうな意見を述べたつもりだったが、どこかおかしいところがあったか？」
　そんな愛情論を持つからこその疑問も、当然ある。ひとまずクリスについては横に置き、フィーネがもしも『あのお方』という存在を愛しているのなら、いったい何がどう拗れて今のように自暴自棄的な態度になっているのか。
　もしや、その『あのお方』という人物から愛情を向けられなくなったりして、それに憤りを感じているのだろうか。そうでないにしても、色恋沙汰の問題というのはとにかく仮想しづらい。
　だからこそ古唄は困惑する。もしも暴力が原因なら、むしろその暴

力を愛すればいい。放置が原因なら、その身に降りかかる虚無感に相手を想えばいい。相手に嫌われたなら、向けられた嫌悪感や軽蔑の視線に身悶えすればいい。

なのにどうして嘆く必要があるのか。愛は全てを受け入れ、全てに悦びを感じることではないのか。古唄は悩みに悩んでいた。

「成程……まさかこんな容で改めてお前の『おかしさ』を再認識することになるとは……。やはりお前は私寄りの思想家であり、私とは絶対に交わることのない最高の理解者になりえる。だからこそ……私と共に来い」

「断る。キミのやりたいことに手は貸すが、キミの側につくつもりはない。俺は二課側でもキミ側でもなく、いつでも両方を裏切れる場所でふらふらしながら、優柔不断な立場を利用してどっちつかずなまま中途半端でいたい。片方だけを裏切りたくはない」

それだけは譲れない。視線でそう訴えかける古唄の意志がブレるようには思えず、引き際と駆け引きの瞬間を弁えているフィーネは、ただ「そう、残念ね」とだけ吐いて引き下がった。

それは決して彼の態度・性格だけを考慮した結果ではなく、この閉鎖的な空間の中で弦十郎とほぼ大差ない身体的オーバースペックを誇る彼に食ってかかるのは賢い者のすることではない、という賢明極まる判断によるものでもあった。

「いいだろう……今回はこれにて退くとしよう。だが忘れるでないぞ。お前の身には既に膨大に膨れ上がった人の身に余るノイズ因子が溜めこまれている……。ソロモンの杖でその体内に潜む因子を刺激すれば、お前だけでなく周囲の誰かにも火の粉が降りかかるということを……」

「そうなった時は、キミの良心を信じるとするさ……。キミなら俺や周りの人をどうにかこうにか助けてくれる、と……」

「偽善者め」

「偽善なき善行などあるものかよ」

憎々しげな視線をものともせず、むしろ響たちすら見たこともないような優しい微笑みを向けた古唄は、そのまま去っていくフィーネの

後ろ姿を追うこともなく見送った。
そしてテーブルの上に乗っていた新型ノイズ因子制御装置（ウォッチベルト）を左腕に装着し直し、自らもその場を立ち去った。

◆

夕方。都内の下道を適当に走っていた古唄の下に、弦十郎からの連絡が入った。
『朗報だ。立花響君の監視についてだが……彼女の身体および周囲にギア起因の問題が発生しない限り、今月いっぱいで解除されることが正式に決まった』
立花響の監視解除許可。都内のハイウェイを法定速度ギリギリで走っていた古唄は、思わずクラッチとブレーキレバーを間違えそうになるほど驚き、そして数秒のラグの末に喜びの感情が胸に込み上げてきた。
（立花がやっと普通の日常に戻れる……！　あの温かい陽だまりのような日々に……!!）
思い出すのは、あの日バケモノの自分に恐れもなく向けてくれた微笑み。あの時、もしも響が声をかけてくれなければ古唄は自分の力と命に諦めきった態度で戦い続けていただろう。
自分の命が多くの女子供を守れるなら、そのために投げ捨てるべきたったひとつの命として、自分を殺していた。戦いに対する恐怖を、勇気ではなく諦めで塗り潰していたはずだ。
そんな彼を救ってくれたのが、響の微笑みだった。彼女が近付いてきてくれたから古唄は自分の命を捨てたくないと思えるようになった。彼女が微笑んでくれたから人を守りたいという想いがより真実味を持った。
（立花……キミのおかげで俺は勇気を持つことができた。あの日、キミが俺に微笑みかけてくれたから、俺はノイズギアを纏っても人で在り続けることができた……）
古唄は、ずっと響の優しさと勇気に恩義を感じていた。そして、そ

れを返すには彼女に本当の平和と日常を与えることこそが相応しいと信じ続けていた。
だからこそ、古唄は今回の報せがその恩返しの第一歩となると信じていた……そんな時だった。

――――――！

「この気配……ノイズ！」
『こちらでも確認した。場所はそこから北西へ２．４ｋｍの地点。幸いにして民家の少ない場所だが、放っておくわけにもいかん。行けるな？』
「もちろんだ……。立花への祝いも兼ねて、今日は景気よく最初から全力でいかせてもらう！　悪いがハイウェイに利用料金を払っておいてくれ！」
一気にスロットルを回してギアを上げると、ハイウェイの防風壁を飛び越え、一般道へと飛び出す古唄。
普通ならば絶対に無事では済まないが、二課の強化改造を受けたＺＺＲ１４００――いや、ＺＺＲ１４００ＳＳＣ（Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｓｋｉｎ　Ｃｕｓｔｏｍ）ならば、高さ５０メートルの場所から飛び降りても特殊な素材でできたタイヤとシートが衝撃を吸収でき、古唄のノイズ因子を吸収して硬化する新素材によって作られたフレームとカウルなら損傷もほぼゼロとなる。
（ＺＺＲ―ＳＳＣの耐久性はただの攻撃耐久装甲じゃない……。二課の技術開発部のみんなが全霊を込めて生まれ変わったこいつの本当の力は……これだッ!!）
マルチディスプレイに表示されたアイコンのひとつ、ＥＣＢの三文字で表されたそれの正式名称は『エレクトロカノンブースト』――ＺＺＲ１４００―ＳＳＣの後部に搭載された高純度の電気エネルギー砲を推進力として利用したブースターだ。
古唄がそのアイコンにタッチすると、自動でギアがトップまで引き上げられ、ブースターがエネルギーの充填を開始――５秒後には充填

完了を知らせる音声がヘルメットの内部に響き渡り、マルチディスプレイに『ＩＧＮＩＴＩＯＮ』の文字が表示された。
「エレクトロカノンブースト……イグニッションッ!!」
声紋認証式『イグニッション』コマンドを入力すると、エレクトロカノンブーストが橙色の光線を放って急加速。
通常装甲のままであったならば摩擦熱でカウルが歪むような高速域を維持しながら駆け抜けるその姿は、まさしく黒い疾駆者（ブラックライダー）。
いつもは身を切りつける風も、今となっては逆にＺＺＲ１４００ＳＳＣに穿たれ、古唄が好んでいた静かで伝動的なマフラー音は甲高い悲鳴のようなブースト音に掻き消され、テールランプの放つ赤い光は白昼の道にラインを引いている。
（５１８ｋｍ／ｈ……急カーブをギリギリ曲がれるかどうかという速度となると、これくらいが限度か）
古唄のライディングテクニックと、ノイズ特有の物理法則を無視した拡張視野がない限り、Ｌ字どころか見通しのいい滑らかなカーブすら曲がれるかどうか怪しいが、彼はそれを気にも留めず４連１８０（ワンエイティー）。のヘアピンカーブを連続ドリフトターンでかわしながら突き進んでいった。
大事なことなのでもう一度言うが、彼が『大地古唄』でなかったら、純１００％混じりっ気なしの純然たる自殺行為である。というか、ノイズ因子がなければ古唄自身もやろうとしなかっただろう。そんな装備を特異災害対策機動部二課所属でもない民間協力者にポンと渡す二課の技術スタッフはいったい何を考えているのだろうか。
（一週間前に交戦して以来、クリスはノイズを用いて暴れる様子を見せなくなった……。事実、今回はリディアンからある程度だが離れている。つまり今回のノイズは自然発生したものということに……なるんだろうか。だとしたらこの反応はあまりにも多すぎるような……）
今、古唄の体と本能をざわつかせているノイズ因子の反応は、これまでの戦いのどれよりも顕著で明確だった。
それが何を意味するところなのかというのは、古唄の体の構造を知

る者なら誰でも理解できるもので、つまり彼がノイズギア装者となって最も大規模なノイズ災害がすぐそこに迫っているということになる。

おそらく数にして１００か、それ以上……二桁ということはないだろう。既に翼には応援要請を出していて、古唄よりも少し遅れることにはなりそうだが、現場到着には３０分も要さないとのこと。

（この状況……本当に偶発的なものであるとするならフィーネはどう動く……？　それに、クリスも……）

既に古唄の中では『クリスの行動』が『クリスの本意』でないという結論が出ている。これはあくまで直感的かつ個人的な印象によるものだが、ただデータを眺めて出すだけの結論よりは核心に近いものだ。

人は実際に会って話さなければ何もわからない。それは子供だって知っている、説明し難い常識的な本能のようなものレベルで当然なのだ。

（俺と風鳴だけで処理できる規模かと言われれば、正直なところ微妙だ……。ノイズギアはどういうわけか理性的に戦おうとすればするほど出力が下がるし、かといって暴走をすればノイズ殲滅は容易いが風鳴も攻撃しかねない。これがジレンマというやつか）

暴走態になること自体は、ノイズ因子に身を任せれば任意で可能だ。ただし理性的な行動がとれないので格闘術が使えず、敵・味方の区別がつかない。

かといって格闘態――即ち普段通りにノイズギアを起動させれば、格闘術は仕えても出力が格段に下がってしまう。

暴走してノイズ殲滅を優先するか、ノイズ殲滅を不確実なものにして翼の安全を優先するか。ただ翼の安否が気になるのなら、女・子供の命を最優先にする彼は後者を選ぶだろう。

しかし、これほど大規模なノイズ殲滅戦となれば話は別――確実にノイズを殲滅しなければ、いかにシンフォギアの装者とはいえ大量のノイズを迎え討つことは至難の業。だからこそ古唄は悩むのだ。

暴走してノイズを殲滅した後、翼の手で暴走した自分を討ってもら

うのが最も現実的かつ理想的な流れなのではないか、と……。
おそらく、以前までの……響と出会う前の古唄なら、悩みもせずそれを実行しただろう。
しかし彼が響に投げかけた想いは、同時に自分自身に向けられるべきものでもあったのだ。
（自分が戦うことを悲しんでくれる人たちがいる……。だから、戦いに犠牲者なんて出してはいけない……俺だけが世界唯一の英雄（ぎせいしゃ）になればいい……。最初、俺はそう思ってノイズギアを纏った……）
古唄は『自分が戦うことで傷付くことを悲しんでくれる人』など、弦十郎くらいしか思いつかなかった。その弦十郎がノイズギア装者として古唄を選び、ノイズというバケモノに変わったのだから、いよいよ誰もいなくなったと思っていた。
しかし、それは違った。自分がノイズであることを知ってなお、恐れることなく、それどころか自分のことを心配してくれる存在を――立花響という少女を知った。だから、彼は悩む。
自分が戦って、ノイズを殲滅でき、翼を傷付けずに済んだとしても、そのために翼の手を汚させて体中がズタボロになったら――それは響を、ひとりの優しい少女を傷付けることに他ならないのではないか、と。
（だが俺は間違っていた……。俺がどんな姿になっても、俺という人間はまだ失われてはいない。俺を愛してくれる誰かが『もしかしするといる』とするのなら……俺はその『もしかするといる』誰かを裏切ってはいけない！　そう……立花響という少女を、俺は裏切れない！）
大地古唄は戦う。
自分を信じてくれる少女を裏切らないために。
そんな少女を英雄（バケモノ）にさせないために。
彼は、英雄（ぎせいしゃ）となる決意を決める。
（ウォッチベルトを介さないギア装着……あれなら装着できる時間に限りがある！　１００パーセント暴走するが……時間が来れば１００パーセント抑えることができる！）
迷いを振り切るべく、古唄は覚悟の言葉を口にする。

それはバケモノになるための悲鳴(ぜっきょう)ではなく、迫る脅威から人々を守る戦士に変わる言葉――

――変身ッ!!――

並び立つ防人―ダブルライダー―

ソロモンの杖とは無関係に自然発生したと思われるノイズの群れ。
それはソロモンによって行動を統率・制御された兵士などではなく、まさしく『災害』と称するに相応しい獣の大群。
そんなノイズたちを屠るべく古唄が向かうが、彼が追いつくにはあまりにも遅すぎる位置に、二人の少女はいた。
「ひ、響……！」
「未来！　こっち！」
その胸に人智を越えた力を持ちながらも人として生きようとする者――立花響と、彼女の親友である小日向未来。
古唄にとっては、何があっても絶対に守らなければならない『普通の女の子』を表す響と、そんな彼女の『日常』そのものを表す未来、と言って過言ではない。
（街の方に逃げたら被害が増える……けど、人気のない場所に行ったら未来が危ない！　きっと翼さんや古唄さんが助けにきてくれる……！　だからわたしは、人としての全力で未来を守る！）
以前ノイズに襲われた時はただ我武者羅に走るだけの響だったが、『人として生きるか、戦士として生きるか』を突き付けられ、人として生きることを決意した日から、ノイズに遭遇した時にできることは考えられる限り考えた。
だから、走る足はもつれない。複雑な道も迷わない。逃げることを躊躇わない。怯えることと逃げることは決して恥ずかしいことじゃないと教えてくれた人がいるから、その手に掴んだ親友を導いていける。
「きゃあっ！」
「未来！」
だが、そんな彼女の想い虚しく、足をもつれさせた未来が転び、膝を擦り剥いてしまう。
陸上部で鍛え抜かれた足腰と体力を持つ未来だが、迫るノイズによって発揮された防衛本能に反応した胸のガングニールが、響にギア

装着時に近い脚力とスタミナを与えている今、足並みをそろえることは難しかったのだろう。
（この足で走るなんて無理だ……！　だったらッ！）
「お願い響……！　響だけでも逃げて……！」
「嫌だ！　未来を置いて一人で逃げるなんて絶対に嫌だ！　未来が走れないなら……わたしが二人分走ればいいだけなんだ！」
すぐ近くまで来ているノイズを前に、響は未来を抱き上げながら再び走り出した。
かつて自分が一番助けてほしかった時、一番近くにいて一番助けてくれた少女を、今度は自分が一番近くで助けるために。
何より、人としてできる精一杯で『人助け』をするために、自分が自分であるために、彼女は大地を駆けるのだ。
「無茶だよ響！　こんなじゃすぐに追いつかれちゃう！　お願いだから降ろして！」
「嫌だ！　離さない！　絶対に離さない!!」
たった１００メートルとちょっとの距離を走っただけで息が切れる。人ひとりを抱えて走ることの辛さが、命ひとつの重さが、今ならわかる。
悲鳴を上げる足。酸素を求める肺。破裂しそうな心臓。諦めそうになる心。それを必死に抑え込みながら、一歩、また一歩と響は走る。だが――限界はすぐに来る。
（もう……無理なのかな……。わたしは、あの姿じゃなきゃ何もできないのかな……？　人として……たった一人の親友を守ることもできないのかなぁ……？）
泣きそうになる。けど、泣いてる暇なんてない。今できる全部をやらなければいけないのだ。
人としてできる精一杯をやって、それでも無理で、だけど自分には現状を変えられる何かがあるのなら、たとえそれが人ならざる力だったとしても……それは『人としてできる精一杯』ではないだろうか。
それはきっと、誰かが「そんなものはただの言い訳だ」「結局は力を振るうのだから変わらない」と言うべきものでも、誰に責められるも

のであっても、今唄わなければ、守れるものは守れないのだ。
決意を胸に、響は『戦士』となる覚悟を決めて唄を口にする――まさにそんな時だった。

『グうォおおァぁアァぁぁアッ!!』

全身を包む重厚な黒い鎧と、王者の風格を表す黒マント。黒紫色のゴーグルバイザーと各所を彩る黄色の宝玉が夕陽の映える。
明らかに普通の人間ではない。だが、ノイズ『らしく』もない。そんな彼の名を、彼女は知っている。
「古唄、さん……？」
「え……？」
意識のない状態でありながら、まるで二人を庇うように愛機・『ＺＺＲ１４００ＳＳＣ』を停めると、背中のマントが消えて両手両足に鋭い爪が現れ、四つん這いになってノイズへと襲いかかる古唄暴走態。
その姿は初めて響が古唄の戦いを見た時ともまた違い、まるで獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながらノイズを切り裂き、喰らい、踏み潰す。
それもそのはず――今の古唄は暴走を受け入れ、その上で人を守りたいと願っている。故にノイズの力を制御することも抑え込むこともなく、ノイズギアの本領である『ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ』の力を最大限に引き出せているのだ。
『グるルるるッ……！　ルぁああァぁァァッ!!』
「おかしい……なんか苦しそうだ！　前はあんな風じゃなかったのに！」
「『前』って……」
狂乱する古唄暴走態（ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ）。装甲の各部が薄れ、より鋭角的で細身なフォルムへと変わった彼の姿は、まるで狼のように軽快で素早い動きを可能にしている。
謂うならば疾走態――『ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・Ｓ』だろうか。胸の黄色い発行体から放たれた光が虚空に『１０』を刻み、彼の動きが急

激に加速する。

―Ｓｔａｒｔ　ｕｐ―

「す、すごい……！　あれだけいたノイズが一気に……！」

「で、でももうカウントが！」

３……２……１……『００』を刻むと同時に、どこからともなく鳴り渡る『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』のアラート。

同時に古唄の動きが止まり、シャープだった肉体は元々のマッシブなラインに戻るばかりか、背中のマントも再生した。

『ウぅウがあ「ァァあ『アぁぁァ「あアあァ『アあぁぁァあア「あぁぁぁッ!!」

が、解けたのは疾走態だけではなかった。本来あるべき姿（ＺＥＲＯ－ＭＥＧＡ）となった古唄はそのままノイズギアが解除され、人間に戻ってしまったのだ。

大量のノイズを屠ったのはいいが、それでも大群を殲滅することはできず、まだ半分以上が残ってしまっている。

おそらくスパークキーのチャージングは終了しているだろうと思ってＺＺＲ１４００ＳＳＣへと駆け寄ろうとするが、そこには事情を知らない一般人、小日向未来の姿があった。

「古唄さん！　後ろ！」

「……ッ!!」

一瞬の迷いは最悪の形で答えを示す。絶対不可避の距離まで襲いかかったノイズに、古唄の闘争本能が自己防衛のため拳を突き出してしまった。

ギアを纏っていない状態でのそれはまずい、と気付いた時にはもう遅い。拳がノイズに触れるまであと数センチもない――そんな状況を覆す者がいた。

Ｘ　千ノ落涙　Ｘ

「何を呆けているッ！　大地古唄ッ!!」

「風鳴……！　感謝するッ！」
救援に駆け付けた翼が放った短剣の雨――『千ノ落涙』が、古唄の拳より早くノイズを穿ち貫くと、古唄はすぐさまＺＺＲ１４００ＳＳＣからスパークキーを抜き取り、ウォッチベルトに差し込む。
示された時間制限は『２：４０』……ベストコンディションだ。

Ω　――――ッ!!　――ッ！　――――ッ!!　Ω

捻ると同時に鳴ったキュルルッ、という音に続いて放たれた絶叫は物理的な威力を持った衝撃波となって数匹のノイズを吹き飛ばし、今度こそ意識を保った状態のノイズギア・格闘態となった。
それを間近で見ていた未来は、そんな古唄を前にして怯える様子もなく、響の左手を借りながらだが真っ直ぐに現実（かれ）を見守る。
『……怖くないか？』
「あなたは、響の恩人ですから。人を襲うような人には、思えませんし」
『……ありがとう。キミみたいな子が立花の傍にいてくれるのなら……俺も安心して戦える！』
そう言って翼の待つ戦場へと駆け出した古唄は、自律制御用のインカム型補助武装『オペレーションコールアタッチメント』を展開。
ノイズギアに隠された特殊技能を解放すべく、翼の纏う天羽々斬をコールする。
『コール。ナンバー・第一号聖遺物（００３）。聴こえるか風鳴』
『こちら天羽々斬。今し方ようやく１０匹程度を駆逐した。が……やはり数が多い。街に流れる前に対処せねば……！』
落ち着いた口ぶりではあるが、やはり現状に対する焦りは隠しきれるものではない。
だがそんな彼女の様子に、古唄は余裕を見せながら言葉を返す。
『それなんだがな、風鳴……お前の唄を借りるぞ。お前なら合わせられるはずだ』
『何をする気だ？』

『シンフォギアはノイズを駆逐するために聖遺物の破片を改造したもの。ウィルスが体内に入り込んだ時、人が高熱を出すように、シンフォギアの出力を上げるための唄を使ってノイズ因子を活性化させれば、その因子に対抗するためシンフォギアの出力も上がるはずだ』

もっとも、シンフォギアの出力が上がれば上がるほど、それがノイズギアに触れた瞬間のダメージも甚大なものになるのだが、古唄はそれを伏せて翼の協力を要請する。

元は人間でも、今はその人間を襲うノイズと同類になった古唄。そしてノイズから人間を守るために親友を喪った翼。翼の古唄に対する印象は決していいものではないが、それでも彼の実力は認めている。

そして、古唄もまた女・子供を守るためにギアを纏いながら、己の実力不足のせいで翼を必要としてしまう苦悩を抱えている。だが――そんな二人だからこそ『戦士』としては申し分ない。

『……曲調は私に合わせろ。歌詞は私がお前に合わせる』

『ああ……頼むぞ、風鳴！』

大地古唄と風鳴翼。

女・子供を戦わせないために戦うノイズと、ノイズとの戦いで親友を喪った女の子。

そんな対極の二人が並び立ちながら口にする唄は――、

X　キミらを彩る太陽　日向の道　眩しくて　X

X　千ノ落涙　X

天羽々斬が奏でる伴奏に合わせ、ノイズギアが傍受した『本来の歌詞』が『古唄の歌詞』へと書き換えられ、彼の体内に宿るノイズ因子が活性化、ギア各部の宝玉が黄色から赤色へと変色。

古唄を襲う『ノイズの本能≒破壊衝動』に比例して出力が向上している天羽々斬の『千ノ落涙』は威力・範囲が格段に増し、たった一回で全体の三分の一を屠ることに成功した。

そしてそれは技だけではない。天羽々斬特有の高い機動力もさら

に増強され、『ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・Ｓ』の加速状態時にも匹敵する動作速度を見せた。
＃少し陰ってる夕陽を　駆け抜けて視界がぼやける　潤り……＃
（なんだ、この高揚感は……！　まるでギアが風鳴翼という剣を研ぎ澄ましていくような感覚……これがノイズに対するギアの抵抗！
これが天羽々斬の生きようとする力！　私は今、天羽々斬という生命（いのち）と共に戦っているのだと実感できる――!!）
その強さの源は、シンフォギアとノイズギアの相互機能などではない。
シンフォギアに宿る『ノイズ因子に対する抵抗力』は、古唄も言った通り『体内に入り込んだウィルスを殺すために発熱する人体』にも喩えられる。そう――シンフォギアは「生きたい」と願っているのだ。それを生命（いのち）と呼ばずなんとする。

Ｘ　ふたりはこれからずっと　手を取り合って幸せ掴むのさ　Ｘ
Ｘ　逆羅刹　Ｘ

脚部のブレードパーツを広げ、逆立ち状態で足を広げて回転することで、彼女の周囲数メートルに存在する敵が次々に天羽々斬の錆となっていく。
が、そのカポエイラのような動きで放たれる逆羅刹最大の弱点、上方からの攻撃が、今まさに飛行型ノイズによって迫ろうとしていた。いつもならすぐに技を中断して対応する翼だが、今は敢えてそうしない。
Ω　たくさんのメモリーを　死がふたりを別つまでッ！　Ω
やや語尾が強くなりながら放たれた古唄の飛び蹴りが、翼を襲おうとしていた飛行型ノイズを捉え、穿つ。
出力の上がっているシンフォギアに近づけば、古唄の肉体はまるで炎に近づけたトマトのように表皮を腐らせるが、構うことはない。
今、仲間（つばさ）が共に戦ってくれている。今、この背を信じてくれている少女たちがいる。ならば大人として、男として――古唄に常識や一般

論は通じない。

ΩX　地に還れ！　ここを通す気など無い！　ΩX
Ω　あの笑顔を守り続けたい！　Ω
ΩX　祝福の鐘鳴る　その瞬間まで　何があっても絶対に……！
ΩX

体の外からは全身が灼けるような感覚に、体の内からは何もかもを壊してしまいそうな衝動に襲われながら、それでも古唄は拳を突き出す。

ΩX　佳く澄んだ空の下をあるこう！　ΩX
Ω　未来に響く唄　歌って　キミら二人　上を向いて　栄光の道を……！　Ω
ΩX　星空の下に立ち、その花を愛せ……！　ΩX

「頑張れ……頑張れ古唄さん！『ノイズ』なんかに負けないで！」
響が古唄に向けて放った言葉は、そのたった一言で彼の苦痛を全て消し去った。
そう……彼女は古唄がノイズであることを知っている。だからこそ、彼に向けた『ノイズ』の意味はひとつではない。
目の前に迫る脅威。自らを侵食そうとする本能。そのどちらにも屈さないでほしいという願いは、決して響だけから送られるものではなかった。
「古唄さんがどんな人なのか、私はまだあんまりわかってない……。けど、それでも古唄さんが『ノイズ』なんかに負ける人じゃないってことだけはわかる！　お願い古唄さん！『ノイズ』に勝って!!」
今日、初めてノイズギアを纏った自分を見た未来までもが、古唄を信じていた。
彼女の言う『ノイズ』は、きっと響ほどの意味はないのだろう。だが、それでも古唄はその言葉が放った『意味』を偶然とは思えなかっ

た。思いたくなかった。
故に――此度の大地古唄は無敵となる。
ΩX　智を以て、穿ち貫く殺意（こころ）！　ΩX
Ω　地獄を灼いて　殺し尽くすまで　Ω

直線状に自らを射出する蛙型ノイズを右の拳で突き、続けざまに上空から急降下してきた飛行型ノイズを『転開』にて小さく回避。
バック転でノイズとの距離を詰める際、足が大地に着くと同時に裏拳で人型ノイズを打ち、倒れ込んだそれを踏蹴（ふみげり）にて灰へと換える。
ΩX　火を喰らい　絶唱を放つならば　この身を代わりに！　ΩX

「大地！　こちらはあらかたカタが付いた！　彼女たちの手前だ……決着は貴様にくれてやるッ！」
残されたノイズは巨人型――『ノイズを倒すためのギア』ではなく『ノイズにも抵抗できるギア』であるノイズギアでは苦しい相手。
しかし古唄は残していた切り札を切って見せる。

Ω　あとちょっと！　届きそうな命があるのなら手を伸ばして！
Ω
Ω　この生命（こどう）は　未来　導く響きだから、きっと……　Ω

脚部と背部に展開された新たなアタッチメント、サーチライト型の『S（サーチロック）R（アタッチメント）A』と、U字スラスター型の『A（アクティブ）D（ダッシュ）S（スラスター）』が、巨人の最期を告げる。
古唄は体内のノイズ因子を左足のS（サーチロック）R（アタッチメント）Aに注ぎ込むと、素早く巨人型ノイズへと駆け出し、跳ぶと同時に背中のA（アクティブ）D（ダッシュ）S（スラスター）が火を噴いた。

Ω　今なら言えるよ……。けど……まだ内緒にしよう　Ω

古唄が突き出した左足のＳ（サーチロックアタッチメント）Ｒ　Ａから黄色いレーザーが射出されると、そのレーザーはノイズに触れると同時に相手の動作をロック、「Ｘ」を描くように展開され、蹴りが接触したかと思えばそのまま透過。

するとノイズの全身が突如として青白い炎に包まれ、炭化した。あのレーザーに注がれた高密度のノイズ因子が、巨人型ノイズの許容できる因子キャパシティを越えたが故の自爆である。

（成程……ノイズギアはそれを装着している限り、常に微量のノイズ因子を体外に洩らして生態系に脅威を与える……。それは即ち、大地の保有するノイズ因子が通常のノイズを遥かに凌駕し、ギアすらも抑えられなくなっていると見て間違いない。奴はそれを利用して……）

ノイズギアを纏ったまま響たちの方に戻り、そのままＺＺＲ１４００ＳＳＣに乗ってまたどこかへと行ってしまった古唄を見送りながら、翼は気付く。

（巨人型ノイズすらも一撃で葬るほどのノイズ因子……それは紛うことなき外道の力。決して美しくはない輝きだが、人斬りの剣ではなく、むしろその剣から人を守る鞘としては至高の光沢！　見せてもらったぞ大地古唄……。お前の……いや、貴方の防人としての生き様を！）

何も美しい力（シンフォギア）ばかりが正義ではない。外道を由来とする汚れた力（ノイズギア）も、その使い道を誤らなければ決して恐ろしいものではない。いつだって『強き力』を『悪の種』にするのは人の心なのだ。

だからこそ――風鳴翼は大地古唄を認めなければならない。あれほどの『強い力』を有しながら、それを決して悪しき行いに使わない彼の心はまさしく誇り高き『防人』のそれ。

彼という人を一介のノイズとひとまとめにして否定するのならば、自分の信じる『防人』とはなんなのか。

「……戦友、か。久しく忘れていたな、こんな心強さは……」

各々の変化―いっぽまえへ―

自然発生したと思われるノイズの群れとの戦いから2時間後。街はずれの屋敷では、一人の少女が鼻歌を唄いながら、本来自分が眠るはずのベッドに寝ている大男を見つめていた。

「ったく……いきなり出てきたと思ったら、そのままぶっ倒れるんだもんな……」

誰の返事を期待するわけでもなく、自然に口から洩れた言葉がこの現状を素直に表していた。

少女――クリスが恨めしそうにしながら世話をする大男の正体は、ノイズとの戦闘の際に天羽々斬の放つフォニックゲインに中(あ)てられて体中が爛れてしまった大地古唄。

体のあちこちを包帯でぐるぐる巻きにされているのは、クリスなりの精一杯で手当てをしたからだろう。下手な巻き方をしたせいで長さが足りなくなったのか、一部には色の違う布が当てられていて、それが彼女の私服を破り裂いたものだとわかる。

「フィーネなら……アタシなんかよりずっとマシな手当てをしてくれんだけど……。今日んとこはこれで勘弁しろよな」

手元の救急箱を閉じたクリスが立ち上がり、部屋を出ようとすると、その物音に反応したのか古唄から小さな呻き声が上がり、細いキレ長の目が開いた。

「ここは……？」

「アタシんちだ」

救急箱を元の場所に戻しておくのは後でもいいだろう、と上体を起こして事態を把握しようとする古唄に返事を返し、さっきまで座っていた腰掛けに戻った。

そんな彼女を見て、古唄は僅かに驚いた様子を見せたが、すぐに頬を緩ませて、

「……また会ったな。キミがこれをやってくれたのか？」

「そうだけど……へ、変なカン違いすんじゃねぇぞ！　アタシはただ借りを返しただけだかんな！　こないだのアレはこれでチャラだッ

！」
　返さなくていいと言って押し付けただけの恩だ。返す必要もなければ、いかに第三勢力といえど二課側に近い古唄を助けるなど、甘っちょろくて青臭い、まさにクリスが嫌いだと吐き捨てる行いだ。
　だが――それを吐くのは『クリス』ではなく戦場に立つ『鎧の少女』。今ここにいるのは、手段はどうあれ心の底から争いごとをなくそうとするただの優しいクリスなのだ。
「そう、だな……。これでチャラだ。ありがとう、キミのおかげで大分よくなった」
　ぐちゃぐちゃに巻かれた腕の包帯を少しずつ解いていくと、まるで彼が意識を取り戻したことがトリガーであったかのように、腐り爛れていた皮膚が急速な再生を始めていた。
　それを見て驚いたのはもちろんクリス。尋常ではない彼の体の在り方に、生理的な拒否反応を示してしまったのだろう。古唄も、そんな彼女を責める気はまるでない。
「お前……なんだよそのデタラメは……！　まるでネフシュタンじゃねえか！」
　クリスも、嫌悪感が引けばすぐに古唄の身を案じて声をかけた。
「ネフシュタンか……。あれほど便利なものじゃないが、確かに驚異的な再生速度の比喩としては間違いじゃないな。この間はソロモンが怖かったから言えなかったが、今のキミなら大丈夫そうだから、あの時に言えなかったことを話そう。実はな……俺は体の半分がノイズなんだ」
「……は？」

◆

　リディアン音楽院高等学科・女子寮の一室にて、響は今日の出来事も併せて、過去に直面した２つの古唄にまつわる出来事を未来に告白していた。
　弦十郎からは、他者にシンフォギアの存在をバラせばその人物まで

もが危険に晒されると聞かされていたが、今日起きたことでわかったのは、未来に隠し事をしている限り、その隠し事が未来を危険に晒すということ。

そのため響は、自分の胸に宿るガングニールのことも、包み隠さず未来に説明した。とても『常人』とは言えない体のせいで嫌われることは、確かに怖かった。だがそれ以上に、未来がそんなことで自分を嫌ったりしないという確信があった。

結果――未来は複雑そうな表情で、涙をいっぱい零しながらだが、響を受け入れた。

「私は響を信じてる。たとえ私があなたの秘密を知ったせいでピンチになっても、響なら絶対に助けてくれるって信じてる」

「ありがとう、未来……。未来が信じてくれるなら、わたしは何があってもへいき、へっちゃらだから……！　それに、これでようやく覚悟が決まった！　未来のおかげで、ガングニールとの付き合い方が決まったんだ！」

あの日、奏が遺してくれた唄は、あの悲劇を生き延びてしまった引け目を誤魔化すために使うべきではない。大切な誰かを、一生懸命に生きている誰かを守るための力だ。

だから、響も決めた。胸に宿る力は、絶対に守らなければならないものを守るために使う。それは誰でもない自分のため……その人を『守りたい』と願った自分のワガママを自分で叶えるため。

それは奇しくも、古唄がフィーネに投げかけた「偽善なき善行などあるものかよ」という言葉に似ていた。

「わたしは……立花響は、これから先ずっと、未来のために使うと誓うよ。未来を悲しませないために、未来が笑っていてくれるように……」

「うん……。けど、私は響に、今の優しい響のままでいてほしい……。困ってる誰かを見捨てたりしない、そんなあなたでいてほしいの……」

「もっちろん！　未来が今のわたしを好きでいてくれるってこと、知らないわたしじゃないよ！　だから、わたしも人助けをやめたりしな

い。その代わり……」

―その人には、何も求めたりしないから―

―未来だけは、わたしを褒めてくれるよね？―

―もちろん。だって、わたしはそんな響を好きになったんだから―

◆

一方、リディアン音楽院高等学科地下、特異災害対策機動部二課本部では、弦十郎を中心としたクルーたちの頭痛が痛い状態になっていた。

原因１――ノイズギア装者・大地古唄の行方がわからず、天羽々斬装者・風鳴翼の証言から、彼が重傷を負っていることが予想されること。

原因２――今回の一件で再びガングニール装者・立花響とその友人である一般人が巻き込まれてしまったこと。それによる過去の事件と今回の事件の関連性を疑う声。

原因３――昨今頻発している本部周辺でのノイズ発生に対し、本部地下『ＡＢＹＳＳ（アビス）』にて保管・警護されている完全聖遺物『デュランダル』の安全性を問う声。

原因４――原因３に対し、「じゃあＡＢＹＳＳ以上に安全な場所はどこなのか」と問い返したところ、明らかに厳重さで劣る（※）『記憶の遺跡』を指名されたこと。

原因５――しかも『デュランダル』の移送が可決され、それを護送できる装者が現時点で風鳴翼しかいないこと。

原因６――その翼が二課クルーたちの説明で『自分が古唄にダメージを与えた』と知り、精神状態が健常な状態であるとは言えないこと。

※どれくらいの差があるのかと言えば、某ＲＰＧにおける道中ダンジョンと隠しダンジョンくらいの差である。

既にクルーたちの頭痛と胃痛と眩暈と吐き気は有頂天に達しており、この痛みはしばらくおさまることを知らない。だが彼らはそのス

トレスの行き場を他人に向けたりはしない。さすがに謙虚な大人は格が違った。
故に友里あおいは常用の胃薬をお茶で流し込み、藤尭朔也は大きすぎる溜息を零しながら俯き、緒川慎次は眩暈を抑えながら頭痛薬を水なしで流し込み、風鳴弦十郎は頭と胃の両方から来る痛みを発剄で掻き消して業務続行。
そんなお通夜状態の二課指令室に浮かない顔で入ってきたのは、みんな大好き豆腐メンタルの翼である。最近ファンのごく一部からは「風鳴翼はめんどくさ可愛い」という声もちらほら。いい傾向である。
「失礼します」
普段はあおいと了子の二人で保たれている二課の華やかさだが、今日の了子は早番のため不在。あおいという華も一輪では美しさを保ちきれなかったのか萎れてしまい、やっと現れたＪＫという最高峰の華も表情が暗い。
二輪の萎れた華だけでどうやってこのむさ苦しく陰鬱とした空間を晴らそうというのか。全員の脳裏に『響君／響さん／響ちゃん　の笑顔で癒されたい』という一言がシンクロ――と同時に、ようやく古唄があんなにも響を庇おうとしていた意味を（極めて断片的かつ斜めの角度から）理解した。
「先程は取り乱してしまい申し訳ありませんでした。移送任務についても、ノイズ程度が幾ら束になろうと然したる問題ではありません。防人としての責務を全うしてみせましょう」
「そうか。だが当日までは大地の捜索が優先だ。無論、お前の実力を疑っているわけではないが……」
だがその暗い表情も、弦十郎が口にした『大地』の一言で消える。
これまで使命感ばかりに押されて戦っていた翼だが、今日の戦いで本当の防人の在り方を知った今、彼女は孤独の戦士ではなくなった。
剣が守るべきものを傷付けないように、抜き身の刃を覆い隠す黒塗りの鞘――そんな防人が、今の彼女を支えている。
「わかっています。彼がいれば、防（まも）るべきものを防れる率は上がる。防れるものも増える。防れる範囲も広がる。力は……いえ、防人（とも）は一

人でも多いに越したことはありません」
凛とした目を向ける翼は、もうあの罅だらけの剣ではない。
まるで仙女の羽衣の如く柔らかに、まるで女人の肢体の如くしなやかに、まるで歴戦の勇の如く逞しい刃――世界最高峰の一振り。
（翼……。お前の中で何かが変わったということか……）
「司令、どうか大地の捜索に私も参加させてください。１００人で見つからぬのであれば、１０１人なら見つかるかもしれません」
「ふむ……参加させるのは構わんが、１人増えたところでなんになる？」
まるで試すように投げかけられた言葉と視線に、翼は迷わず返した。
「ヒト１人の力を軽んじないでいただきたい！」

伸ばしきれない手―しんじたいココロ―

古唄失踪から数日後――二課は無人状態で市街地を自立走行するＺＺＲ１４００ＳＳＣを見たという通報を受け、一課と連携してその目撃情報を追ったところ、都内郊外の廃車置場でそれを発見。

周囲に古唄らしき人物は見当たらず、ＺＺＲ１４００ＳＳＣに彼以外が乗った、あるいはＺＺＲ１４００ＳＳＣから降りた形跡はなく、古唄の行方に関する物的な情報はそれ以上得られなかったが、二課クルーらは彼の性格上、なんの理由もなくＺＺＲ１４００ＳＳＣを手放すことはないと断定。

幾つか考えられる仮説・仮想を突き詰めた結果、彼が無事であることは間違いなく、なんらかの理由で二課の目を自分に向けさせられない状態にあるのだろうと解釈し、大規模的な捜索を中断。緒川慎次による単独捜索活動を命じた。

大地古唄の安否が（あくまで断定できない状態ではあるが）確定したことで、二課の精神的な負担は一気に軽減される。

特に古唄の無事を聴かされた時の翼は『剣』として張るべき見栄すら捨てて安堵を表情に表したほどで、連戦と古唄失踪のダブルパンチで休止も視野に入っていたアーティスト活動に本腰を入れられるようになった。

これは最近になってノイズの出現が『減少傾向』から『非常』扱い――即ち『認定特異災害』としての本来の頻度に治まりつつあることも一因である。

が、反面で解決していない問題や激化した問題も少なくない。

特に立花響の身辺および環境については、『二課は立花響に入れ込みすぎている』と判断され、一課が優先的に身辺調査と警護をすることになり、これまでほど自由に彼女を庇えなくなった。

幸いというべきは、やはり彼女が翼と同じリディアンの生徒であったことだろうか。

響を『ガングニールの所有者』ではなく『防るべき少女』としたことで、彼女を装者として戦わせない古唄・二課の姿勢にも同意するよ

うになったのは間違いなく大きい。
それは決して「任務だから」「防人だから」という使命感や義務からくるものでなはない。立花響という少女が見せる『笑顔』が、いつも自分を励ましてくれていた彼女の『笑顔』に似ていたから――「風鳴翼として」防りたいと願ったのだ。
故に、今の彼女はこれまで使命感や義務感に迫られて何かを防っていた鈍刀（なまくら）の風鳴翼（つるぎ）とは違う。己の願いと防るべきものの笑顔で研ぎ澄まされた風鳴翼（つるぎ）は、何よりも強く逞しく美しいのだ。

――と、この数日の出来事をつらつらと述べるのは一度区切り、私立リディアン音楽院高等学科・食堂にて。
「そういえば今日だよね、流れ星。何座流星群だっけ？」
「こと座だよ。ちょっと前までは4月がピークって言われてたんだけど、最近はこの時期にも見えるんだって」
自分の背後で談笑する二人の会話に聞き耳を立てながら、翼は味のわからない日替わりランチをただ作業的に口へと運ぶ。
響に背を向けるように座ってはいるが、髪の左側だけを少し高めの位置で結った特徴的なサイドテールのせいで、響と向かい合っている未来には見えているだろう。
だが、それでも話題に挙がらないのは少し前に一度コンタクトしているからだろう。同じ学校に通っているのだから、一度でも話題に挙がってしまうと二度目というのは中々ない。
「響が帰ってきたら、少し早めに準備して、それからコンビニでお菓子を買って……まだ夜は寒いから、あったかいものも持っていかなきゃね。早く帰ってきてね？」
「うん！　あ、でも今日また先生に呼び出されちゃって……レポートは昨日のうちに片付けてもう提出したんだけど、二限目のアレが……」
「ぐっすりだったもんね……。うん、じゃあ響の分は帰ってきてすぐに行けるように私が準備しておくから、気にしないで」
二限目のアレ、というのは言うまでもなく居眠りのこと。昨晩、響

にしては珍しく夜更かしをしてしまったせいで、ただでさえ授業中の寝つきがいい彼女は授業開始から１５分で夢の中へと旅立ってしまったのである。

もっとも、放課後に怒られるだけの甲斐はあったというのか、未来に手伝ってもらいながら夜更かしして仕上げたレポートは食堂に来る前になんとか受け取ってもらえた。目下最大の問題は放課後のお説教の長さだ。

「あっ、そうだ。今日は未来と二人っきりでだけど、次の流星群はみんなで見にいこうよ。できれば、古唄さんも込みで！」

「古唄さんも？　私と響はいいけど、みんなはどうなんだろう……。ふらわーで喋った時は、みんな雰囲気よかったけど」

「きっと大丈夫だよ！」

響と未来の話題に古唄の名前が挙がると同時に、翼の肩が小さく跳ねた。

二課所属の者は誰もが知る事実ではあるが、二課所属でもなければ民間協力者でもない「ただ胸に聖遺物が突き刺さっている少女」の響に、古唄の失踪は知らされていない。

それは彼女が二課所属の装者でないことだけが理由なのではなく、古唄に強く影響された人物の一人として、彼女にその事実を教えた際の精神的なショックが、彼女の体内に宿るガングニールにどのような影響を及ぼすのかわからないが故の措置である。

「そういえば、未来にはまだ詳しく話してなかったっけ。古唄さんのこと」

「うん。この間の出来事のおかげで、響の体のことと、古唄さんのおおまかなことは教えてもらったけど、響が古唄さんといつ、どこで、どうやって出会ったのかとか……そういうのはまだかな」

翼の背筋に薄ら寒い何かが伝った。おかしい。背後では二人の少女の微笑ましい会話が花を咲かせているだけなのに、なぜこうも背中が寒いのか。翼はそう思いながらも真実を突きとめようとはしなかった。というか今だけは振り返りたくもなかった。

そんな彼女の判断は、その後ろを見ていた者ならば十割が「正しい」

と言えるものだった。具体的に何がどうなっていたのか、それは見ていた誰もが口を閉ざしていたが、少なくとも食事中は響の口から「古唄さん」という名前が出るたびにその冷たい気配は食堂を凍らせた。

なお、なぜか響だけはその爆心地に在りながらもまるで被害を受けていなかったという。

「えーっとね、初めて古唄さんと会ったのは3週間前の――」

◆

同じ頃、クリスは一人で街に出ていた。昨日は結局フィーネが帰ってこなかったため、仕方なく昼食のおかずを買いに来たのだ。

普段はフィーネが仕事帰りに買ってきてくれるし、少しくらいは作り置きをしてくれるのでそんな心配はないのだが、昨日に限ってフィーネも予想外の急用が入ったため、外食か買い食いを強いられてしまったのである。

もちろんお金は一週間に1回おこづかいを貰っているので問題ない。いっそアルバイトでもできればいいのだが、堂々とした履歴書を書けるような環境ではないため仕方がない。

「あいつ……ホントに大丈夫なのかよ……」

クリスの呼ぶ「あいつ」というのは、今からおよそ一時間ほど前にこの世から消えた男――大地古唄のことである。いや、この表現では誤解を招きかねないので訂正をする。一時間ほど前にこの「位相」から消えた男、大地古唄のことである。

(体の半分以上がノイズ、か……にわかにゃ信じられやしないが、あんなもん見せられちまったら信じざるをえないじゃねぇか……)

ここ最近になってノイズ(大)との融合症例(地)第一号(古)の研究に没頭し始めたフィーネと、先日のノイズの群れとの戦いでより膨大なノイズ因子を求めている古唄は、『理性を留めつつ肉体をさらにノイズ化させる』方法を模索するため結託。

制御装置であるウォッチベルトの改造、明らかに過剰と思われるノイズ因子の投与、暴走する本能を抑え込まず理性とシンクロさせる実

験など、彼らは不眠不休の状態だった。
だがそこまでしてなお『ノイズの力』を求める古唄の狂気と、古唄の肉体を人ならざるものに変え自らの糧にしようとするフィーネの執念を前に、クリスは何も言うことができなかった。
彼は確かに争いの力を持ち、暴走の危険性が明らかに高いであろうその力をさらに高めようとしている。だが、彼は言ったのだ。女や子供を戦わせないために大人の男である自分が戦う、と。
だからクリスはそれを止めなかった。信じられないが信じたかった。彼が力を求めるのは争いのためではなく、争いを止めるための力——そのために争いの力よりもさらに凶悪で強力な力が必要なのだと。
そしてその信じる心が欺かれたり騙されたりしなければ、信じてみようと思った。この世には『信じてもいい何か』があることを信じようと思えた。だから彼女は、古唄とフィーネを止めはしない。
(信じる、か……。ハッ、バッカバカしい。今さら誰の何を信じろってんだ……)
フィーネは言っていた。争いを無くすためには、それよりも大きな力で争いを潰すしかない。ヒトとヒトとが繋がるには、痛みこそが最も強い絆になるのだと。
しかし、クリスは既に気付いていた。それはきっと、自分を従わせるためにフィーネがついた嘘、あるいは捻じ曲げられた真実なのだろうと。
だがそれでもよかった。フィーネは自分を戦力としてしか見ていないかもしれない。だが、なんだかんだ言いながらも彼女は今日まで自分を育ててくれた。その事実はずっと変わらない。
(フィーネの言葉も、自分のやるべきことも、ましてや大人なんてのは全ッ然信じらんねぇけど……)
古唄と協力すると決めた時、気分がいいからと作ってくれたシチューの味は信じられる。
ただ戦力を保有したいがために栄養分を投与するだけのものではなかったことを——あのシチューに込められた愛情を、信じられるよ

うになりたい。
「……もし、この世に信じられるものがあるなら……それをあいつが証明してくれたら、その時は……」
――フィーネに、ありがとうって言おう。

守るということ―ロスト―

夕方。響と未来は互いに小さなショルダーバッグを肩にかけながら女子寮を出ると、コンビニで購入したガムを噛みながら郊外の丘へと向かっていた。

前々から予定はしていたのだが、天候・気温だけでなく、最近になって特にノイズの出現が激減してきたことも相俟って、流星群を見るにはまさに最高のコンディションだ。

「もう日も暮れかかってるけど、でも少し早かったかな？　響、寒くない？」

「うん。むしろ未来の方が寒そうだよ。ワンピの上にカーディガンだけなんて……」

もちろん上着の話であって、ワンピの上にカーディガン『だけ』とはいっても下着はつけている。

そう言う響はといえば、こちらはシャツの上に少し厚めのパーカーを羽織っていて、いかにも温かそうな格好だ。

なお、当たり前のように腕を組んで未来の右手を自分のポケットに誘いつつ、その中で恋人握りをしているのはどういうことなのか。

「私は平気だよ。だって、響の体温がとっても温かいから……」

「未来だってぬくぬくで柔らかいよ。それに、すごくいい匂いがする……」

「ええっ!?　ちょ、ちょっと響、あんまり嗅がな――きゃっ!?」

通り過ぎる通行人の何名かが振り返るような会話を繰り広げながら歩いていると、曲がり角から飛び出してきた小さな影が勢いよく飛び出すのが見えた。

ちょうど、左角からの飛び出しということもあり、未来の右側に立っていた響は彼女よりも早くそれを察知し、未来を自分の腕の中に引き寄せて衝突は免れたのだが、

「危ない！」

「うぉっ!?」

今度は勢いを殺しきれず車道に出そうになった人影の腕を掴んで

自分の方へと強く引き、三人まとめて勢いよくすっ転んだ。

◆

予定よりやや早く郊外の丘へと訪れた響と未来は、なぜか一緒に星を見る流れになって連れてきた少女を挟むように座り、軽食をとりながらガールズトークに花を咲かせていた。

「へー、クリスちゃんって言うんだ！　綺麗な名前だね！」

「な、名前に綺麗も何もないだろっ……！」

「そんなことないよ。クリスの瞳、ホントに水晶みたいに佳く澄んでるよ」

まるでホストに挟まれた初心女のように顔を赤くしている少女――クリスは、いったいどうして自分が初対面の女の子二名（ただしイケメン含む）と一緒に流れ星を見に行く流れになっているのか、と必死に記憶を辿っていた。

確か、ぶつかりかけたお詫びと轢かれそうになったところを助けてもらった礼に何かしようとしたはいいが、昼食を買うに必要な最低限の額しか持ってきていなかったため、何もできなくてあたふたしていたところを、「じゃあ一緒に星を見に行かない？」というナンパと大差ない提案にホイホイ乗ってしまった、というのがこれまでのあらましだった気がする。

この二人が女の子で本当によかった、などと思うクリスであったが、上記に正しく響と未来は同年代の女性をオトすことに関しては比類なき力を発揮するので何もよろしくないというのが現実なのだが、それを本人が知るのは後のこととなる。

「――ッ!!　は、歯の浮くようなセリフをさらっと言うんじゃねえ！　恥ずかしくねぇのかよ!?」

「？　全然恥ずかしくないよ。だってホントのことを言ってるだけだもん。ね、未来？」

「うん。クリスの名前も、クリスも、綺麗だし可愛いと思うよ」

裏を感じさせない笑顔を向けられ、つい言葉に詰まるクリス。

彼女は『不信』を胸にギアを鎧う戦姫でありながら、同時に誰よりも『信頼』を求めている少女でもある。
それは、誰かに何かを信じてほしいが故のものではなく、何もかもを信じられなくなった自分に『信じ続けてもいい』と思わせてくれるような信頼。
「それにしても、ホントに今日はよく晴れてるね。星、きっとよく見られるよ」
「流星群でも、お願い事したら叶えてもらえるかな？」
立花響と小日向未来。彼女たちの出会いは、他者を疑いながら過ごしていたクリスにとって明白な『可能性』であった。
彼女たちは争いや戦いになんの関係もない『普通の少女』たち――そんな彼女たちなら、戦姫としてではなくただの人間として、雪音クリスとしての自分を晒してもいいのではないか。
「今さらだけど、流星群と流れ星と同じものとしてカウントしていいのかな？　ピークにお願い事しても、叶えてもらえそうな気がしないんだけど……」
「珍しさガタ落ちだもんねー……」
今なら、フィーネの嘘に気付けたこと――いや、クリスですら嘘だと察せられるようにフィーネが地を出すようになった意味も、わかるような気がしていた。
きっとフィーネは、古唄という研究材料を得たことでクリスへの興味を薄れさせたのではない。彼女に、自分の信じるべき『何か』を探す自由を与えたかったのだ。
雪音クリスに『嘘』はもう必要ない。フィーネの『研究』に、もうクリスという存在は必要ではない。それを決した上で作ってくれたご飯が、フィーネの出した『答え』なのだ。
「ねぇクリスちゃん。もしよかったら、またこうして一緒に星を観にこようよ。せっかくこうしてお友達になれたんだもん、これっきりなんて寂しいよ」
だから、今度は自分が『答え』を示す番だ。フィーネがそうしたように、何も今すぐ全てを信じられずとも、今まさに差しのべられてい

る手を掴み返すことくらいできるのだから。
「……ああ、そうだな。アタシも、お前たちと――」
そんな、希望を目の前にした瞬間のことだった……。

◆

特異災害対策機動部二課に突如として鳴り響くアラート。
それは認定特異災害『ノイズ』の出現を意味し、ここ数日の平和を否定するかのような悪夢の再来をも表していた。
「ノイズ出現を確認！　ノイズギア装者のものではありません！」
「本件を我々二課で扱うことを一課に通達！　場所を特定し次第、翼を向かわせる！」
「出現地特定！　モニターに出します！」
場所はリディアンから少し離れた郊外。ノイズの数は以前のような大量の群れではなく、十を越えるか越えないかというところ。
しかし問題はそこではなかった。そのモニターに映された驚愕の映像、それはノイズたちの出現したポイントのすぐ近く、ノイズから逃げるように移動する3つの生体反応、および――、
「バカな!?　『天羽々斬（つばささん）』以外の聖遺物反応が二つ!?　まさか……!!」
「響君と鎧の少女が同行している、だとぉッ……!?」

◆

「なんでこんな時に……！　最近めっきり出てこなくなったと思ってたのに！」
未来とクリスを先導するように走る響が思わず愚痴を洩らす。
足の速さなら未来に、単純な体力だけならクリスに劣るが、ノイズから逃げる上で最も有効的な道筋を知るのは彼女だからこそ、未来とクリスは彼女にペースを合わせながら、しかしノイズに追い付かれないようなスピードで走り続ける。

（あのノイズ……自然発生したものじゃねぇ！　でも、だとしたらどうして……ソロモンの杖はフィーネが管理してるはずだ！　今さらフィーネがあれを悪用する意味なんて……！）

―ない、と言いきれるだろうか―

クリスの心の中に、再び『不信』の二文字が浮かび始めた。

確かに、フィーネの興味は既に『聖遺物との融合症例』から『ノイズとの融合症例』へと移り、ソロモンの杖の機能および役割は古唄の体内に巣食う『ノイズ因子』の研究に全てを注がれた。

しかし、もしもフィーネの望むものが古唄の中に認められないとすれば、再び彼女は『聖遺物との融合症例』を狙い、そのためにソロモンの杖を『人を襲う道具』として使うことも考えられる。

だとしたら、あのご飯に注がれた愛情も、自分を騙すための『偽りの蜜』かもしれない。悪い方へ、悪い方へ、クリスの思考はズレていく。

「――っ！」

ネガティブな意識はやがてクリスの視界に靄をかけ、一匹のノイズが彼女の僅か数メートル横の地面を抉る。

そして舗装されていない地面に与えられた衝撃は砂埃を作ると同時にクリスの足元を狂わせ、その音に反応したノイズが今度こそ彼女を仕留めようと襲い掛かった。

それを察知してすぐにネフシュタンを纏おうとするクリスだが、よく考えればあの鎧はフィーネに返却し、今あるのはもうひとつの『力』のみ。しかし、その力を使うにはもう間に合わない。

（ここまでか……。アタシは、また全てを失って……信じられると思ったフィーネも信じきれず、やっとできるかもしれないと思った友達の手も掴めず、みじめなままで死ぬのか……！）

諦めにも似た脱力感を感じながら目を閉じ、最期の時を待つ。

「……？」

だが、それは近いようで、あまりに遠く。
そして掴もうとしていたものが、崩れていく。
信じるべきものを信じてもいいと証明されながら、彼女の想いは否定されるのだ。
「大丈夫？」
「――ッ!?　お前、それ……ッ!!」
橙色の、光によって。
「……響、いいの？」
気付けば、クリスを安心させるかのように肩に手を添えながら、未来が響に悲しそうな視線を向けていた。
だが、そんな視線に、彼女はただ小さく……しかし力強く応える。
「わたしは未来を守るために『これ』を使うと決めたんだ。だったら……わたしと未来の友達を守ったっていい。……そうでしょ？」
「……うん。わかった、じゃあ……無理だけはしないで。私……ここで待ってる。響を信じて待ってるから」
笑顔――それは誰よりも日常を愛する少女を非日常へと送りだす残酷な優しさ。
そして、非日常でボロボロになった少女の心を迎えるための脆弱な強さ。
「なんで、お前が……！　どうして……！」
「……クリスちゃん」
「……行くな。行くなッ！」
――ごめん。

守りたい、戦いたくない―キレイゴト―

（ノイズから未来とクリスちゃんを守るためには、二人とつかず離れずノイズを迎え討つしかない。けど……）

迫るノイズ。それらを我武者羅に突き出した拳で弾きながら、響はシンフォギアの力に振り回される自分に改めて気付いていた。

そもそも響は翼や古唄とは違い、戦いに赴くため何かしらの訓練を受けたわけでも、生まれ持った身体能力が高いわけでもない、ただ不意に力を得ただけの少女だ。

故に、シンフォギアの使い道どころか『戦うための技術』も『戦うための覚悟』出来上がっていないまま、確実に迫る明確な殺意（ノイズ）と戦わなければならない。

（そういえば、一人で戦うのはこれが初めてだ。最初は逃げたりかわしたりするだけで精一杯だったし、二度目は古唄さんが手伝ってくれた……いつも、誰かが守ってくれていた）

独りきりの戦い。それは、響の持てる力だけしか信じられない戦い。

（こわい……！　ノイズと戦うって……死んじゃうかもしれないことと向き合うって、こわい！　こんなこわさ……未来たちには絶対に知ってほしくない！）

Φ　――――――　Φ

響の胸に、何か小さな光が灯り始める。

その光はやがて音となり――そして、旋律を奏で始めた。

「この音色は……うひゃあっ!?」

飛行型ノイズの一体が体をねじり、槍のような形状となって己を射出。それを両の掌で受け止めると、響の胸に灯った唄がギアを介して本物のメロディを響かせる。

それは、翼が戦っていた時と同じ、ノイズと戦うための曲。しかしどこかおかしい。響のギアから流れる旋律には、攻撃的な意思がまる

で感じられない。
「ギ、ギアから音がでて……なにこれ!?　いやだ！　こわい……なんなのこれ!?」
　曲が流れるとほぼ同時に漲ってきた力。しかし戦うための力を恐れる響はその音を『こわさ』と認識してしまい、その場にへたりこんでしまう。
「やだ……わたしの中でよくわからない熱いものが蠢いて……いやだ……！　こわい……！　こんなの知らないよ……!!　たすけて未来……！　助けてッ！　古唄さんッ!!」
　蛞蝓型ノイズから放たれる追撃。心の中から迫る『こわさ』と目の前に迫る『こわさ』に挟まれた響は、その咄嗟の出来事に何もできないまま、目尻に涙を浮かべながら衝撃に備えていた。
　そんな時だった。響のギアから放たれる旋律に合わせて、響のものとは異なる声が聞こえたのは。

Ω　必ず……守りたい　子供たちの夢　Ω
Ω　壊させない　『あの笑顔は守り通す』　そう決めたッ！　Ω

　どこかの誰かがこんなことを言った。『奇跡というものは、人が精一杯の努力をした時にだけもらえる報酬なのだ』――と。
　ココロとノイズ――その両方から『こわさ』を突き付けられ、涙した響ではあったが、彼女はその身を構えた。
　もしも彼女が『こわさ』に負けてそこから逃げ出していたら、彼女の背中の向こうにあった大切な陽だまりは――未来とクリスの命は失われていただろう。
　だからこそ、彼女の『精一杯の努力』に見合うだけの『奇跡』は訪れた。
　大地をめくり上げるかのような勢いで落下し、凄まじい砂埃を巻き上げながら現れた『黒い鎧の巨人』が――。
「こ……古唄さん!?」
『すまない、立花……。またキミをそんな姿にさせてしまって……』

真っ黒なマントと大きな背中、何よりギアそのもののせいで表情はわからないが、声を聞けばわかる。
今、彼は――大地古唄は泣いている。絶対に戦わせたくない大切な人に、戦わなければならないような状況へと追い込まれるまで何も出来なかった自分が悔しくて、不甲斐なくて。
だがそんな彼の悔しさと不甲斐なさを吹き飛ばすかのように、響はその目の涙を拭って声を張り上げた。今だからこそ言わなければならない想いを伝えるために。
「大丈夫です、古唄さん！　わたしは戦ってません！　わたしはただ未来を……わたしにとって一番大事なものを守ってただけなんです！　だから……お願いです！　わたしに唄わせてください！」
『……守るために、戦うつもりか？』
「違います！　守るために……守るだけですッ！　言ってること、自分でも全然わかりませんけど……でも、やらせてほしいんですッ！　ただ、ただひたすら……大事な陽だまりを自分の力で守りたいんですッ！」
矛盾。
守るためには戦わなければならない。戦わなければ何も守れない。大切な人も、居場所も、自分の命さえも……戦わなければ生き残れない。
しかし、彼女はその矛盾を孕んだ無茶苦茶な理屈を掲げながらも、その瞳に確かな一本の芯を宿していた。それは『戦わないこと』ではなく、『戦おうとしないこと』……戦わなければならない状況でも、戦いを嫌うことのできる気持ち。
戦いという悲しさやこわさに慣れてしまわないための気持ち。それを宿しながら、彼女は古唄を見つめていた。
『……わかった。だが、これだけは忘れるな……。立花はまだ子供で、女の子だ。子供は幸せでなきゃいけないし、女の子は争いのない平和な場所で笑っていなきゃいけない。それをきちんと理解した上でギアを使え。どんな理由があっても……何かを守るためでも、力を振るうことは暴力だ』

古唄の言葉に響が頷くと、古唄は響のギアから放たれる音に合わせてもう一度『唄』を歌い始めた。

Ω　ずっとずっと願ってる　光ある未来の果て……　Ω
Ω　響きわたれ今すぐ！　たくさんの想い、さぁ……　Ω
Ω　駆け出せ！　ライダーよ！　Ω

（古唄さんの唄がわたしに力をくれてるのがわかる……。けど、この力は本当なら絶対に使っちゃいけないもの……。それを使うのなら、絶対にブレることのない気持ちが必要だ……！　わたしの……変わることのない気持ち……）

―響！―
―ひーびきっ！―
―もう、響ってば……―
―ひ、響っ!?―
―響ーっ！―

（……なんだ。そんなこと、戦わないこととか、守りたいものを守ることなんかより、ずっと簡単に出来ることだったんだ……。わたしは……親友を、大好きな人を、大切な陽だまりを――未来を、守りたいんだッ！）

Φ　我慢の限界！　伝えたい、気持ちがあるんだ！　Φ
Ω　キミの胸には　優しい日が　差しているから！　Ω

新手――古唄の登場により危機感を増したノイズたちは、とうとう全員がかりで古唄と響に襲い掛かった。
だが、既に彼らは胸の唄を唄っていた。それが何を意味するのか、その答えはすぐに現れた。
（小さいノイズが、近づいてきただけで炭化してる……!?）

（これが立花のギア出力を上げた時の力か……凄まじいな、俺も気を抜いたら炭化させられそうだ……）

ΦΩ　守り抜くのさ　明るい陽だまりを！　ΩΦ

Φ　Ｓｍｉｌｅ！　笑って！　永遠にもっと、あの笑顔で！　Φ

Ω　唄え！　古臭い唄だけど　さぁ！　Ω

『立花！　キミのギアが放つ力は一定距離まで近づいた小型ノイズを葬れるだけの制圧力を持つらしい！　だがキミの射程圏にいると俺もその対象になってしまう！　だからキミは小日向たちのいるところまで下がって二人を守ってくれ！』

中型ノイズの一体を面突、胴突、面横打からの胴横突蹴で吹き飛ばすと、古唄は響に後退するよう命じる。

響の力はノイズを一定距離以上近づかせないためのバリアのようなもの。本来ならばノイズとギアが接触する瞬間、位相調律によりノイズへの攻撃を可能とする膜状のコーティングを広域化させたそれは、対ノイズ戦において大きな抑止力となる。

無論、それはガングニール本来の力でもなければ、響が生み出したアームドギアでもない。古唄がガングニールの出力を上げたことによる一部機能のオーバーフローが結果としていい方向に働いただけだ。

古唄は既に大型ノイズ数十体分に等しいノイズ因子を取り込んでいるため即座に炭化させることはないが、それでも今の響は古唄にとって危険要因の塊なのだ。

「わかりました！　古唄さんも気をつけてください！　わたし、古唄さんのこと信じてますから！」

『……ああ。キミから受け継いだ優しさと勇気がある限り、俺は負けない』

Ω　小さくて、儚い日向にも　ほら　Ω

Ω　可愛らしく咲き立つ花　一輪だけじゃないから　Ω

響が下がると、幾許か楽になった体を低く構え、日本拳法とは明らかに異なる構え――右の掌を頭の上で外向きにし、左の拳を前へと出した古唄。
それは古唄が若い頃――喧嘩ばかり繰り返していた時にとっていた不敗ポーズであった。
彼のその珍妙な構えは、見る者によってはおかしいものにしか見えないだろう。しかし、響は――そしてクリスはわかる。彼のあの構えは、何があろうと絶対に、この大地の上で負けることはないと。

Ω　幸せも、優しさも、もういいんだよ　Ω
Ω　もう、俺は必要ない　さぁ……逝こう　Ω

古唄はノイズの群れに飛び込むと、一体の人型ノイズの腕を掴み、肩と背中でその体躯を支えると足を払って勢いよく大地に叩きつけ、炭化する前にその脚を掴んでジャイアントスイングにて周囲のノイズを巻き込む。
そう、この古唄の構えは彼の最も得意とする投げ技を主体としたもの。弦十郎曰く、『天を背負い、大地を砕くように叩きつける』構えらしい。

Ω　まだまだ立てるはずだ　大事なみんながいるから　Ω
Ω　死ぬことを恐れず　吠えまくれ……さぁ　Ω
Ω　駆け出せ！　ライダーよ！　Ω

残るは葡萄型ノイズ1体。逃げ回りながら背中の球体爆弾を撒き散らされるのは、超至近距離での戦いを得意とする古唄にとってはあまり得手とは言い難い相手だが、構うことはない。
古唄は唄を口にしながら、体内に宿るノイズ因子の一部を開放し、その姿を変えていった。
『ウグォおぉオオオォァぁあアぁァァッ!!』

咆哮と同時に背中のマントが消滅し、全身が鋭角的でスマートなフォルムに変形、両手と両足には鋭利で巨大な爪が現れる。
その姿はまさしく、以前に響と未来が見た彼の暴走した姿――『ZERO―MEGA・S』のものだった。
しかし、あの時の野性的な雰囲気は何故か感じられない。四つん這いになって、まるで野獣のように敵を蹂躙していたあの姿ではないのだろうか――彼の戦いを後ろから見ていた響と未来は、そう思いかけていた。

Ω　我慢の限界！　掴みたい未来があるんだ！　Ω
Ω　胸に響く　この旋律　嘘じゃないから　Ω

―Start up―
だが、その胸の発光体から放たれた光が虚空に「10」のカウントダウンを刻んだ瞬間、彼女たちは理解した。あれは、あの時みた力と同じ――けれど、絶対に違うものだということを。
そう、あれは古唄の精神力が暴走する力に打ち勝ち、何かを守るために暴力を振るうと決めた姿。抑えきれない破壊衝動を無理に抑えこまず、自分の気持ちとこみ上げる力をひとつにしたもの。
故にあれはZERO―MEGA・Sではなく、ノイズギア―アクセルフォームと呼ぶにふさわしい。
―7、6、5、4……―
一瞬――ほんの僅か1秒にも満たない「一」回の「瞬」きをするために必要な時間のみをかけて、古唄は16メートルは離れていた葡萄型ノイズの正面へと回り込み、左の足首に『S（サーチ）R（ロックアタッチメント）A』を展開。
体内のノイズ因子をそこに集中させて葡萄型ノイズの腹部を蹴ると、S（サーチ）R（ロックアタッチメント）Aから放たれた黄色いレーザーが「Φ」を描き、蹴り飛ばされた先へと回り込んだ古唄がさらに黄色い「Φ」レーザーを打ち込む。

―3―

Ω　大好きだったよ　笑顔のキミたちが　Ω

―2―

Ω　Ｓｍｉｌｅ！　泣くな　燃え尽きた命のメテオ……　Ω

―1―

古唄の飛び蹴りが無数の「Φ」を透過して繰り返され、虚空に描かれていた数字が「００」を刻む頃には、既に全てが終わっていた。

―ＴＩＭＥ　ＯＵＴ―

―Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ―

残像を引いていた古唄の姿が本来のマッシブな姿に戻ると、葡萄型ノイズは青白い炎に包まれ炭化を完了し、古唄もまたノイズ因子の制御に割いていた集中力が切れギアが解除された。

慌てて駆け寄った響たちが倒れ込んだ古唄の様子を見ると、どうやらここに来る前から既になんらかの理由で疲弊していたらしく、彼はついさっきまで戦場となっていたこの場所で眠りこけていた。

手に入れたもの―しあわせ―

驚愕の二文字は、今この時この状況を直視した者だけが真に理解できるものなのだろう、と巨漢――大地古唄は困惑しながら脳内ナレートを綴った。

見慣れたものではないが、最近はよく見る天井。触り心地のよくない薬品の匂いが染みついた掛け布団。

視線を右へと逸らせば、グラマラスなボディを惜しみなく見せつける金髪の美女が手帳とにらめっこ。その横にはこちらも育ちのいい肉体に見合わない童顔が愛らしい銀髪少女が椅子に座って寝ている。

ここまではいい。見覚えのある天井、何度か感じたことのある繊維の粗い掛け布団。そこから導き出される答えは、ここがフィーネ邸で、横にいるのがフィーネとクリスだということが理解できた。

問題は、その逆――彼の視線が左に逸れることでようやく見える二つの人影。

「あっ！　古唄さん！　やっと起きてくれたんですね!!」

「え？　あ、ホントだ。大丈夫ですか？　どこか痛くありませんか？」

ひよこのような印象を与える薄い茶色のショートヘアの少女と、大きな白いリボンが目を引く黒髪ショートの少女。

面倒だ、素直にその名を言ってしまえば、ようするに――

（立花と小日向がなぜここに……？　まさかフィーネが俺との約束を反故にして……いや、それはない。彼女の研究は順調だ。彼女らを――立花を利用して得られるメリットは、俺を裏切ってノイズの生体研究が不可能になるというデメリットより大きくはないはずだ）

「困惑してるわねぇ……。まぁいいわ、ひとまず私は自分の仕事に戻るから、あとはあなたたちで好きにしてちょうだい。……シーツとクリスさえ汚さなければ、何してても いいから」

直後、フィーネの言葉に耳を傾けることのできた二人のうち、未来だけがその言葉の意味を理解して顔を赤く染め上げ、ここに来てから未だに響と繋ぎっぱなしだった右手までもがやたら熱くなった。

（フィーネはいったい何を目的として立花と小日向を？　まさか俺が

謀反を謀らないようにするための人質？　ありえるが、だとしたら無駄すぎる……。俺はあいつに恋をすると決めたんだ、その俺がフィーネを無意味に裏切れるはずがないし、それをわからない彼女でもない……）

（な、ななな何を言ってるのあのフィーネさんって人!?　い、いくらなんでもこんな人前でそんなことできるわけないじゃない！　それに、そういうことはいつもみたいに寮のベッドで二人っきりでって……！）

（そういえばご飯まだ食べてなかったなー。ちょっとお腹すいてきちゃった）

各々、とてつもなくまとまりのない思考をぐちゃぐちゃと頭の中にぶちまけながらも、ひとまずの『第一声』を決める。

なぜ一般人（仮）の二人がここにいるのかとか、ちょっと人様の前で口にするのには憚られる内容についての打ち合わせだとか、今晩のご飯の献立などは後にして――特に二番目のは何がなんでも口にしないと決めて。

「古唄さん、体の具合は……？」

最初に言葉を発したのは、意外にも未来だった。コンマ数秒前までピンク色の妄想を繰り広げていたとは思えないほど真剣なその瞳は、とことんまで素直に古唄の身を心配しているようだった。

どうやら先の戦闘で、古唄が響に向けている感情が「親が子の身を案じるもの」と同じ類のものだと感じとったらしく、彼が『信用していい人間』だと確信させるに至ったらしい。

もしも彼女がその感情を「男性が女性に向けるもの」と勘違いしていたら今こうして疲弊しきって眠っていた古唄は目を開けることが出来たかどうか、非常に不安なところであった。

――が、当然ながらそんなことを未来が考えていたとは露ほどにも思っていなかった古唄は、自分の身を心から心配してくれている未来の視線に胸を打たれ、

「……っ！」

「こ、古唄さん!?　古唄さん!?」

「どどどどうしたんですか!?　どこか痛いんですかッ!?」
言葉を発することもできず泣きだしてしまった。
そう、何を隠そうこの大男、自分に向けられた優しさにかなり弱い泣き虫さんだったのである。
「痛いわけじゃない……ただ、苦しいんだ……。キミたちが無事でいてくれて嬉しいはずなのに、キミたちの優しさが、温かさが……心地よくて、苦しいんだ……」
大地古唄は、ノイズである。
ある日、親友になんの前触れもなく地元・京都から東京に呼び出され、その親友に「ノイズになってくれ」と頼まれ、やや自暴自棄になりながらその身をバケモノへと変えた英雄（ぎせいしゃ）である。
ノイズである以上、自分の『ノイズ』としての部分は誰にも理解してもらえない。ノイズである以上、愛する者が出来て結ばれても、子を産んでくれとは言えない。ノイズである以上、シンフォギア装者の娘たちと手を繋ぐことはできない。
だから、想像もしていなかった。
誰かに自分という存在を『ヒト』として見てもらえるなどとは、まして――こんな外道の力で守ったものに、己を案じてもらえるなどとは。
だからこそ、古唄は今一度、響と未来に無言で誓う。たとえどんな時でも、どんなことがあっても、自分の命が在る限り、この二人の少女だけは絶対に守り抜いてみせる、と。
「……やっぱり、古唄さんは優しい人です。初めて出会った時、古唄さんはわたしに「怖くないのか」って訊きましたよね。あの時、ホントは全部まるっきり怖くなかったかって言われたら、ちょっとだけ嘘でした。けど……今ならその「ちょっと」さえも怖くないです」
「私も響と同じです。最初に会った時は、実を言うとあくまで「響が信用してるから悪い人じゃないんだな」ってくらいにしか思ってませんでした。けど……今は違います。私自身の目と心で見て、こうやって話して、わかりました。古唄さんは本当にいい人なんだ、って」
響と未来の笑顔が、黒紫色に輝く古唄の目に眩しく映った。

「……ありがとう。けど、それでもキミたちは俺の傍にいるべきじゃない。キミたちには、ただ平和な日常の中で笑っていてほしい……。そのためなら、俺はなんだってする……。たとえこの命が燃え尽きることになっても……」

英雄（ぎせいしゃ）はこの世で自分だけでいい。――それが、古唄がノイズギアを纏うと決めた理由であり、誰にも押し付けることのできない信念だった。

これだけは、たとえ誰にどれだけ頼まれても……それこそ、響と未来の頼みでも聞くことはできない。いや、むしろ彼女たちにだけは絶対に頷いてやれない。頷けば、彼女たちは自分の負担を減らすための『英雄（いけにえ）』になってしまうかもしれない。

「――嫌です」

やはり、彼女は――響はそう言った。

しかし、その言葉の内に秘められた意味は、古唄の予想とは大きく異なっていた。

「最近、ずっと考えてたんです。古唄さんに助けられる度、わたしの中で大きくなっていく気持ち……未来からもらう温かさとは違う、もうひとつの温かさ。これはなんだろうって。それが、今日やっとわかりました」

少し照れ気味に、けれど真剣に、響の視線が古唄の視線を捉えて離さない。

――お父さんみたいな、温かさでした――

「――って言ったら、怒りますか？」

頭を掻きながら、響は苦笑い気味に言う。未来も、その感覚は理解できた。古唄の二人に対する並々ならぬ愛情は、男性が女性に向けるものではなく、むしろそういうものから彼女たちを守ろうとする――父性。

子供が危険に晒されていたら『守りたい』。子供が泣いていたら『笑わせたい』。子供が困っていたら『助けたい』。古唄のしたいこと、今

までしてきたことは、全てそれに適っている。
故に古唄も、怒りはせず、むしろそれを肯定しようとして――戸惑った。
「……俺が、立花の父親に？　そんなことを言ったら、親父さんに失礼じゃないか？　こんな、武骨で愛想もない男なんかと一緒にされたら……」
「……わたしのお父さんは、今はいません。死んじゃったりとかはしてないと思いますけど、どこにいるのかは……。だから、ちょっとだけ甘えたいのかもしれません。古唄さんっていう、お父さんに……」
未来の右手と繋いでいる方とは逆の手で古唄の左手に触れる響。
黒くて硬いライダーグローブに阻まれて彼の素肌の感覚や温度はわからないが、そこにはじんわりと伝う熱が確かにあった。
「たち――じゃないか。その……響、と呼んでもいいのか……？」
不安そうに、だが繋いだ手を信じるかのように、おそるおそる響の名を口にした古唄。
そんな彼に、響は花を咲かせたような笑顔で「はい！」と力強く返事を返した。
「俺は……俺はまだ、響の父親に相応しいかどうか自信はない。もしかしたら、ノイズではなく俺が響を泣かせてしまうかもしれない。俺の体のことで、響を不安にさせるかもしれない。それでも、俺をそんな風に思えるのか……？」
「もちろんですっ！　それに、わたしには未来がいますから。わたしが泣いたら未来が慰めてくれるし、わたしが不安になったら未来が抱き締めてくれる。それは――絶対に、絶対ですからっ！　ねっ、未来？」
「うん。最初は、響に守ってもらうばっかりの自分は嫌だなって思ってたけど……今はそうは思わない。ありのままの私で……『響のたくさん』を守れるってわかったから。だから、古唄さん……私のお父さんにも、なってくれますか？」
父――実のところ、古唄はそう呼ばれる存在をあまり理解できないでいた。

古唄の父は、彼の体が急成長を始めた中学の頃、あまりに逞しすぎる体を持ち始めた彼を気味悪がって虐待を繰り返し、とうとう刃物を向けるようになった時、咄嗟にそれを防ごうとした古唄によって逆に殺されてしまったからだ。

正当防衛として罪にこそ問われなかったが、そのせいで母には迷惑をかけたし、周囲からの視線も変わってしまった。だから、古唄は「父親」というものにいい印象はあまりなく、彼女たちがそれを求めることに、内心では苦笑いもしている。

しかし――響と未来がそんな事情を知るはずもない。彼女たちは純粋に、古唄のことを信頼し、本当の家族のように想ってくれている。ならば、それを斜めに聞き流すわけにもいくまい。

（……ありがとう。響、未来……。キミ……いや、お前たちは今日から、俺の可愛い愛娘、だな……）

それまで無表情を崩さず、ただ無感情で無感動な鉄面皮を被っていた古唄が見せた、柔らかく優しい微笑み。

彼の、抑えきれない喜びがようやく見えた瞬間だった――。

（……お、起きづれぇ……ッ!!）

あと、実は途中から起きていたクリスはいつ起きていいものかタイミングを計り損ねていた。

◆

響たちとの話が終わり、まるで図ったかのようにタイミングよく現れたフィーネに呼ばれた古唄は、ついさっき起きたばかりのクリスに二人を任せて研究室へと訪れていた。

ここでは主にノイズ因子の内包量や古唄の体に対する適応進行度を計測したり、ウォッチベルトのメンテナンスをしているのだが、いつも使っている器具はどれも待機状態で起動している様子はなく、代わりというかのようにシートに隠された巨大な荷物が置かれていた。

「さて古唄。まだ途中段階ではあるが、ここまで私の研究に付き合ってくれた礼と、今後も付き合ってもらうための賄賂も込めて、これを

くれてやろう」
古唄の目測では、高さ1メートル～1メートル２０センチ、幅８０センチ程度で、長さ(あるいは奥行き)は2メートルを越えている。あまり正確な数値ではないが、大きく逸れてもいない。
中身が『なんなのか』はわからない。だが、『どんなものなのか』なら、既に確信を持って把握したと言える。なぜなら、彼はそのシートの『盛り上がり方』を知っているからだ。
「まぁ、気に入るかどうかは知らんがな」
そう言ってシートをどけると、そこに在ったのは黒いスリムなボディに赤いポイントがつけられセクシーさを醸し出しているオフロードバイク――『Ｄ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ』だった。
「……」
「呆けおって。どうした？　やはり好みではないか？」
「まさか。フィーネがくれるというのだから、俺が文句を言えるはずがない」
無感情で無機質な無表情のまま、フィーネの横を通ってＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ（Ｆｉｒｅｃｒａｃｋｅｒ　Ｒｅｄ　×　Ｅｂｏｎｙ）に近づき、左手でグリップを握りながら右手でシートの触り心地を確かめる古唄。
わかる――これは新車。それもただの新車ではない。シートの狭さと硬さから座り心地に難のあるＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘだが、シートの中に詰められたクッションがノーマル仕様よりも柔らかく、多めに使用されていて、スマートな外観を崩さないまま面積も僅かに広げられている。
さらにグリップ。並のライダーより何回りも大きな彼の手にフィットするよう、凹凸が多い太めのものを使い、やや高めに設定されていて対向車が眩しく感じるヘッドライトも若干ながら下向きになっている。
新車――それでいて改造の域にまで入り込まない「改良」車。
周囲のライダーやドライバーに気を配る古唄らしさを出しつつ、彼好みの静かなノーマルマフラーは変更せず、彼の体格に見事フィット

するようにされている。
　まさに古唄のためのマシン。バイクに対する並々ならぬ愛情がある古唄だからこそ気づける、フィーネの古唄に対する想いが言葉以上のものとなって伝わってきた。
「……フィーネ」
「何かしら」
「もうすぐ、わかってあげられそうだ……」
　―恋心ってものが―

相棒への贈り物―ドナシュラーク―

翌朝――普段よりも少し早く起きて朝食をフィーネ邸でもらった響と未来は、古唄の運転するD―TRACKER　X　SSC（サイドカー付）に乗ってリディアン音楽院女子寮へと帰宅。

彼女たちと別れた後、古唄がD―TRACKER　X　SSCのセンタースタンドを蹴ろうとすると、彼の肩を軽く叩く手がひとつ。

響たちを送り届けるためとはいえ、リディアンは女子高である。関係者でもないバイクに乗った巨漢が女子寮の近くにいたら、職務質問のひとつくらい受けても仕方がないか、と思いながら古唄が振り返ると、そこにいたのは――、

「おはようございます、大地さん。ようやく見つけましたよ」

（……誰だ？）

そこにいたのは黒いスーツが似合う細身の人のよさそうな青年。

どこか底知れない雰囲気を持ちながらも、威圧感や不快感は与えないその男は、古唄を「大地さん」と呼び、彼を知っているような口ぶりだった。

「あ、そういえば自己紹介をしていませんでしたね。僕はこういう者でして、あなたを探していたんです」

（……緒川慎次。ああ、二課のクルーか……）

渡された名刺を見ながら相手の男の顔を一瞥すると、確かに体つきは悪くなく、優男的な雰囲気は出しているが隙も窺えない。

自分が名刺を見ている間にも、「いいバイクですね、触らせてもらってもいいですか？」と訊ねてきて、それに頷いて応えると片手を右ハンドル――即ち前輪ブレーキのかかる方へかけた。

無論、ただそうしているだけではなく普通のD―TRACKER Xとの細かな違い――ハンドルグリップはもちろん、シートの僅かな広さやノーマルよりもやや固めのサスペンションに気が付くところも、彼の底知れなさを増させた。

「おっと、すみません。とてもいいバイクだったので、つい夢中になってしまいました」

「いや、構わない。自分のバイクの良さに気付かれて悪い気になるライダーはいないからな」
　もっとも、フィーネの改良があったとはいえこのバイクの乗り心地はあまり良いものではなく、彼の恋人……いや、もはや本妻ともいえるＺＺＲ１４００ＳＳＣのような車体重心と姿勢補助が無いのは少し痛いところだが、それでもやはり『フィーネがくれたバイク』ということが、このＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ　ＳＳＣを美化しているのだろう。
「先日のノイズとの一戦以来、連絡が取れなくなっていたようでしたので、出来れば二課本部にて事情を伺わせて頂けると、こちらとしては助かるのですが……」
（ようは事情聴取か。当然のことだが……フィーネのことについては黙っておくとしても、どこまで話したものか……。あと、『櫻井了子』ともそれらしい対応を……意外とやることが多いな）
　しかし、ここで首を横に振るという選択肢は最初から用意されていなかった。不用意に同行を拒否すれば、それだけで自分の行動の後ろめたい部分をつかれる理由になる。
　結果、古唄は先にＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ　ＳＳＣをガレージに納車してからなら、という条件でそれに頷いた。

◆

　緒川に連行され、特異災害対策機動部二課へと戻った古唄は、Ｄ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ　ＳＳＣを納車しようと訪れた二課専用ガレージで愛妻・ＺＺＲ１４００ＳＳＣと再会。
　Ｄ―ＴＲＡＣＥＲ　Ｘ　ＳＳＣをチェーンとディスクロックで防犯すると、すぐさまＺＺＲ１４００ＳＳＣの横に正座し、「状況が状況だったとはいえお前以外のバイクに跨った。すまない」と美しい土下座を決めた。
　すると、彼の誠意に返事を返すかのようにＺＺＲ１４００ＳＳＣのエンジンが掛かり、そのマルチディスプレイにシンプルな文字列が映

し出された。
『No problem.
rather than you did a right judge』
『Forced to leave your side at least temporarily』
『Of course,
I can't take sb to task for your dec
そこに綴られたZZR1400SSCの想い――本来はただのバイクでありながら、古唄専用サポートウェポンとして生まれ変わる際に自律思考AIを搭載したZZR1400SSCだから伝えることのできる彼への気持ち。
ZZR1400SSCは、AIが搭載される前から古唄がいかに自分を大切に扱ってくれているかを知っている。だからこそ、ZZR1400SSCは彼を責めたりはしない。
彼が自分以外のバイクに跨るということは、それを強いられるだけの事情があったのだと受け止めることができる懐を持っているし、それ以上に彼が自分を裏切るような行為はしないと信じているからだ。
「……ありがとう、ZZR」
『Don't mention it』
古唄が愛おしそうにアッパーカウルを撫でると、ZZR1400SSCも嬉しそうにライトを点滅させた。もうこいつ生き物じゃないのか、と思った古唄が、ふとあることを思いつく。
今まではZZR1400を恋人と思いつつも『バイク』であると認識し、一線を保ち続けてきた。しかし、今やZZR1400はZZR1400SSCとして生まれ変わり、己の想いを伝える手段を得た――言わば心を持つひとつの命、家族に等しい。
そんなZZR1400SSCを、いつまでも堅苦しい車種名で呼ぶのは忍びない。今までよりもいっそうの愛情と親しみを込めるためには、愛称のひとつくらい付けてもいいのではないか。
「なぁ、ZZR。お前に名前をつけてもいいか？　お前がただのZZRの改造車じゃなく、俺の……俺だけのものだっていう、証を」

『there is no reason to decline. rather please!!』

（……こいつ、お澄まし系かと思ったら意外と素直なんだな）

ギャップにびっくり――かと思いきや、既にZZR1400SSCにベタ惚れの古唄は「まぁ、ZZRの魅力が増えたと思えばなんの問題もないか」と全てをいい方向にだけ捉えていた。

「なら……そうだな、ドナシュラークなんてどうだ？　夜のハイウェイを彩るお前のテイルランプはまさしく赤い稲妻と呼ぶにふさわしいと思うんだが」

『Donnerschlag……。Am I Donnerschlag……？』

「そうだ。お前は今からドナシュラーク。ただのZZRの改造車なんかじゃなく、他の誰でもない俺だけのドナシュラークだ」

俺だけの、という言葉に反応してか、今度は照れたようにテイルランプを赤く点滅させるドナシュラーク。

「じゃあ、ドナシュラーク。事情聴取が終わったら、ツーリングに出よう。それまで、待っていてくれるな……？」

『Of course』

そうして、ドナシュラークと別れた古唄は緒川と共に二課本部に向かい、いつの間にか出勤していた『櫻井了子』と共に取調室に入ると、一部の情報を盛大かつ緻密に隠しながら事情聴取に応じた。

そして内心では、（ああ、今までもこうやって色んな面倒をもみ消してきたのか……）と了子（＝フィーネ）に対する苦笑まじりの声を洩らしていた。

◆

ひとまずの事情聴取を終えた古唄は、ドナシュラークとの約束通りツーリング――というわけにはいかなかった。

特異災害対策機動部二課所属の装者でなく、ほんの数日間の出来事であったとはいえ、特異災害・ノイズとの融合症例が二課の把握しえ

ない場所で単独行動をしたというのは、組織的に好ましいとは言い難い。
結果として、彼はこの日に限り二課の目の届くところにいろ、という極めて軽い軟禁状態を強いられてしまった。このことをドナシュラークに伝えると、こればっかりは少し怒られた。
無論、それでも古唄がこの措置に不満を唱えることはなかった。確かに彼は特異災害対策機動部二課所属ではなく、あくまで弦十郎の友人として手伝いをしているに過ぎないが、だとしてもその弦十郎（ゆうじん）に心配をかけたというのは事実だからだ。
そのため、彼はこの措置を『二課から民間協力者の軽い自粛命令』ではなく、『弦十郎に心配をかけた自分へのおしおき』として甘んじて受けていたのである。――と心の中では納得しているが、響と未来の身に何かあれば飛び出す気は満々だったりもする。
だが気付いてみれば、そんな心配すらも杞憂であったことを痛感させられて古唄は心底ほっとした。夕方、授業を終えた響――と、まさかの未来までもが、（弦十郎の許可を得て）二課本部の古唄の元を尋ねてきたのである。
「古唄さーんっ！」
「こんにちは、古唄さん」
「……」
フィーネの時もそうだったので、もう「何故ここに」という言葉を出すのはやめにした。ただ、弦十郎に対して「これ本当にいいのか公務員」とツッコミを入れるだけに留めた彼の精神力は目を瞠るものがあった。
いや、二度目だからこそ、という意味もあるのだろう。自販機前のリラックススペースでにっこりと笑いながら片やぶんぶんと元気に、片やふりふりと慎まやかに手を振る二人に向けて、小さく手を振り返した。
（あっ、古唄さん手振ってる！　ちっちゃく振ってる！　かわいぃ～！）
（古唄さんって体はおっきいのに小動物みたいだなぁ……）

そんな古唄の仕草に、響と未来の心がくすぐられた。
かわいいと呼ぶには武骨すぎる顔と体をしているし、無愛想で口も決していい方ではないのだが、彼の好意に対する真摯さと素直さは、実のところあのフィーネすら悪くなく思っているほどだ。
いや、好意という意味ではフィーネが特別な存在であることも原因なのかもしれない。彼はまだ恋心というものをはっきりとは理解できていないが、もしも抱くのならそれをフィーネに向けたいと本人に向けて明言しているだけに、彼女への好意は露骨にして直球。
彼女がいかに『あのお方』という存在に一途であろうとも――いや、一途であるからこそ、古唄の自分に対する一途さもまた理解できるのだろう。最近やたら丸い性格に変化しつつあるのも、それが原因でないとは言い切れない。
とにかく、彼の言動というものは素直で素朴、それでいて体がでかいものだからギャップというのもあるかもしれない。
響と未来はそんな彼の――言ってしまえばボールにじゃれつくライオンみたいな可愛さに見事ノックアウトさせられてしまった。
まぁボールならまだしも、実際にライオンが小動物にじゃれるとたいがいうっかり殺してしまうのだが。
「お仕事なのに、押しかけちゃってすみません」
「いや、俺は二課のクルーじゃないからな。事情聴取を受けただけだ、非常時でない限りは暇さ」
仮にも軽度の自粛命令を出されているのだから暇ではないのだが、響と未来にそんな気を遣わせるようなことを言える古唄ではなく、ただ無表情ながらに優しく返事を返した。
もしも彼がもう少しコミュ力があって天然タラシ的なスキルでもあればナデナデのひとつくらいあったかもしれないが、そんなことが出来るのなら大学時代の友人は弦十郎だけではなかったはずだ。
「さっき、弦十郎さんから色々と教えてもらいました。古唄さん、体の調子がよくないって聞いたんですけど、大丈夫ですか？」
「体の……？　ああ、アレか……。あんなものはとっくに治っているのに、未来といい弦十郎といい心配性な奴が多いな……」

苦笑いする古唄だが、響も未来も「笑いごとじゃない」と頬を膨らませる。体の調子が、というのは、おそらく翼との共闘で全身が爛れてしまったことを指しているのだろう。

ノイズギアの特性のひとつ――ノイズ因子を用いた再生を駆使してその怪我は完治させた古唄だが、ノイズギアの機能や特性は未だ未知数のところが多い。

が、もちろんそこまで詳しい事情を知らない彼女たちは、単純に『古唄が大怪我を負って、凄まじいスピードで完治した』という中途半端な情報だけを聞いているため、不安が多いのだろう。

「心配するに決まってるじゃないですか！　古唄さんって、ただでさえたくさん無茶しそうだし……それに、危険なことがあっても躊躇ってくれそうにないし！」

『響、それブーメラン』

もっとも、響だけはそれを怒れる立場ではない。

ある意味全滅している二課―じょうしきとは―

特異災害対策機動部二課本部、櫻井了子の専用ラボラトリにて、了子――いや、フィーネは古唄の影響力について思案していた。

古唄のポジションというものは、二課とフィーネの間にとって非常にあやふやだ。何せ、彼は自分の感情というものが希薄なくせに、僅かにでも心を揺さぶる感情を持てばそれに従ってしまうのだから。

一見して寡黙で厳格。百聞すれば知的でクール。その実態は幼稚で感情的。気に入らないことがあれば絶対にそれを認めない。力があるくせにそれを振るおうとしない。挙句それを振るえば『あの』風鳴弦十郎に匹敵する。

吹けば飛ぶほど脆い天秤に、アンバランスな重さを加えながら均衡を保ち続ける矛盾の体現者――それが大地古唄に対するフィーネの評価であった。

（理解に苦しむ……。なぜこの私があんな男にいちいち計画を邪魔立てされている……？　なぜうまくかわせない。なぜ言いくるめられない。いったい他の者たちと大地古唄の何が違うというのだ……）

なぜ、などと自問しても、既に答えはわかっている。いや、だからこそだろうか。『わかりきっている答えを理解するのが怖い』――そんな思いが、フィーネの胸の内に渦を巻いていた。

大地古唄をかわせるはずなどないのだ。彼は真っ直ぐだから。どこまでも真っ直ぐで、純粋で、力強いから。だから思わず正面から受け止めてしまう。彼だけではなく、彼と話している相手は自然と素直になってしまう。

大地古唄を言いくるめることは容易いはずだ。ただ、彼の言葉や態度がそれをさせてくれないだけ。彼と対峙した者は、どこまでも純粋な彼を嘘で歪ませることに、自然と抵抗が生まれてしまう。

そう――彼はよくも悪くも『まっさら』なのだ。

悪いことを知っていながら、することや、考えることができない。いいことをすることや考えることはできるのに、それを知らない。

極端すぎるような純粋さと素直さ。無知とも無恥とも言い換えら

れる彼の『何も無さ』は、もはや異常なほどに正常のまま機能していて、誰もがその制御装置に触れたがらない。
そう、彼を騙すことや、彼の言葉を遮り、かわすことへの抵抗力の根源にあるものは――その人物の善良さに比例する『罪悪感』なのだった。
（確かに奴の存在は私の計画を狂わせた。しかし、それは決して悪い意味ではない。月そのものの破壊を目論まずとも、月の遺跡に設けられたカストディアンの呪いだけを討ち祓う術を、あの男は示してくれた……）
しかし、とフィーネは不機嫌に表情を歪める。
（なぜ、そんな回りくどい方法に私は賛同した？　確かに月の破壊と遺跡の呪いだけを解呪する法はどちらも確実性はほぼ等しく、後者は現存する人類への被害も少ない。普通に考えれば後者が理想的であることは間違いない）
だが、フィーネ自身にとって現存する人類の安否など問題ではなかったはずだ。ただもう一度カストディアンとの対話を果たせるのなら、幾多の犠牲も些細な問題。
故に見るべきは月遺跡の呪いをどれだけ確実に解呪するか、という一点であった。しかし、今のフィーネはその一点だけではなく――もっと広い視野を持つようになった。
それが何故かは――いまさら問う必要があるだろうか。
（クリス、か……）
そう、彼女が案じていたのはクリス。かつて「駒」と称しながらも、いつも心のどこかに、いつも思考の片隅にいた少女。
古唄との対話の中で、自分の中に存在するクリスと改めて向き合ったフィーネは、いつも少し離れたところから自分について歩く彼女のことを、まるで娘のように愛していることに気付いていた。
（……たまには外食に連れて行ってやってもいいか……）
というか、軽く溺愛していた。

◆

「そういえば、古唄さんっていつからバイク乗ってるんですか？」
不意にそんなことを尋ねたのは、響と手を繋ぎながら古唄のバイクメンテの様子を見ていた未来だった。
まだ溶けきっていないレモン味ののど飴を口の中に入れたまま、というのは少し行儀が悪かったが、口元を隠しながらだったのでセーフということにしよう。
「……ドナシュラークに乗り始めたのは大型免許をとった直後だから、今年で１０年目だな。もっとも、その前から普通二輪の免許は持っていたからライダー歴は１３年目だが」
メンテナンスとはいっても、長年取り替えていなかったせいで見事に曲がってしまっていたセンタースタンドの取り換えとチェーンの注油だけではあるが、それでもバイクをよく知らない者からすればちんぷんかんぷんだろう。
男子であれば、興味本位でちょろっと覗くくらいすれば何をしているかはわかるのだろうが、生憎と響も未来も女子で、外見や乗り心地くらいなら興味があっても、さすがにメンテナンスまでは……という様子だ。
二人に背を向けたままだった古唄が、ようやくメンテナンスを終えて彼女たちの方へと体を向け直したと思うと、今度は彼女たちのすぐ横に置かれたサイドカーをドナシュラークの左側まで持っていき、取り付け始めた。
「あれ？　そのサイドカーってあっちの細いバイクのじゃないんですか？」
「いや、フィーネはあくまでドナシュラーク用にこれを作ってくれたはずだぞ。おかげでＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘ　ＳＳＣじゃ体勢ががグラグラになるしスピードがガタ落ちだ。今後あっちにサイドカーをつけることはないだろうな」
なお、サイドカー付きのバイクは二輪車ではなく自動車扱いだが、古唄はトランク代わりにサイドカーを使うこともあるため、ペーパーながら自動車免許もしっかりとっている。

もっと言えば、サイドカーの申請書には「3人乗り」で申請しているので響と未来を乗せるくらいなら公的にもまったく問題はない。
もっとも、古唄自身はあくまで「もしも」のために申請しただけで、実際にそれが役に立つとはまったく思っていなかったのだが。
（……サイドカーの取り付け完了。本当はチェーンの調子を見たりサイドカーの接続部に緩みがないか確認するために少し走りたいところだが……さすがにそれは弦十郎から許可をもらってからでないとな）
ひとまず作業を終えたらしい古唄が工具の片付けを始めると、響と未来が彼に近づき、それを手伝い始めた。
元々そんなに散らかしてはいなかったし、作業自体も上記の通り単純なものばかりだったが、彼の太い指では取りづらい細かい部品を彼女たちが取ってくれたおかげで、片付けは早く終わった。
こういう作業において片付けというのは中々に厄介なもので、メンテナンスが好きでも片付けが面倒という人間は多い。古唄もその一人であり、特に小さな部品の片付けは相当なストレスが溜まるのだ。
（……こんな片付けでも、誰かが協力してくれるというのは、本当にいいものだな……）
片付けを終え、作業用グローブを外した古唄がガレージの隅にある簡易トイレで手を洗ってから普段のライダーグローブを嵌めると、響が興味深そうに彼の手――正確にはそのライダーグローブを見ていた。
彼のライダーグローブは耐水性・防寒性に優れたウィンターグローブ（プロテクションタイプ）で、外見の割に操作性が高く、外部からの衝撃に強い。もちろんそれだけに高価ではあるのだが、一般的に市販されているものでは彼の手に合うサイズがなかったため特注になってしまい、さらに高くついてしまった。
「……気になるのか？」
「えっ!?　あ、いえ……うー……ち、ちょっとだけ……」
人差し指と親指の間に一円玉程度のスペースを開け、申し訳なさげな視線を向ける響。

もちろんそんな視線を向けられてスルーできる古唄ではなく、心の内で（どうしよう。俺の娘かわいい）とか思いながらほぼ無意識に左手のグローブを外しつつ、それを響に渡していた。
「……勝手に持っていかないなら、好きにするといい」
「ホントですかッ!?　ありがとうございます古唄さん！　うひゃーっ、でっかーいっ！　かっこいいーっ！」
（……ああいうゴツゴツしたのは女子にはウケないと思ったんだが……なるほど、響はああいうのが好きなのか）
むしろ女子にウケるか否かを案じる古唄の方が意外にも思えるのだが、彼も少し前までは人間の男だったのである。
女性に対しても年齢相応の興味はあったし、そのための努力も少なからずしたことがある。もっとも、女性〈バイクなのは今も昔も変わっていないが。
「……」
「……未来はヘルメットが気になるのか？」
「ひゃっ!?　……す、すみません！」
そして、グローブに興味を持った響とは逆に、未来はドナシュラークのシートに乗った真っ黒なシステムヘルメットをじっと見つめていた。
どうやら、システムヘルメット特有のフリップ機能が気になっているらしく、古唄がヘルメットを手にとってフリップを上下させて見せた後、それを渡してみると、新しい玩具を買ってもらった子供のような目でフリップを上げ下げし始めた。
（……どうやらバイクそのものはともかく、バイクグッズ自体は年頃の女子にもウケがいいらしい。……今度、響と未来のヘルメットを買いに行くのもアリか。せっかくサイドカーをつけたわけだし）
親しい人間が極めて少ない古唄の中では、どうやら『響と未来の好み≒最近の女子のトレンド』と変換されているらしく、古唄の一般女子たちに対するイメージが物凄い勢いで変化を初めている。
元より周囲に対する関心も、あくまで「古唄なりに異性への興味があった」程度であまり強くなかったせいか、それがおかしいとも思っ

ていないからタチが悪い。
（響はフルフェイスがいいだろうな。後部シートに乗りたがりそうだからな。未来は……やはりシステムがいいんだろうか。サイドカーはタンデムより安全だから少し安めのものにしたいんだが、システムは高いしな……）
「これ、かっこいいなぁ……」
（システムで決定だな）
ちょろすぎる。

◆

古唄が響・未来の二人の世話を焼いている頃、翼は二課備え付けの会議室にてデュランダル移送計画の詳細な流れについて二課クルーたちと話を進めていた。
本来ならばここに古唄も交えるべきだが、彼はあくまで二課に協力的なだけの民間人であり、デュランダルの機密性を考慮すると会議には参加させず、移送実行時に役割のみを伝えることになった。
無論、詳細を伝えない以上、彼を翼と同じように動かすことは出来ない。しかしそれこそが二課の狙い。
ノイズの襲撃が人為的なものであることは前々から二課内部でも囁かれていたことだが、最近になって急激にノイズ襲撃の頻度が治まっている。
これは相手側が特異災害対策機動部二課を敬遠して活動を抑え気味にしているのか、それとも活動期間を開けることで二課側を油断させる目的なのか。
どちらにしても今回の移送任務中は、その『何者か』が直接かかわってくることも視野に入れて行うことになっており、事情を懐まで知らない古唄はその『何者か』の注意を引き付けるためのデコイというわけだ。
非常に危険な役どころではあるが、これについては弦十郎も翼も特に異論はなく、本人にも単に「出来る限り派手に相手をしろ」程度の

説明で留めるつもりでいる。
　敵を欺くにはまず味方から、あるいは敵を欺くには本人（デコイ）から、ということだ。もっとも、翼の懸念は別の部分にあるのだが……。
「しかし司令、敵がノイズを率いている以上、なんらかの聖遺物を保有している可能性は大いにあり得ます。聖遺物を天敵とする大地には、少し厳しい条件ではないでしょうか」
「もちろん、俺たちもそれを考えなかったわけではない。確かに聖遺物保有者に対してノイズギア装者をぶつけるのは賢いとは思えない。しかし、聖遺物保有者に『大地古唄』をぶつけるとなれば話は別だと思わんか？」
「……なるほど」
　翼は、弦十郎の言わんとしていることを即座に理解した。
　あまりにも基本的で当たり前なことなので、ついつい忘れてしまっていたというか、むしろ気付かない方が人としてよかったかもしれない発想だが――それでも翼は理解して、あまつさえ納得までしてしまった。
　世の中には「レベルを上げて物理で殴ればいい」などという格言があるが、彼の言っていることはつまりそれに類するものだろう。なぜなら――、
「つまり、ノイズギアでダメなら生身で聖遺物保有者と殴り合えばいい、と。ふむ、盲点でした……」
「そういうことだ。そういう意味では、俺がやっても問題ない仕事ではあるのだが……俺は俺で別のポジションが確定しているからな。それに、万が一ノイズ戦になった時はあいつの方が対処しやすいだろう」
（……今さらかもしれないけれど、なぜ誰も聖遺物に生身の人間をぶつけることに異論を唱えないのかしら……）
　この会議、実は一番の常識人はその「敵」とスパイを兼ねている了子／フィーネなのかもしれない。

開戦―めざめろ、そのたましい―

翌日、デュランダル移送計画は実行に移された。

古唄の謹慎命令も今回だけは例外として解除され前線へと赴くことになっており、そう時間が掛かる作業でないとはいえ「昨日せっかく取り付けたサイドカーをまた取り外さなければならない」と愚痴っていた。

この時点で古唄は既に「フィーネが狙うとすればこの聖遺物か」とアタリをつけており、それを確証づけるかのように昨夜フィーネから「クリスの相手を頼むわね」と連絡が来たくらいなので、まず間違いないだろう。

響の扱いについては非常に難しかったが、一課と5時間に及ぶ長い長い交渉（という名目での精神攻撃）によってどうにか彼女の戦力加入は避けられた。

もっとも、そのために今日は授業を終え次第すぐに寮に戻って外出をさせないようにしなければならなかったが、古唄がそれを頼むとあっさり頷いてくれた。聞き分けのいい娘である。

もちろん任務終了後はすぐに連絡を寄こすように、くらいのことは頼まれたが、あんなにも潤んだ目で詰め寄らなくても響と未来の頼みを断る古唄（おやばか）ではない。

デュランダルの移送に用いられる車両は了子が個人的に所有する『Ｖｉｔｚ』だが、これだけ大掛かりな計画なら今さら隠密性など意味はないので、多少は露骨になってでももっと防衛能力のある護送車を選んだほうがいいのではないだろうか。

――というのは、やはり誰もが思うところなのだろう。現に古唄もそれを指摘したところ、金銭的な問題であるらしい。だとしても了子の懐を寒くさせることに多少の躊躇くらい持ってほしいところだが、状況が状況なので仕方がない、と了子自身が諦めていた。

もっとも、了子＝フィーネということを既に知っている古唄としては、新車のＤ―ＴＲＡＣＫＥＲ　Ｘを購入し、あまつさえ強化改造して他人にぽん、と渡せるくらいなので彼女が金銭的なことに困るとは

まるで思っていないのだが。
むしろ節約とか気にしていたら、そっちの方がずっと驚く。
なお、今回のデュランダル護送については翼・古唄の両者が二輪所有者であることから、了子の前後にバイクで張り付くことになった。
古唄のドナシュラークはパワー・安定性の高さから敵と接触しやすい前方を、逆に軽快でアクロバティックな運転を可能にする翼のＤＲ―Ｚ４００ＳＭは古唄が交戦に入り次第前方へ、という算段だ。
デュランダルを入れたケースは車の後部にあるトランクスペースに置かれているので守るなら後ろとも思えたが、常に前方へ移動を続ける物体の後部を狙うというのは存外に難しいため、その点は問題ないはずだ。
それに、ＤＲ―Ｚ４００ＳＭの小回りの利き具合と翼自身のライディングテクニックさえあれば、緊急時のみ後方へ移動することも十分可能なので、やはり問題にはならない。
（……フィーネから二課側の作戦はだいたい聞いたし、ひとまず俺の仕事は「役割以外は何も知らされないまま適当な場所でクリスとじゃれる」だけ……難しい仕事じゃない。が……少し不可解だな）
既にエンジンを始動して出撃の合図を待つ翼を横に、古唄はドナシュラークのギアをニュートラルにセットしつつ今回の自分の役割に違和感を感じていた。
違和感といっても、特別「どこに」という明確さがあるわけではない。ただ漠然とした「なんとなく気持ちがすっきりしない何か」を胸に抱えて、スターターをオンにする。
元より悪い予感だけはよく当たるのが古唄の謎特技でもあるため、彼がその違和感を探りながらスロットルを回してエンジンを噴かすと、大型にしては慎まやかなマフラー音がガレージに響いた。
（フィーネがソロモン以外の聖遺物を欲していたことは前々から知っていた。おそらくデュランダルは彼女の目的を果たすための条件を満たした聖遺物のひとつなのだろう。だから、それを求めること自体は何もおかしくはない）
今回の任務の鍵となるのは、やはり護送対象となるデュランダルだ

ろう。違和感があるとすれば、まずこれと絡むことに違いないとアタリをつけ、古唄は思考を深めていく。
（おそらく、この任務はフィーネの計画の核と大きく関わることになるはずだ……。一度これまでのことも含めて、フィーネの目論見を再確認してみる必要があるな……）
事実1――フィーネは『カストディアン』と呼ばれる者たちとの交流を求めている
事実2――そのためには月の遺跡に施された『呪い』なるシステムが邪魔となっている
事実3――ソロモンの杖はフィーネの計画そのものに直接的な関係があるわけではない
事実4――フィーネは既に立花響の利用と月そのものの破壊は目論んでいない
（これらから導き出される推測はこうだ）
仮想1――事実2に対する解決の1つとして、デュランダルが月遺跡のシステムを停止させる、あるいはそれに類する装置を作動させる力を持つ
仮想2――事実3より、ソロモンの杖……即ちノイズの制御という継続的な防衛能力が必要なほど大掛かりな仕掛けをフィーネは有している
仮想3――事実4より、大地古唄はもう間もなく、ソロモンの杖の力によりフィーネ操るノイズ人形となる
（……仮想3は、さすがに自虐的すぎるだろうか。いや、俺の内包するノイズ因子の総量と俺自身が持つ戦闘能力を考えれば、十分にあり得る。フィーネにとって、俺はそれだけの価値があるはずだ）
少しだけ自分を買い被るような調子で、しかし極めて第三者的な視点と思考を駆使しながら、古唄はただ自分を『フィーネの操るノイズ人形』として正しい展開を予測していた。
それは決して、彼が捻くれているからだとか、フィーネへの説得に対して悲観的になっているからではなく――純粋に、今の自分が『フィーネの中のカストディアンよりも優先順位が低い存在』だと理

解しているからだった。
（元々フィーネが響を欲していたのは、ネフシュタンの再生能力を自らに取り込むため、聖遺物と人体の融合症例――謂わば被検体がほしかったからだ）
そう、始めの頃フィーネが響を欲していたのは、彼女がネフシュタンの再生能力を『計画準備に必要な生命維持装置』として使うため、自分でない誰かを聖遺物と融合させ、どういう反応が出るかを知りたかったから。
しかし、それを快く頷くマゾヒストなど常人にはいないことがわかりきっていた。だから強硬策――立花響の拉致を一度は視野に入れた。しかし――その直前にもう一つの『被検体候補』が現れた。
ノイズを体内に取り込み、ノイズ因子を喰い続けることで不死身の肉体を得ることが可能な『ノイズギア』――大地古唄の出現だ。
彼は非常に理性的かつ聡明な知能を持ち、フィーネとしても戦闘の手間をかけず協力者とすることができるかもしれない希少な存在であった。
事実、彼は自力で櫻井了子＝フィーネという事実に行きつき、あまつさえ彼はフィーネに対して極めて敵対意識が少なく、むしろ好意的ですらあった。
そのためフィーネは彼を懐柔しようとして――失敗した。それはもう、盛大に。気付けばフィーネは、完全に古唄の放つ「無害オーラ」に呑みこまれ、一部では侵食すらされていた。
だから――フィーネは古唄よりもカストディアンとの交流を優先し、今回のデュランダル強奪を決行した。
まだカストディアンへの未練がある今でなければ、古唄のことをカストディアン以上に大切にしてしまうことが目に見えていたから。
彼女は、古唄に恋こそせざれど愛していたのだ。現在に生きる唯一にして無二の『理解者』として……。
（フィーネはきっとこの作戦で俺を使い、そして切り捨てようとする。だから、狙うとしたらそこだ。その瞬間、きっとあいつの心は……あいつの『本音（おもい）』は無防備になる）

人は本当に大切なものを乱暴に扱う時、罪悪感というナイフによって良心を切り裂かれる。そして、そのぱっくりと開いた傷口の向こうに、乱暴に扱わなければならなかっただけの理由がある。
だから古唄はフィーネの決断に従う。フィーネの恋心はまだ奪えずとも、彼女が自分を大切に扱ってくれていることくらいはわかっているし、信じているから――古唄はそれを躊躇わない。
（……勝負だフィーネ。お前のカストディアンへの想いと、俺のお前に対する想い。どっちが強く伝わるのか……それがきっと、今日わかるッ！）
ガレージに、出撃の号令が鳴り響いた。

「行くぞ、風鳴。今日は俺とお前で……」
「わかっているさ。ダブルライダー、だろう？」

◆

フィーネ――櫻井了子は不機嫌そうに舌打ちしていた。
今回のデュランダル移送任務は前々から予定されていたことで、彼女自身もこの任務には長らく目をつけていた。
それだけに――今回のまるで急拵えで穴だらけな自分の計画に苛立ちを覚えていた。
（なぜもっと早く、もっと綿密に計画を練ることができなかったのかしら……。これじゃまるで、現実逃避じゃない……）
なぜなら彼女は、今回の任務に今までよりも遥かに準備を欠いた策を当てようとしていたからだ。
今までなら決してありえなかった、欠点が明らかで万全とはまるで言えない作戦は、フィーネの目論見を大きく揺さぶる不安要素となっていたが――それでも、彼女は今回の計画を決行した。
この機を逃せば、次はもうありえない。今こそが、古唄の「無害オーラ」に抵抗できるギリギリのタイミングなのだから。
（勝負だ大地古唄……。お前の私への想いと、私のあのお方たちへの

想い……どちらが強く気高いものか。それが今日……）

不意に、フィーネ――了子の携帯のコール音が響いた。

『こっちは準備ができた。本当にいいんだな？』

「……ええ、全力でやりなさい。何せ今日は――」

『ああ、最初からクライマックスだ』

佳く澄んだ空の下―”あること”のはじまり―

作戦は日が明けると同時に開始された。

二課を出た移送班は出発からしばらくは古唄の先導する道を危うげなく進み続け、ひとまずハイウェイに上がって「このままならあるいは」と気楽な誰かが考えた頃――。

「ッ！　ノイズかッ!!」

古唄の背筋を伝う悪寒が、ノイズの襲撃を認めた。

『Ａｎｔｉ（アンチ）　ｎｏｉｚｅ（ノイズ）　Ｂａｒｒｉｅｒ（バリア），　Ａｃｔｉｖｅ（起動）』

ノイズの接近は明らかとなったが、相手は未だその姿を見せない。おそらく奇襲を目的としているのだろうと古唄が周囲に意識を巡らせると、前方十数メートルの位置、中央よりもやや左側の路面に大きな亀裂が入った。

おそらくデュランダルを乗せたＶｉｔｚではなく、彼女を囲むように配置された左側の護送車を狙ったものだろう。

古唄はドナシュラークのアクセルを開けてＶｉｔｚとの間に車両１つ半ほどのスペースを作ると、Ｖｉｔｚの左方に位置していた護送車に合図を出し、その亀裂を回避させた。

だが、やはりノイズも見逃すつもりはないのだろう。古唄らが亀裂の横を通り過ぎると、その亀裂が入った道路を砕いて現れたノイズが自らの身を射出してＶｉｔｚの右方に位置していた護送車を攻撃。

その中に乗っていた黒服たちは無事だったが、車が故障し置き去りをくらった。

『お出ましだな。私が相手を務めよう』

「そうだな……。任せた、風鳴」

Ｘ　エミュテウス　アメノハバキリ　トローン　Ｘ

起動聖詠を唄うと、Ｖｉｔｚの横を通り過ぎて古唄と並ぶ翼。天羽々斬の展開と同時に一部が変化したＤＲ―Ｚ４００ＳＭは、明らかにバイクの域を越えて兵器化している。

特に顕著なのは、ナックルガード部分が変形して鋭利かつ軽量の強化プラスチックブレードになっているところだろう。まさかとは思うがこんな短いブレードで斬りつける気か、と誰もが言いたくなるところだが、その通りだ。

ハンドルに対し水平ではなくやや後ろ向きに沿っているのは、耐久性の低さを補うためＤＲ―Ｚ４００ＳＭのスピードとブレードの鋭利さを活かすためだろう。確かに賢いが、同時にバカである。

さらにシンフォギアの放つフォニックゲインをノイズに対する毒素に変えてブレードに伝わせ、ノイズの表面硬度の低さを利用してズタズタにする、というのが翼の狙い。

（……明らかにリーチが短すぎるだろ。こいつまたバイクを廃車にする気か）

もっとも、当然ながらバイクを愛する古唄としては、そんな『理論上可能なら出来る』みたいなことを体現する翼の思考回路を理解することなどできず、ただ心の内でＤＲ―Ｚ４００ＳＭに黙祷を捧げる。

しかしそうしている間にも新手のノイズはやってくる。さっそく翼はギアを５速に入れてアクセルを開けた。その姿を後ろで見ながら走行する古唄は交戦位置から少し間を開けるため６速から４速まで落とす。

普段は古唄の性格が反映されて安定性・安全性を色濃く見せるＺＺＲ１４００（ドナシュラーク）だが、日本最速と名高いＧＳＸ１３００Ｒ（ハヤブサ）と同格のモンスターマシン。

悪路走行・車体軽量化を重視したスーパーモタードタイプのＤＲ―Ｚ４００ＳＭの『５速』とドナシュラークの『５速』では差がありすぎるのだ。

ただのＺＺＲ１４００ならまだしも、二課の手で改造されたドナシュラークとなれば、古唄ですらノイズギアを纏わないと扱いきれない４００ｋｍ／ｈオーバーの領域に入るのだから。

Ｘ　千ノ落涙　Ｘ

後半、ナックルガードだけでは飽き足らずフェンダーまで両刃式の強化セラミックブレードを展開し、原型を思い出すのに一苦労する外観となったＤＲ―Ｚ４００ＳＭでノイズを弱らせ、広域殲滅力に秀でた千ノ落涙で一気にカタをつけた翼がようやく道を開ける。
（別に殲滅しなくても、移送車を守るだけなら俺がドナシュラークでノイズたちを弾いてた方が早かったかもしれないな……）
無論、殲滅できるのならそれに越したことはないが、移送は出来る限り素早く終わらせたい。
かといって、ことを急ぎすぎて処理しきれなかったノイズに移送車を狙われてもいけないし、早さと確実さを天秤にかけるなら、殲滅を優先した翼の選択は間違いではないだろう。
『大地、追手の気配は？』
「今のところはあれっきりだ。この調子なら俺の出番は――」
ない、と言いかけた時だった。一筋の光鞭が護送車のトランクを貫き、その動きを制止させた。
「……来たな」

▽　ＮＩＲＶＡＮＡ　ＧＥＤＯＮ　▽

『避けろ大地！』
「いや……あれくらいならッ！」

頭上から古唄へと迫りくる黒いエネルギー球。それを確認した古唄はハンドルを離し、ドナシュラークに自律走行を命じてシートから飛び退き、エネルギー球を背中で受けた。
「ハッ！　デケぇだけの木偶の坊が。わざわざ照り焼きになってくれるたぁありがてぇ！」
「……キミがノイズたちを率いていた統領か。なぜこんな真似をするかは知らんが……悪いな、今日はゆっくりと喋ってやる暇がない。怪我をさせない自信はないぞ」
古唄の前に現れた敵は、水晶のように佳（よ）く澄んだ淡紫色の瞳と、や

や童顔気味な顔にそぐわないグラマラスな体型の少女――クリス。
フィーネから『一歩でも間違ったら命懸けの模擬戦闘（じゃれあい）』という明らかに日本語がおかしい命令を受け、古唄に「（手に凶器を持ちながら）パパ―、だっこしてー」と迫る、殺意と微笑ましさを兼ね備えたキュートガールである。
『大地！』
「風鳴はデュランダルの護送を優先しろ。この子は俺が任される」
『……すまない。頼んだぞ！』
翼の返事を聞く暇もなく、クリスの放った鞭が古唄の左腕を縛りつけ、再びＮＩＲＶＡＮＡ　ＧＥＤＯＮに直撃するが、彼も二度目は勘弁願いたいのか、その光球を殴りつけ霧散させる。
『……行ったか。どうするクリス、もう退くか？』
『いや、さすがに無傷ってのはリアリティなさすぎだろ。たまにはアタシの遊びに付き合えよ、オヤジッ！』
不敵な笑みを浮かべると同時、クリスは何を思ってかネフシュタンの鎧を脱ぎ、首から下げたペンダントに手を当てて――唄った。

Δ　キリター　イチイバル　トローン　Δ

クリスの唄に反応して現れたのは、赤をベースとしてところどころ黒い縁取りがある彼女本来の力――第二号聖遺物『イチイバル』だった。
いくらなんでもここまでするとは聞いていなかった古唄は、このクリスの行動がフィーネの命令ではなく単純に彼女が「古唄なら全力でやってもいい」と思ってじゃれつこうとしているのだろうと察し、諦めに似た覚悟を決めた。
（……ギアなしでイチイクリスと戦うのは苦しいな。ネフクリスはともかく）
が、それでも彼は子供のやりたいことくらいはやらせてあげられる大人の男。
確かにクリスと戦ってすぐ追いかけては、いくらなんでも早すぎる

だろうということもあり、彼はクリスに付き合うように構える。
「……10分だけだぞ」
「上等だ！」

◆

「……遅い」
その頃――デュランダルの受け入れを待つばかりの『記憶の遺跡』にて、その手に銃を携えた女性が溜息混じりに愚痴をこぼしていた。
彼女を囲うのは累々の死屍。幸いにも致命傷になるような深手は誰ひとりとして負っていないが、間接の隙間に銃弾を滑り込ませて凄まじい激痛を与えることで気絶させている。
「あの女が下手を打つとは思えんが……奴が来て以来、あれは少し甘くなっているからな……。詰めも甘くなっていなければいいが……」
女は銃を右足のホルスターに戻すと、ロックのかかったスライド式のドアに凭れかかりながら腕を組み、ポケットの中からプラスチック製の小さな袋を取り出す。
「……のど飴にしては酸っぱすぎないか、コレ……」
袋を破って口に放り込んだのは、少し前に自分の住む屋敷に訪れ、何度か顔を合わせたこともある大男からもらったレモン味ののど飴。
喉の調子を整えるための『のど飴』にしては、少し刺激が強いような気がしなくもないそれは、口の中いっぱいに柑橘系特有のさわやかな香りを与え、彼女の思考をクリアにさせてくれた。
「……ん。やっと出番か……」
口の中ののど飴が全て溶けきった頃になって、ようやく胸ポケットに入っていた通信機のコール音が鳴り、女はその場を離れ――地上へと向かった。

切り札、そして疾風―ふたりの―

「何ッ!? 第二号聖遺物『イチイバル』のアウフヴァッヘン波形が確認されただと!?」

『はい! 現在は既にその反応を途絶しましたが、発生地点を辿る限りでは、恐らくは――』

「大地が殿を務めているあの少女のものか……。ただの聖遺物ならまだしも、シンフォギアは装者次第でそのポテンシャルを大きく変化させる……。相手次第では、完全聖遺物より危険だ、至急ノイズギア装者の安否を確認しろ!」

◆

光弾を遮る粉塵は晴れることなく少女を呑み込み、視界を失ったままの彼女は音を頼りにガトリングを放つ。

Δ BILLION MAIDEN Δ

しかし、それを防ぐようにめくり上げられた地面が蜂の巣になると、今度は腰のミサイルポットから大量のミサイルが放たれ、巨大な影へと迫る。

Δ MEGA DEATH PARTY Δ

(ビリオンが防がれることを見越してのメガデス……。となると、これをいなした次は……)

影――古唄の掌がそのミサイルの側面を優しく押すようにして流すと、今度は至近距離まで接近したクリスのガトリングが再び回転を始めた。

思わず振り下ろした剛腕によって両断されたガトリングは僅かなスパークを閃かせると次の瞬間には小規模の爆発を起こし、ゼロ距離射撃を狙うのはやはり無謀だと察した彼女は残ったもう片方のガトリングで牽制しながら後退。

無論これすらも古唄はコンクリートの防壁によって防ぎきり、ボロボロになったそれを蹴りつけることで、コンクリートの破片を攻撃手

段に転用する。
（やっぱゼロ距離ビリオンだったか。コンビネーションの組み方が巧くなってきたな。相手に合わせながら適宜一部を変化させてはいるが、誘導すべきベクトルはブレていない）
Δ　ＱＵＥＥＮ，ｓ　ＩＮＦＥＲＮＯ　Δ
粉塵が晴れると同時に、古唄の頭上から降り注いだのは六本の矢。これを片手を使った側転でかわした彼は、足が地につくよりも早くもう片方の手で１本の矢を掴み、体勢を戻すと同時にクリスへと投げつける。
どういうことなのか、ボウガンの形をとったイチイバルから射出した時よりも遥かに弾速が上がっていたが、クリスは冷静にこれをかわし、イチイバルの形状を二挺のマシンピストルに変えて連射攻撃に移行。
中距離戦が得意ではない古唄は慌てて間合いを詰め、クリスの持つそれをバック転を利用したキックで弾き、地面に足がつくと同時に再度接近、クリスの足を払う。
「あぶねっ!?」
（……今のを避けるか……）
が、その攻撃はクリスの空中バック転によって回避され、今度はもう一度――今度は巨大な二本のミサイルによる攻撃が彼へと向けられた。
「これならァッ！」
Δ　ＭＥＧＡ　ＤＥＡＴＨ　ＦＵＧＡ　Δ
――だが、それすらも古唄にかかれば問題ではない。
「ふんッ！」
「ンなぁッ!?」
彼は少し多めに息を吸い込んで腹の底に力を溜め、深く沈めた体勢のまま右足と腰を捻りながら真っ直ぐに拳を突き出すと、まるで大気が殴りつけられたように衝撃波が放たれ、全てのミサイルを撃墜。
連鎖的に巻き起こった爆風がクリスを後方へと吹き飛ばし、古唄はそんな彼女を追い詰めるように接近。震脚によって引き起こされた

揺れでクリスはバランスを崩し、尻餅をつくが、そこで終わることは許さず蹴りを放って牽制。
古唄がこれをかわす間に地面に向けて威力の低いミサイルを二発放ち、爆風で起き上がりつつ、その勢いを借りて急接近、至近距離からボウガンによる射撃を放った。
「か、ふ……ッ!?」
するとさすがに不意をつかれたのか、その矢は古唄の腹部に直撃。
ノイズギアを展開していたらと思うと背筋が凍る思いの彼だったが、クリスからしてみればシンフォギアという仮にも兵器に属するものからの攻撃をモロに受けておきながら、瀕死どころか目立つほどの怪我にすらならない彼の方が戦慄の対象となっていた。
(さすがに今のは少し痛いな……ニルヴァーナよりはずっとマシだが、さすがに何度もくらいたくはない……!)
「まだまだぁッ!」
Δ　ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ　Δ
ようやく目に見える程の隙が生まれた瞬間を、クリスは決して見逃さない。
古唄が痛みに表情を顰め、片目を閉じて視界を不確かにした一瞬の間にボウガンからガトリングに持ち変えると、即座にそれを発射、一気に古唄を攻め立てた。
―Ｃｏｍｐｌｅｔｅ―
―Ｓｔａｒｔ　ｕｐ―
『１０』
だが――古唄は少し大人げないレベルで負けず嫌いだった。
―Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ―
ガトリングによる連射によって追い詰められた古唄は、またも地面をめくり上げて最初の数秒を耐えると、その間にノイズ因子を解放、

ノイズギアを纏ってアクセルフォームに変化。
クリスが繰り出す弾幕と粉塵に紛れて彼女の背後に回り込むと、すぐさまノイズ因子を抑え込んで人間態に戻り、クリスを羽交い絞めにして持ち上げた。ぷらーん、と為すがままのクリスが人形のようで愛らしい。
（……軽いな。栄養失調なんじゃないのか、こいつ）
一応、フィーネが不在でない限りはバランスのいい食事をきちんと与えられているはずだが、それでもやたらと軽い。
与えられた栄養は全て戦いで使いきっているのか、それとも全身ではなく一部にのみ栄養が偏ってしまっているのか。はたまたその両方か。
どうやらこれ以上の戦闘を行う気はないらしく、古唄がゆっくり彼女を降ろすと、ギアを解除して大人しくなった。
「……オヤジ、最後ノイズギア使っただろ」
「使わなきゃ痛いからな」
「じゃあ、勝負はアタシの勝ちだな！」
「……試合は俺の勝ちだけどな」

◆

「待っていたぞ、完全聖遺物『デュランダル』および二課所属の装者筆頭『風鳴翼』……ッ！」
「貴様がここのところ頻発していたノイズ襲撃事件の黒幕か……！
それに、その手に携えた聖遺物は……ッ！」
ひっくり返ったピンクの車両と、そこから這い出たはいいが気を失った様子の了子。既に車の中のデュランダルはトランクを飛び出し、翼の背後に転がっている。
「どうやら、この『ソロモンの杖』を知っているらしいな……。もっとも、あれだけ派手にノイズをバラ撒けばそれを可能にする聖遺物は限られる……。わからない方が阿呆というものだが」
「……お前の名は……？」

「知ってどうする。刺し違えてでもバックに構える奴らに情報を与えたいのか、それとも三途の渡り賃にでもする気か？」
翼と対峙するスーツの女は自らの手に携えた銀色の杖を一瞥すると、その視線を鋭く研ぎ澄ませて翼を睨んだ。
「今ここで投降すれば、少しは罪も軽くなるぞ……」
「従うと思うか？　これだけやっておいて、今さらそんな言葉に従うと、本気で思っているのか？　だとしたら……お笑い草だッ！」

Ψ　アルクィーネ　アッキヌフォート　トローン　Ψ

スーツの女が唄を口にすると同時に、彼女の首にぶら下がる赤色のクリスタルが桜色の光を放ち、スーツが弾け飛ぶ。
「起動聖詠、だと……ッ!?」
「ギアを有するのがお前たち二課所属の者だけと思い上がるなよ」
スーツの女――改め、アッキヌフォートの装者の態度とは裏腹に、ギアの外観はところどころ丸みを帯びており、攻撃的な外観とは言い難いが、アームドギアと思わしき桜色のボウガンはすぐにその形状をライフルに変え、彼女の戦意を証明する。
「射撃特化の装者か……。容易い相手ではなさそうだ……」

X　エミュテウス　アメノハ――ッ!?

仕方がない、と翼がギアを展開しようとすると、それを阻むように相手の女が持つライフルが放った一撃が翼の腹部を捉え、失敗に終わる。
「明確な戦闘意識と人間的な思考を持つ敵を前にして、不意を討たれることも想定せず唄うのか。甘いな。組織という篭に守られた鳥の唄が戦場で通用すると思うなよ」
「くっ……！　戦場で騎士道精神など求めようもないが、よもやここまで手段を選ばないとは……！」
「手段を選ぶ選ばないでどうこう言う時点で、お前は既に戦場向きの

器ではないということだ……」
　ギアを纏っていないにもかかわらず、ギアによる攻撃を受けて火傷ひとつ無いところを見るに、今の一撃は貫通力と炸裂力を極限まで下げた衝撃弾による牽制。
　しかしその牽制は、単純に翼のみに向けられたものではない。「これ以上やり合うつもりならば、今度は容赦なく所属装者を殺す」という、二課オペレーションクルーたちへ向けられたメッセージ。
　そして、素直にデュランダルを明け渡せ、という翼への命令でもあった。
「私の視界に入った以上、貴様に逃げ場はない。私の矢は――『当たる』」
「当たる……か。なるほど、ならばその矢、当たる前に斬り伏せるッ！」
　言うと同時、真横に立てられていたＤＲ―Ｚ４００ＳＭからエンジンキーを抜いた翼はそれをスーツの女に投擲し、それをかわしながら放たれた射撃をデュランダルの入ったケースで受け止めた。
　すると強烈な衝撃によってロック機能が破壊され、翼はその中にあった未覚醒状態のデュランダルを手にアッキヌフォートの装者と向き合い、相手の射撃を全て弾きながら今度こそ唄うことに成功する。

Ｘ　エミュテウス　アメノハバキリ　トローン　Ｘ

「チッ……。さすがにそう素直ではないか……」
　普段ならば天羽々斬が形成するアームドギアを構える翼ではあるが、彼女の手にはデュランダルが既に構えられており、これを手放すことは敵に奪われる可能性を無意味に増す行為に他ならない。
　二刀を扱う術を知らないわけではない――が、それが彼女の本領でない以上、目の前の強敵には通用しない。故に、彼女はアームドギアを形成することなく、デュランダルを己が剣として振るうことを強いられていた。

（見る限り、相手の得物は中・遠距離からの攻撃を目的とした狙撃銃。先程僅かに見せた軽弩（ボウガン）型のものも加え、素早く切り替えることで連射と精密射撃を交互に放ってくる可能性も高い。容易なことではないが、それでも懐に潜り込めればまだ勝機はある……！）

思考を纏めると同時に、翼が得意の高速機動を駆使してアッキヌフォートの装者に接近すると、驚くべきことに相手は右手のライフルではなく左手に持つソロモンの杖を上下逆にすることでショートソードのように持ち、重さ故に鈍重になりがちなデュランダルの攻撃をかわしながらカウンターの一撃を翼の脇腹に叩きこんだ。

「私の武器がライフルと杖だけと踏み、接近戦ならどうにかなるとでも思ったのか？　ナメられたものだ……。ソロモンに刃がついていたら今頃は真っ二つだぞ」

（……悔しいが、あの装者の言う通り早計すぎた……！　あのくらいの発想なら大地でも同じことをするだろう。何より、私はアームドギアとデュランダルの基礎スペックの差を考慮せず攻撃に踏み切った。デュランダルの大きさと重さが天羽々斬の高速機動と相性が悪すぎることなど、少し考えればわかることだというのに……！）

アッキヌフォートのみのポテンシャルではない。自分の身体的ステータスが相手に劣っているとも思えない。それでもこれほどの実力差を見せつけるのは、経験とテクニック。

相手の得物と体型を見るだけで相手のスタイルにアタリをつけ、相手の武器の先端部と視線で攻撃の軌道を読み、幾度かの攻防で最初の「アタリ」に修正を加える。

自分の得物を先んじて見せることで自分の「本来ではないスタイル」を刷り込み、相手に油断と慢心を作り、思いこみと真実の隙間に生まれた死角にて相手を翻弄する。

どれも生半可な経験だけでは得られない技術――常に戦場に在らなければ知ることのない『生きる術』が、彼女の戦い方から見て取れた。

（デュランダルの攻撃を受け止めなかったのはソロモンの杖自体が耐久性に優れる聖遺物ではないからか。いや、それだけではないな……

単に片腕では受け止めきれなかったから、というのも一因だろう。あの細腕では当然だが……）

（さすがにこちらの『戦り方』を教えすぎたか……。だが、それでいい。あちらがこちらの情報を得れば得るほど、私はその裏を衝きやすくなる。私の致命的な弱点は――今ここにはないのだから）

今度は翼の方が牽制に千ノ落涙を放ち、アッキヌフォートの装者に後退を強制する。しかし相手はこれを自分に当たるであろう短剣のみをライフルで撃ち落とすことで回避。

だが「それならばそれでいい」と言わんばかりに、そちらに意識を向けた一瞬の間に翼は再び相手に接近。ライフルを持つ右手が千ノ落涙を迎撃するため上を向いているため、相手の脇腹に一撃を叩きこもうとするが、ソロモンの杖がそれを遮る。

すると翼はそれさえも読んでいたと言うように、一気に姿勢を落として足を払い、前のめりに姿勢を崩した相手の腹部を蹴り上げた。

ここからさらなる追撃も試みるべきか悩んだが、翼の防人としての本能はそれを「最良」とはしなかった。

そして――その本能はおそらく間違いではなかったのだろう。起き上がると同時に翼に向かって突進を始めた彼女は、何を想ったかソロモンの杖の柄となる部分を銃身の下部に取り付け、銃剣のようにしながら刺突攻撃を狙ってきた。

Ψ　ＢＵＬＬＥＴ　ＳＰＥＡＲ　／　ＰＩＥＲＣＩＮＧ　Ψ

（刺突――!?　いくら助走があれどもこれだけの間合いがあれば軌道は容易く読み取れる……！　奴ほどの戦姫がそれを解せぬわけがあるまい！　ならば真の狙いは――）

瞬間――脳裏に浮かんだ『かつての親友の最期』が、翼の本能をフル稼働し無意識レベルでの高速機動によって相手の攻撃を大きく回避。

すると、さっきまで自分がいた場所にはソロモンの杖から放たれたノイズが立っており、アッキヌフォートの装者は仕留め損なったと知

るや否やそのノイズを再格納した。
（ゼロ距離からのノイズ放出……！　唄を口にしていない今、ギアのバリアコーティング機能は不十分！　もしもあの距離でノイズの炭素変換を受けていれば、いくらギアを纏っていても無事では……ッ！）
古唄がいない今ならば、唄を口にすることはなんら躊躇われるものではない。
しかし、装者にとっての唄は謂わば『戦意』の表れ――人と争うためではなく、人を防るための『防人』が、その戦意（つるぎ）を人に向けることは許されるのか。
そんな思いが、翼に『唄』を禁じさせていた。
「どうした。唄わないのか？　ならば、こちらから行かせてもらうぞ……！」
狩人の唄が――佳く澄んだ空の下に響き渡る。

受け継がれる想い―アクセス―

シンフォギアの『出力』とは、厳密さを欠いた定義において『身体ステータスの向上性』『アームドギア生成の効率性』『バリアコーティングの持続性』がそれであり、もう少し言えば『それらを可能にするフォニックゲインの効率的かつ持続的な放出』である。

装者たちはこれらを底上げするため、ギアが放つ特定の音に合わせた唄声を放ち、それを力とするのである。故に、装者たちの唄は――即ち『力』なのだ。

Ψ ――――― Ψ

（まずい。ここまでの流れを顧みるに、彼女は中・遠距離特化ではなく、全域に対応できるオールラウンダー。中距離からの近接特化である私には相性が悪すぎる！）

遠距離からの攻撃を仕掛けてこないのはどういう理屈か不明だが、少なくともアームドギアがあの形態を取る以上不可能なことではないはずだ。

クロスレンジにてぶつかるだけならば対抗は可能。しかし常に接近状態でいることは不明だと先程の攻防が示してみせた。

（『唄』が、くる――ッ!!）

Ψ　未来に響け、古の唄！　Ψ
Ψ　小さな日向　咲き立ってる花　Ψ
Ψ　雪の音も　聞き逃さない　さぁ走ろうか！　Ψ
Ψ　まっすぐに　Ｆ　ｉ　ｎ　ｅ　へ　Ψ

ソロモンの杖をライフルから取り外して左手に構えると、ライフルをハンドガンに形態変化させ、アッキヌフォートの装者は翼の得意領域である懐まで駆け出した。

間違いなく何かを仕掛けるつもりだろうと察した翼は、アッキヌフォートの装者に向けて十八番である千ノ落涙を放って牽制。

しかし彼女はそれを気にも留めることなくクロスレンジに入り込

み、至近距離からの射撃を放つ。
「この程度……ッ！」
が、翼はこれをデュランダルで弾き、振り下ろした切っ先を僅かに持ち上げ突きを放つ。
相手もこれには不意を衝かれたらしく右肩を掠めたが、そのまま左の杖で横薙ぎに翼の腹部を打ちつけ、彼女の脇を抜けた先で体を半旋回、右のハンドガンが翼を捉えたかに思えた。
しかし旋回の直前、ソロモンの杖による打撃を覚悟していた翼は彼女の一撃よりも僅かに先んじて同じく体を半旋回、デュランダルの石突が胸を穿ち、続く唄を奏でようとしていた相手は咳きこんだ。
「……ッ!?　げほっ、ごほっ！　く、ぅ……ッ！」
「せぁッ！」
倒れこみそうになった瞬間を逃さず追撃の一太刀を入れようとする翼だったが、アッキヌフォートの装者とて幾つもの戦場をくぐり抜けた兵。
闘争の中でこそ発揮される生存本能が彼女に未来予知染みた直感を与え、すぐさま後退、飛び抜く間にもハンドガンによる速射にて翼の追いの手を留め、息を整えるための短い時間を稼いだ。

Ψ　アクセル　ベタ踏――げほっ、……ま先　立ってる！　Ψ
Ψ　ミラーに映ってる　ノロマなら……ごほっごほっ！　はぁ……　Ψ
Ψ　半クラ→ギア上げ　Ｈｉｇｈ→テン　ドライブ！　Ψ
Ψ　今すぐ　ブッ飛べ　最速へ！（Ｒａｃｉｎｇ　Ｆｉｇｈｔ!!）Ψ

杖を腰のブースターに引っかけて両手を開け、今度はハンドガンをナックル型ボウガンに形態変化させ左手首に固定。三本のホーミングアローが執拗に翼を追うも、デュランダルの一振りによって悉く防がれる。
だがそれは罠。炸裂した矢が放った煙幕によって視界を遮られた

翼は左手をデュランダルの剣身に添えて防御姿勢を取り、音と匂いを頼りに相手の攻撃を探る。
幸いにしてギアの放つ音楽は相手の居場所を探るに都合がよく、攻撃手段はわからずともどこから攻撃が加えられているかは察せられた。

Ψ　今ならば出せるはず　その答え　掴もうとするならば　Ψ
Ψ　スピード☆ワールドの奥まで　辿りゆけ！　最高の相棒（ベストフレンド）！
Ψ

相手もそれは理解しているらしく、唄を中断する素振りは見せられない。
（視界こそ遮られているが、相手はこちらが居場所を察していることを理解していながらその場を動こうともしていない……。いったい何が狙いで――まさかッ!?）
一陣の風が煙幕をさらい翼に光を取り戻させる、そこにあったものは悪夢。
「広域殲滅型多段ミサイルポッドだと……!?」
息を切らせながら上下３段の４発装填式ミサイルポッドを左右に１２列並べ、翼の表情に満足したのか不敵な笑みを浮かべて全てのミサイルを一斉に放った。
「撃墜（お）ちろ……ッ！」

Ψ　ＢＬＡＺＩＮＧ　ＭＥＴＥＯＲ　／　ＳＨＯＷ　ＤＯＷＮ
Ψ

逃げ場を奪うように一度は空に浮かび、そして全方位を覆い尽くす大火力ミサイルにより、翼は死すらも覚悟しながら――それでも『生きることを諦めず』その手のデュランダルを振るった。
だが悲しいかな、明らかに手数が足りない。そして、終決は今既に目の前まで迫っていた。

「――――ッ」
攻撃を放ったアッキヌフォートの装者すらも全ての視界を奪われるほどの殺戮的大爆発が巻き起こした爆風により、周囲の建築物全てが原型を留めないほどに爆発四散南無阿弥陀仏。
これを受けて生きていられるとすれば、それは侵食覚悟でネフシュタンの鎧を纏った者か、あるいは――と、思っていると、灰塵の中より小さく呻く声を聞いた。
「バカな……ッ!? メテオールを受けて生きているだとッ!?」
次瞬、膨大な灰塵が竜巻の如くアッキヌフォートの装者の横を通り抜け、この事態の元凶が姿を現した。
「司令――ッ!? いったいどうやって……!」
「衝撃なら発剄で掻き消した。よもやこんなところで彼女と再会うことになるとは思わなかったんでな、少々出張らせてもらうぞ」
「……彼女のことを、ご存知なのですか?」
無言のまま頷く大柄の男――風鳴弦十郎。
その弦十郎を前に、今度は相手の女が驚愕する。
「彼女は番外聖遺物『アッキヌフォート』唯一の適合者であり、響君という例外を除けば我々の知る限り最も高い聖遺物への適合率が見込まれる人物――『佳澄あるこ』君だ」
本人に代わって己の名を口にする弦十郎を睨みながら、アッキヌフォートの装者――佳澄あるこは再度その左腕のボウガンを構えた。
「まさか組織のアタマがのこのこ前線に出てくるとは……よほど人員不足なのか、あるいはそれほどにそこの装者が惜しいのか……。まぁいい、どちらにせよ私の仕事はデュランダルの回収のみ。そしてそれは既に完了された」
「何……ッ!?」
先の爆発により翼の手元を離れたデュランダルの在り処を探すべく、弦十郎の陰に回って後方を確認する翼だが、自分の手はもちろん、視界に入る限りどこにもデュランダルは見当たらない。
いや、何かがおかしい。デュランダルは確かに視界に入っていない。だがそれだけではなく、もっと根本的な――そうだ、あるべき場

所にあるべきものが無いという、純粋な『欠落』がどこかにあると、翼の直感が告げている。
この惨状を見れば『あるべきものが原型のまま残されている』などまずありえないことではあるが、しかしそれにしても原型どころか『元はそこにあったはずの存在感』すら失われることなど、あるわけが――

――あった。
（櫻井女史の姿が見当たらない？　この非常時にいったいどこへ……いや、待て。そんな、まさか……！）
「気付いたか。ウスノロが」
見当たらないデュランダル。見つからない櫻井了子。単純かつ短絡的な予測を、あるこの一言が肯定する。
「あの女は――いや、あの女こそが今回の黒幕であり、同時に私が守らなければならない『ひとつめの答え』……正しい名をフィーネ」
（フィーネ……。終わりを意味する名だと……？）
自分の役目を終えたあるこはその手のボウガンから地面へと放たれた矢を炸裂させ、またも煙幕にて姿を隠し、最後の言葉を残す。

―我々を止めたいのならフィーネを止めることだ―
―もっとも、あの女を止めることは容易なことではないぞ―
―仮にそれができるとすれば、世界でただ一人―
―あいつの『一番の理解者』だけだ……―

◆

永田町を少し離れた高台――目を凝らせばリディアンすらも視界に入れることのできる丘で、フィーネはデュランダルをガードレールに凭れ掛けさせて眼下の街並みを一望していた。
「……随分と早かったじゃないか。集合予定のポイントは、ここではなかったはずだがな」
ゆっくりと近づく足音に背を向けたまま、フィーネは諦めと感心が

入り混じったような声でそう言った。
　すると足音はフィーネの3歩後ろで止まり、彼女はようやくその相手の姿を見て――やはり、という表情を見せる。
　そこに居たのは、真っ黒なライダースーツを身に纏った黒ヘルメットの巨漢。大地古唄だった。
「後悔してるんじゃないのか」
「……バカなことを。これは予(かね)てより定められていた計画通り」
　フィーネは『櫻井了子』として身に着けていた髪留めを解くと、それを古唄に持たせて言葉を続ける。
「以前、お前が私に唱えた月遺跡の呪いのみを解く方法……あれも確かに確実ではあったが、やはり手間が掛かりすぎる。反して、こちらなら同じ確率で手早く事態を終えることが出来――お前ほどの『ノイズ』であれば、生き残ることも可能であろう」
「……俺は響や未来のいない世界なんて求めていない。クリスとあることという、フィーネの家族が笑っていられない世界も要らない。何より――フィーネが本当の意味で幸せになれない世界なんて、俺は絶対に認めない」
　無機質で無感動で無感情な瞳が、今はまるで激情するかのようにギラついている。
　これこそ、フィーネが古唄を欲した最大の要因――大地古唄の『影響を与えた相手の想いを継承し、無限に吸収し続ける力』……。
　それはカストディアンが月に遺したバラルの呪詛を打ち砕く鍵。『人の心と心を阻む壁を砕き、アクセスすることを可能にする力』――即ち相互理解の象徴であった。
「その感情……元は誰から受け継いだものだ？」
「……どういう意味だ」
　フィーネの得意げな視線に、古唄は真剣な眼差しで返事を待つ。
「私がお前と初めて出会った時、なぜ私がお前に興味を示したと思う？　ノイズ因子に適合できる者はお前だけではない。理性の崩壊と肉体の完全なノイズ化に目を塞げば誰でも可能であり、そうでなくともあの風鳴弦十郎ならば今のお前以上のポテンシャルを発揮してい

た。しかしそれでも私は『大地古唄』に注目したのだ。自惚れなく考えてみよ」
「……」
まぁ、わからんだろうな、と意地の悪い笑みで返すフィーネの目を見つめながら、彼は無言を貫く。
決して自分の長所がないと言いたいわけではないが、だとしてもフィーネの関心を引けるほどの何かとなれば、よほどのことでなければありえない。それが、彼の『思い当たる節』にはなかった。
「教えてやろう。あの時のお前は、これから出会う全てから与えられる『想い』を無制限に継承（アクセス）できるだけの『無尽蔵に空白的なメンタルキャパシティ』を持っていたのだ。そしてそれは今のお前を以て証明されている」
（継承（アクセス）……？　今の俺が、人の想いを無尽蔵に蓄えていることの証明……？　いったいどういう意味だ……？）
「まるで意味がわからない、という顔だな。つまりだ、人はみな自分で自分のすべきことややりたいことを見つけ、そのために行動を為すが、お前の場合はそれが無く、代わりに『誰か』から受け継いだ想いを自分の感情と思いこむことで行動を起こす。故に、その性質はバラルの呪詛の真逆――他人の感情を受け継ぐために他人と接触した時のお前の言葉は、一種の統一言語として相手の心に強い影響を与えるのだ」
そこまで言われて、古唄はようやく自分が『継承（アクセス）』した人物に気付いた。
一人目は立花響。ノイズギアを纏うようになって、半ば自暴自棄（ヤケクソ）になりながら戦禍に身を投じていた自分を、今の自分へと変えてくれた恩人。
古唄は彼女から『人として出来ることをやり抜く勇気』と、『泣いてる誰かのために全力になる優しさ』を受け継ぎ、その日から急激にノイズ因子の制御能力が向上した。
二人目は小日向未来。響とは違い、こちらはなんの力もない常人でありながらもノイズギアを纏って戦う古唄に怯えることなく応援を

くれた恩人。
古唄は彼女から『目の前の現実から逃げない強さ』を受け継ぎ、それまで暴走するばかりだったＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・Ｓの制御に成功した。
「……理解したか。それこそがお前の力。人の心に繋がり、統一言語という絆を作る『バラルの呪詛』攻略のための最大の鍵――継承（アクセス）なのだ！」
「……なるほど。だったら俺にも希望が見えてきた。お前の理想を守りながらお前の野望を砕く方法……それこそが、俺の――」
―アクセスッ！―

金色の三つ首竜―マザーギードゥラ―

黒紫色に光る瞳をギラつかせて、大地古唄はノイズギアを纏った。
本来ならば炎のように赤く煌めくはずの体表を真っ黒な煤(すす)で覆った鎧――塵鎧(じんがい)・ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ。
全身から溢れ出る紫色のオーラは、彼の精神力と左腕のウォッチベルトの二つを以てしても制御に手を焼くほどの膨大なノイズ因子を表している。
「な……なんだそのノイズ因子の量は！　古唄、お前……己が身に何をしたッ!?」
『あるこに頼んで、喰える限りのノイズを可能な限り喰わせてもらった……。ひとまずデュランダルが覚醒して、その直撃を受けても１回だけなら耐えきれる程度には』
ノイズギアと聖遺物の相性の悪さは今や二課関係者の誰もが知るところではあるが、攻撃性の高い完全聖遺物の直撃となると、おそらく一瞬の拮抗もなくほんの僅かな接触のみでノイズギアはその全身を炭化させるだろう。
そのため、古唄はフィーネの預かり知らぬ場所であるこの協力を仰ぎ、その身に内包しうる限りのノイズ因子を喰い尽くし、それを第二の鎧――ノイズオーラとして身に纏うことに成功した。
無論、ただでさえノイズギアは膨大かつ高密度のノイズ因子を内包し、それ故に２分４０秒という活動制限が存在しているが、彼はそれをあること共にソロモンの杖の一部を改造した第二の制御装置『コントロールバイザー』によってそれを克服。
基本的に完全聖遺物とは、その形と機能を損なうと『完全』聖遺物ではなく単なる聖遺物として扱われる。
古唄のコントロールバイザーを作る際、コピーした機能を正常に作動させるために一部を削り取ったソロモンの杖が今後『完全聖遺物』として扱われるのかどうか非常に怪しいところだが、少なくとも原型は留めている。
かつて完全聖遺物の定義について語った時、「正直、覚醒状態のデュ

ランダルが完全聖遺物としての本来の姿であるとするのなら、おそらく未覚醒状態のデュランダルの方がよっぽど原型を留めていない」とフィーネは言っていたくらいなのだから。
（さすがに大型ノイズ1兆匹分のノイズ因子……。コントロールバイザーとウォッチベルトのサポートがあっても辛いな……）
閑話休題（まあそれはともかくとして）、デュランダルの直撃を一度まで耐えられる体となった古唄は、ある程度ならば自らを省みることなくフィーネの気持ちを、怒りや虚しさを受け止められるようになった。
先の戦闘で装者2人分のフォニックゲインを注がれたデュランダルは既に覚醒も目前。古唄に居場所をリークされ、こちらに近づいているクリスとあるこの二人がここに到着すれば、おそらく唄のひとつ程度で完全に覚醒するだろう。
しかし、古唄は彼女がなんのためにデュランダルを欲しているのか、かつてはわからなかった彼女の目的が、今では全てわかっていた。だからこそ、古唄は彼女がそれを果たす前にここに現れたのだ。
『フィーネ……俺はお前にどうしても伝えなきゃいけないことがある。そのためには、ソロモンの杖に操られるわけにはいかない』
（なるほど……ソロモンの制御を離れるため、己のノイズ因子を別の方法で制御すべくノイズギアを纏ったというわけか……。強引ではあるが、頭の悪いやり方ではない）
ソロモンの杖によるＺＥＲＯ（ノイズ）―ＭＥＧＡ（ギア）の制御……それはフィーネと対峙する上で、古唄が真っ先にどうにかしなければならない問題のひとつだった。
しかしその問題は、デュランダルの一撃を耐え凌ぐために『コントロールバイザー』という新たな制御装置を用いたことで、彼にとって面倒を極める『ソロモンの杖』『デュランダル』の問題が同時に解決された。
そういう二点を含めて、フィーネは彼の選択を「強引ながら悪くない」と評したのだろう。
『お願いだフィーネ……月の破壊なんて考えなおしてくれ。月遺跡に施されたバラルの呪詛のみを解く方法を一緒に考えよう。お前だっ

て、一度はそのやり方に賛同してくれたじゃないか』
「確かに……お前の言う通り、かつて私が発掘した二課も預かり知らぬ聖遺物『神獣鏡（シェンショウジン）』と、自立型完全聖遺物『ネフィリム』の力を使い『フロンティア』を浮上させ、ノイズ因子を何らかの方法でフォニックゲインにコンバートできるのならバラルの呪詛のみを解呪することは可能だ」
『もちろん条件の多い仮説だというのは理解している……。しかし、神獣鏡（シェンショウジン）を所得し、ネフィリムを管理しているF．I．Sもまたお前の力の及ぶところ。フロンティアの在り処も、きっと既に知っているはずだ』
　仮にこれらをクリアしたところで、最大の問題となるノイズ因子をフォニックゲインへとコンバートする手段は未だ見つかっていない。
　しかし、彼女がカストディアンの残した『月』という装置そのものを残し、機能だけを失わせることが出来れば、カストディアンの残滓を夜空に残し、統一言語を取り戻すこともできるはずだ。
『お前はおそらく、長年に亘りカストディアンの背を追うあまり、根源的な問題を見失っている』
　古唄の言葉に、フィーネは意外にも特に声を荒げることもなく耳を傾けた。
『確かにバラルの呪詛を解けば、人類は統一言語を取り戻すかもしれない。月の破壊がもたらす人類の恐怖は、各々の協調をさらに強固なものにするのかもしれない。だけど――想いを伝えるべきカストディアンはもう戻ってこない』
　そう――彼の言う通り、バラルの呪詛を解いたところで得られるものは『統一言語』と『人類の相互理解』の２つだけ。そこにカストディアンを取り戻す術はない。
『フィーネ。お前は彼らに胸の想いを伝えるつもりだと言ったが、それはどうやって伝える気だ？　せっかく求めた言語を得たところで、それを聞いてくれる彼らはどこだ？　彼らを呼ぶ術（すべ）が何かひとつでもあるのか』
「……」

フィーネは沈黙する。彼女の目的の不意を衝いた言及、というわけではないのだろう。おそらく、彼女は自らの目的と行動にその欠陥があることを理解していたのだろう。だからこその、沈黙。

古唄もまた、そんな彼女の様子を窺いながら、決して語気を強くするわけではなく、ただ諭すような態度で話を続けた。

『俺はフィーネが賢い奴だって知ってる。お前が強い奴だって知ってる。けど……それと同じくらい、普通の人間で、普通の恋する女の子だってことも知ってる。だからきっと、カストディアンを諦められなかったのも、そういうことなんだと思う……』

ガードレールに凭れ掛かっていたデュランダルを持ち上げ、肩に担ぐ。触れている部分がシュウシュウと音を立てて炭化していくが、炭化よりも再生の速度が勝っているのか、それが全身に及ぶことはない。

『……恋心はまだ半端にしかわからないが、でも……つらいよな。俺も、フィーネが遠いどこかに行って二度と会えなくなってしまったら……それは、とても、すごく、とんでもなく、つらい。お前にもう一度会えるなら、きっとどんなことでもしたいと思う。けど……そのために、他の誰かを犠牲にするような真似だけはしちゃいけないと思うんだ』

フィーネの前で片膝をついて、それでもまだ高い視線から見つめると、彼はその手のデュランダルを彼女に渡し、ゆっくりと頭を下げた。

『だから……もしもお前がどうしても月を破壊するというのなら、俺はそれを止めなきゃいけない。お前も含めて、一人でも多くの英雄（ぎせいしゃ）を減らすために……』

「……なるほど。お前の言い分は理解した。その正統性も、お前の気持ちも、理解できないわけではない。むしろ、私としてもお前の意見には首を縦に振るべきだということもわかっている」

しかし、とフィーネが言葉を返した時点で、古唄は悔しげに拳を握った。

「それでは遅いのだ……。当初、立花響が聖遺物との融合を果たしたと知った時はネフシュタンの再生能力を己が身に取り込めればと

思ったが、それはお前によって邪魔をされた」
『でも代わりに俺の肉体構造とノイズ因子の結合状態を調べることで安全にノイズ化する方法を探し、最終的にはプロトモデルとなるノイズ因子制御装置（ウォッチベルト）を完成させることで――』
「炭化することなく自我を保ってノイズ化できる……と、思ったのだがな。結果的に言えば、あれは不可能だった。むしろ、健全で強靭な肉体と精神を持つからとて無事でいられるお前がいかに不可解な存在なのか思い知らされたのみだ」
　フィーネがそうまでして人の身に余る生命力を欲するのかと言えば、それはやはり少しでも早くバラルの呪詛を解くため――ひいてはカストディアンとの再会を果たすためであった。
　しかし、ノイズ因子の研究は既に手詰まり。生体と聖遺物の融合についての研究をもう一度やり直すことは不可能ではないが、そのために立花響を巻き込めば今度こそ大地古唄の逆鱗に触れる。
「……月が失われることで潮の潮汐はなくなり、自転軸には乱れが生まれる。無論ながら生態系や気象に影響が出ることは言うまでもない」
『まさか……バラルを解くだけでなく、急激な環境変化による人類の過剰進化に賭けるつもりか？　フィーネらしくもない……そんな不確かな策をとって、次代のフィーネの肉体が全て滅んだらどうするつもりだ』
「それこそが狙いだ……。あのお方に会えないのであれば、私の生き延びる意味など無い。幾万幾億に一つの可能性に賭けるか、あるいは全ての我が遺伝子を滅ぼすか……私が孤独にならないためにはそうするしかないのだ！」
　人類全てを巻き込んだ無理心中。
　フィーネの決断を聞きいれたかのように、彼女の手のデュランダルが眩しく輝き、石製の剣にしか見えなかったそれは黄金の装飾剣と姿を変えた。
「覚醒、だと……？」

驚愕するのも束の間、フィーネは悲しげな視線を古唄へと送り、クリスに貸し与えていたネフシュタンの鎧を自らに纏う。
見ればそのネフシュタン、クリスの纏っていた銀の鎧とは異なる黄金の鎧となってその連鎖光鞭をくねらせ、デュランダルもろとも彼女の体を縛り上げた。
『完全聖遺物2つと融合する気か……！　無茶だ、やめろフィーネ！
そんなことをすれば、お前の命が……！』
≪もう遅い……。元より我が身はカストディアンの再来を願うだけのものであった……。それが叶わぬとなれば……この身この命への未練も、守るべきものも、ありはしない！≫
古唄と同じ全身を覆う金色の鎧。
鎧の下には薄いうろこ上の膜が彼女の身を守っており、肩からは先端部が竜を模している2本の連鎖光鞭、頭部には三日月形のツノがあしらわれており、両腕には翼にも見えるような長い袖。
一挙一動ごとにバチバチとスパークする火花は、対峙する古唄に凄まじいプレッシャーを与えている。
『未練がないだと……？　守るべきものなんて……いくらでもあるじゃないか……！』
無限の再生能力と無限のエネルギー。そのどちらもが古唄にとって相性の悪い聖遺物由来の力。
とうとう戦いを避けられないと悟った古唄は、その身に宿したノイズ因子を解放、今まで絶対に女・子供に向けることのなかった拳を、最愛の女性へと向ける。
『とっておきたいとっておきだったんだが……もったいぶっていられる状況ではないらしいな』
≪決闘だ。我が最愛の理解者、大地古唄……。お前を殺し、私は理想への一歩みを見せてくれよう！≫
金色の三頭竜と終焉の黒鎧巨兵――激突。

ZとΩの先に―みらいにひびけ―

古唄とフィーネの戦闘地点から少し離れた場所で既に合流を果たしていたフィーネ組の2人は、実は消音アイドリングモードで起動していたドナシュラークから送信されていた映像で、その一部始終を把握していた。

フィーネの目論見、古唄の願い。フィーネが求め、古唄が説き、そして二人が宿す特別な絆の力。求めるものを見失い、半ば自暴自棄になったフィーネの決断と、無謀にもそれに対峙する古唄の姿。

すぐさま彼らの元へと駆け出す二人だが、フィーネの指定していた合流ポイントは目標地点の丘がやけに高いせいで、不可避となるであろう戦闘に備え体力を温存しようとすれば、全力疾走はできない。

「早まるなよフィーネ……！」

「オヤジの言葉さえ届かねぇのかよ……ッ！　アタシらじゃ、ダメなのかよ……ッ！」

クリスの洩らす嗚咽にも似た言葉の真意を、あるこは理解していた。

彼女は、おそらくフィーネを知る誰よりも彼女を信頼し、彼女に居場所を求め、愛されるための努力をした。

無論、その努力が他人から見て努力と呼べるものなのか、あるいは誉れるべきものなのかは疑問が残る。しかし、それでもその努力は彼女にできる一生懸命だった。

だから――わかる。同じ場所にいて、フィーネのために必死になっていたクリスを誰よりも近くで見ていたあるこには、彼女の嘆きがわかる。

なぜ、自分たちではダメなのか。なぜ、カストディアンでなければダメなのか。

なぜ、そんな決断を躊躇してすらくれないのか。なぜ、そんな決断を躊躇させてやれる存在になれないのか。

自分たちは、フィーネの家族ではなかったのか。自分たちは、フィーネに死を躊躇わせるに足る存在ではないのか。

「オヤジ……！」
「大地……！」
二人にとって、頼みの綱はやはり古唄ただ一人。クリスを変え、フィーネを変え、二人が変わってあるこも変わった。
彼がアクセスした人はみんな、どうしても例外なく確実に絶対に何がなんでも１００パーセント、どこかが変わる。
クリス自身、そのせいで戸惑うこともあったし、そのせいで悩んだこともある。けど……その戸惑いや悩みこそがフィーネとの関係をいい意味で『変えて』くれた。
だから、二人が今信じられる唯一の可能性は、そんな古唄の人を変える力。人と繋がり、影響を与え、変えていく力――
――アクセス。

◆

求め続けていたはずの目的を見失い、ついには究極のギャンブルに打って出たフィーネ。
彼女は自らを「歴史の暴力」とし、この世界を窮地へと追いやり、追い詰められた人類が新たなカストディアンへと進化することを望んだ。
しかし進化という美しい装飾によって彩られた真実は明確なこの星の破滅……。古唄はフィーネを「進化のために求められた英雄（ぎせいしゃ）」にしないため、その拳を握った。
『フィーネ……！　お前の苦しみや悲しみ……それは確かに俺が「わかったつもりになっている」だけのものなのかもしれない！　俺がまだお前の全部を理解してあげられていないのは、誰も否定できない事実だッ！　けど、だからってこんなのはやめてくれッ！』
≪戦姫の一人も味方につけず姦しいッ！　既に我が身は完全聖遺物……先史文明期の叡智の結晶！　お前の身の内に宿るノイズ因子と同じく、今の私もまた人の身を模した抑えきれぬ破壊衝動ッ!!　止めたいのならば暴力しかないッ！≫

フィーネの両肩から伸びた2本の連鎖光鞭『アディルヘイド』による不規則軌道刺突攻撃で古唄を退路をひとつひとつ殺しながらダメージを与えていくが、いかに完全聖遺物による攻撃といっても今の古唄は『デュランダルによる全力の直撃』を1度まで耐えきることができる。

元より身を守ることと再生することを優先しているネフシュタンの鎧を使った攻撃では、ある程度掠めるくらいならば無視できる。故に――古唄の注意は自然とデュランダルとフィーネの視線の変化にのみ向けられる。

（フィーネの肩から伸びる二本の竜の首……あれが持つ攻撃力自体は大した問題ではない。しかしあれの誘導性……一度でも絡め取られたら次の瞬間にはデュランダルの一閃でやられるッ！）

≪どうした……何故その拳をこの胸に突き立てないのだ!!　お前ならばこの身を穿ち貫くことなど造作もないはず……なのに何故その力を振るわないッ！≫

古唄は躊躇う。拳を突き出す度、ネフシュタンの装甲に罅を入れる度、彼の心を『後悔』と『不甲斐なさ』のハンマーが殴りつける。

どうしてフィーネがこんなに追い詰められるまで何もしてやれなかったのか。今こうして突き出している暴力は本当に必要なものなのか。もしかしたら、ずっと、きっと、もっと……何か彼女を救える方法が他にもあるんじゃないか。

そんな思いが彼に躊躇いを生み、悔しさを生み、コントロールバイザーの下から青白いノイズ因子の雫が涙のように零れ落ちる。

『お前こそ……どうしてそんなに俺を戦わせようとするんだッ！　そんな風に言うってことは、本当は止めてほしいんじゃないのか！　自分の暴力が傷付けてしまいかねない何かを……守りたいんじゃないのかッ！』

≪……ッ！≫

フィーネの脳裏をよぎる二人の少女の顔……。

ずっとただの駒として「使い」続けてきた彼女たちの「笑顔」が、フィーネの動きを僅かに鈍らせた。

『生きることを諦めるな！　俺はお前を諦めない……。だからお前もお前を諦めるな！』

ずっと、ぷつぷつと途切れるような言葉しか出なかった彼の口から、まるで奔流するかのように溢れ出す言葉（さけび）たち。

それは奇しくも、響が奏から受け継ぎ、響から古唄が受け継いだ爆発する感情の叫びだった。

『お前が古代（ずっとまえ）から繋ぎ続けた唄はまだＦｉｎｅ（おわり）じゃない！　もっと未来（ずっとむこう）まで響かせることができるはずだ!!』

≪戯れ言を……ッ！　今の私は高潔にして純潔なる聖遺物（モノ）……生命などという不確かで薄汚れた存在から昇華した『感情と知性のクリスタル』！　今さら人の道をあるこうとは思わんッ！≫

再び古唄へと迫る連鎖光鞭（アンディルヘイド）。しかし古唄はその先端を掴み取り、逆にフィーネを引っ張って彼女が持つデュランダルの剣身へと拳を打ち込んだ。

たとえデュランダルがどんなに強力な武器であろうと、その形状が剣であるのならば「形状特性」も剣のそれと同じ。側面からの強烈な打撃には脆く、まして古唄のパンチは日本拳法の極意である「体重の威力化」が宿っている。

事実、古唄の拳が直撃した場所には罅が入っており、完全聖遺物としての貫禄には大量の泥が塗られている。

≪聖遺物だけを攻撃して私から戦力のみを奪う算段か……。相変わらず頭の悪いやり方ではないが、賢くもないッ！≫

『……ッ!!』

しかし、相手は「ネフシュタンとデュランダル」ではなく「ネフシュタンとデュランダルを呑み込んだフィーネ」――マザーギードゥラ。

再生するのはその装甲と肉体のみではなく、その手に携えられたデュランダルも同じ。

≪爆ぜろッ！≫

▼　ＮＩＲＶＡＮＡ　ＧＥＤＯＮ　▼

アディルヘイドの先端部から放たれる二発のエネルギー光球が古唄へと襲い掛かるが、彼にそれがぶつかる瞬間、僅かに何かの電子音声らしきものがフィーネの耳に届いた。

―Ｃｏｍｐｌｅｔｅ．　Ｓｔａｒｔ　ｕｐ．．．　Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ―

気づけば、フィーネの背後に回りこんだ古唄が息を切らしながら彼女の腕を押えていた。アクセルフォームの瞬間使用による不意討ちだ。

だがそんな状況にもフィーネは驚くことなく、その肩のアディルヘイドが古唄を睨むようにその鋭い先端を向け、先程と同じ黒いエネルギー光球を放とうとしていた。

『……ッ！』

当然ながら古唄はこれを後退によって回避、追撃のアディルヘイドも平手で弾いて再びフィーネの懐へ迫ろうとするも、彼がその間合いに入り込む前にデュランダルの一閃が阻む。

翼の動きを見慣れている古唄にとって、フィーネの動きは鈍重とは言えないまでも特段素早く見えているわけではない。しかし、何度も言うように躊躇いが彼を邪魔している。

『ドナシュラーク！』

『Ｌｅａｖｅ（任）ｉｔ（せ）ｔｏ（く）ｍｅ，ｍｙ（だ）ｆｒｉｅｎｄ（さ）』

だが――彼は独りじゃない。ここに居て、ここに立って、ここで拳を構えて叫び続ける彼は、『一人』であっても『独り』じゃない。

ずっと一緒に鉄火場の最前線を共にした最高の相棒が――ここまで古唄を繋いでくれた戦友が、今まさに日常の中で笑ってくれている娘たちが、彼の背中に力をくれる。

だからこそ躊躇える。がんばれる。戦える。

≪ここでッ……、ＺＺＲ―ＳＳＣだとッ!?≫

ヴゥン、と静かに唸るマフラー音が、まるで古唄の内に宿る獣の力を表しているかのように勇ましく、この戦場に鳴り響いた。

『ドナシュラーク……。俺の無茶に、付き合わせてすまない……』

『Ｉ（私は、）ｂｅｌｉｅｖｅ（あなたを信じています）ｙｏｕ（から）．

trust me, my friend(だから、あなたも私を信じてください)』

『……ああ、信じてるさ……。なんたって、お前は――』

『Please don't forget(忘れないでください).

I'll leave everything to you(私はいっさいを従います).

I am――your best friend(なんたって私はあなたの相棒なんですから)』

古唄が零した呟きに、ドナシュラークは力強く応えて駆け出した。

ギアを1速から4速まで上げるに必要とした時間はわずか6秒――彼は自分の持てる限りのライディングテクニックを駆使してフィーネに立ち向かう。

≪バカな……！　ZZR―SSCのサイズとスピードで、なぜアディルヘイドをかわせるッ！　なぜニルヴァーナが当たらないッ！≫

『しらいでかッ！　メシ食ってバイク愛でて寝るッ！　ライダーの鍛錬などそれで十分だッ！』

次々と放たれるNIRVANA　GEDONの連続攻撃。しかし古唄はドナシュラークの前輪を持ち上げることで急激な軌道変更を可能にし、フィーネの攻撃を全てかわしていく。

それだけではない。長期間に亘るフィーネの救済のため悩み続け、ここにきて一気に事態が展開したことで追い詰められ続けていた古唄は、この最終決戦でようやくフィーネと「対峙」したことでストレスのピークを越え、ドナシュラークを引き金として吹っ切れた。

故に――古唄はドナシュラークに自分の背負う嫌な感情の半分を預け、フィーネへの攻撃を――いや、抵抗を開始した。

≪速い……ッ！　ネフシュタンの再生を上回るほどの機動性と一撃の重さ……！　これほどのポテンシャルはノイズギアにもZZR―SSCにも無かったはず……！≫

『バイクのスペックとライダーのテクニックを加算しただけが真のライディングと思うな……！　バイクを信じるライダーの心！　ライダーに応えようとするバイクの気持ち！　そういう数字じゃ量れないものも全部ひっくるめて――俺たちライダーは『走って』いるんだッ!!』

フィーネの脇を通り過ぎる瞬間を狙って叩きこまれる拳は、古唄の体重こそ乗っていないにせよ、ドナシュラークの繰り出す驚異的なスピードを使った突進（チャージ）によって威力を増している。
アクセルターンやドリフトターンではギアダウンは免れないが故に、彼のとった方向転換はウィリーを利用した我武者羅なもの。しかしそんな無茶にも「ドナシュラークならば応えてくれる」と信じている古唄は、その無茶をやめたりしない。少なくとも――この勝負が終わるまでは。
≪このままでは……ッ！≫
古唄の左足と背中に展開される補助武装（アタッチメントギア）、トーチライト型エネミーロックユニット『Ｓ（サーチロック）Ｒ（アタッチメント）Ａ』とＵ字スラスター型フライトユニット『Ａ（アクティブ）Ｄ（ダッシュ）Ｓ（スラスター）』――それが意味するものは、
『はッ！』
これまでよりもフィーネとの間を大きく開けた古唄が、ドナシュラークのシートの上で大きく跳躍すると、背中のＡＤＳがＵ字から逆Ｕ字へと向きを変え、その高度をさらに増す。
そして高度がピークに達すると同時にＡＤＳが推進中断、再び逆Ｕ字からＵ字へと向きを直すと、空中で一回転して突き出された左脚のＳＲＡから紫色のレーザーが『Ω』を描くように射出、フィーネの動きをロック。
『やあああぁぁーッ！』
叫びに呼応するかのように点火したＡＤＳが、今度はその推進力を落下速度を加速させ、彼のキック力を増していく。
≪ッ……ああぁぁあァぁあああぁぁあッ!!≫
誰もがクリティカルヒットを疑わない渾身の一撃。
それを受けて遥か後方へと吹き飛ばされたフィーネは、ついにその身に纏っていた鎧を破壊され、一糸纏わぬ姿で地に伏した。
『……やった、のか……？』
誰にというわけでもなく呟いた古唄。
しかし、それはすぐに否定された。
「う、ぁ……っ！」

『フィーネ……？　まさか、まだやるつもりか!?　無茶だ！　これ以上はお前の体が……！』
「言ったはずだ……私は既に人の身ではない……。いまさらこの身がどうなったところで……！」
　デュランダルとネフシュタンの鎧に加え――今度はソロモンの杖までもをその身に取り込み、ついには黄金の鎧がその身を真の竜へと変えた。
　カストディアンを求める心は折られ、聖遺物を呑み込んだ体はズタボロ。心身共に満身創痍の彼女が、なぜまだ立ち上がれるのか……なぜまだ立たなければならないのか。
　それは――彼女がまだ『夢』を抱いているから。夢は呪いに似ている。一度でも何かを夢見た者は、それを果たすまで呪われたまま、なかなかその呪いから抜け出せない。夢のない古唄には、それが理解できない。
『フィーネ……お前がそうまでしてカストディアンの幻影を、夢を求めるなら……俺は『夢』を永遠に理解できないッ！　夢ってのは、そんなに悲しくて冷たいものじゃないはずだッ！』

Ψその通りだ、大地Ψ
X夢とは未来を望む者だけが見るものだX
Δ過去に縛られるだけの奴が見るもんじゃねえんだよ！Δ

　古唄の悲しい叫びに、青・赤・桜……三つの光が呼応する。
『風鳴……クリス……あるこ……。来てくれたのか……！』
　女3人寄れば姦しい。ましてそれが戦場を駆ける戦姫ならば――その姦しさは旋律となり唄を紡ぐ。
「覚えとけフィーネ！　夢ってのはな、時々すっげー切なくなるけど、時々すっげー熱くなるモンなんだよッ！」
「お前の夢が、答えがどこにあるのかはまだわからない……。だがお前の果たすべき夢は、本当にそれだけなのか？　もっと身近な誰かに夢を託して守り抜くのも、ひとつの夢とは言えないのか……！」

「貴女の目指す夢が滅亡の先にあるのならば、私はその運命（さだめ）と戦う！
勝ってみせる！　そして貴女も……人間の中で生きさせてみせるッ！　それが人々を……貴女を含めた「今を生きる人」を守る、防人の務めだッ！」
戦姫の叫び――それは『緋色の乙女』となり黙示録の赤き竜の中に身を隠したフィーネへの想い。
ギアの放つ力……たとえどんなことに使ったとしても暴力でしかないそれではなく、胸の中からにじみ出る感情を乗せて解き放つ言葉は、あらゆる障壁を越えて人と人とを繋いでくれる。
それを教えてくれた人がいるから、彼女たちはギアを構える前に言いたいことを言い尽くす。
≪綺麗事を……ッ！　私を止めたいのなら、その手の力のみを振るえばいいだけのことッ！≫
『黙って振るう力にどれほどの意味がある！　絆ってのはな、アクセスってのはな……！『人と人とを繋ぐ痛み』が、絶対に何か伝えたい気持ちを持ってるから出来るんだ！　何かを伝えようとしない痛みなんてのはなんの意味もないッ！　まして誰かを守るための戦いなら……俺は俺の吐き出せる限りの感情を、守りたい人にぶつけなきゃいけないんだッ！』
古唄の叫びに共鳴して輝きを増していくノイズギアの黄色い発光体……。
その色が黄色から金色へと昇華し、全身に同じ金色のフォトンラインが走ると、ノイズ因子の塊でしかなかったノイズギアがその性質を変え――『誰かの心に叫びを届ける無双の一振り』へと進化した。

≪バカな……！　体内のノイズ因子が膨張と増殖を繰り返して……明らかに人の身が制御できるものではないはずッ！　なぜ抗える！　なぜ従えられる！　なぜ抑え込めるッ!!　お前のそれはなんだ……それは私が作ったものか!?　なんなのだ……！≫

『ノ・イ・ズ・ギィイッ――ヴウゥワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

滅亡の黒鎧邪神―ハイパーゼロメガ―

『ノ・イ・ズ・ギィィッ――ヴウゥワアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

ノイズギア・ＦＤ（フルドライブ）モード。

大地にとって最大にして最後の切り札であり、彼が最も嫌った『完全なるノイズの姿』に最も近い状態。

これまで溜めこみ続けていた全てのノイズ因子を使い切る捨て身の荒業ではあるが、守れる限りの全てを全力で守りたいと願った彼にとって、今より他に命をかけられる時など知るわけもない。

≪そんなにノイズが欲しければ……好きなだけ喰らえええええっ！≫

まるで巨塔にも似た竜の顎から天へと放たれた光――それは街へと降り注ぐと、大量のノイズを出現させた。彼女が取り込んだ聖遺物のひとつ、ソロモンの杖の力を行使したのだろう。だがそんな事態にも、古唄は慌てない。

翼に応援を頼んだ時点で、既に弦十郎をはじめとした二課の面々が一課と協力して民間人をシェルター内に避難を完了させている。故に――古唄も自分のやりたいことを全力でやりきれる。

彼が翼とクリスとあるこに視線を送ると、三人はそれに頷き、各々のアームドギアを構えてフィーネと対峙する。

『ウォおおァぁあアアぁあァッ!!』

野獣の如き雄叫びと同時にノイズギアの発光体が明滅を始めると、その体躯は人の身の限界を越え、赤き竜と並び立つほどの巨体を見せつけた。

≪ビーストフォーム……Ｈｉｇｈ（ハイ）Ｐｏｗｅｒ（パー）ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡだとッ!?≫

『ピロロロロロロ……』

ＦｉｎｅとＺｅｒＯＭＥＧＡ……互いに『終わり』の名を持つ者として、交わし合う視線には強い意志が込められていた。

「大地！　こちらは我々に任せてお前は街を！」

「アタシらがやるより、あんたの方が街をブッ壊すことなくヤツらを皆殺しにできンだろ！」
「だが出来るだけ早く戻れ！　いかに装者三人がかりとはいえど、さすがに体格差がありすぎる！」
　翼たちの言葉に背を押された古唄は、無言のまま小さく頷くと街の方へと飛んでいった。
「さて……それにしても怪獣大戦争をバックに巨大怪獣ｖｓ変身ヒーローとは特撮マニア垂涎のバトルだな」
「だったらテーマソングは『撃烈』にガンガンぶっとばすしかねぇなッ！　あるこ、歌詞は忘れてねぇだろうな！」

Ψ∆　――――――　∆Ψ

「これは……デュエットソング！　なるほど、性質の似た聖遺物同士であれば、斯様な芸当も可能なのか……！　面白い……惹かれるなッ！」
　互いにこれといった合図もなく、クリスのイチイバルとあるこのアッキヌフォートから流れ始めた２つの音。
　本来それぞれのギアが同じ曲を持つことなど無いが、そもそもギアに秘められた曲が戦闘聖詠とは限らない。シンフォギア装者の唄とは、彼女たちの胸に宿る魂の響き。
　ギアから引き出されるのではなく、彼女たちが共にした唄がギアを引っ張る――。そんなことも、彼女たちならば可能なのだ。
≪ええい喧しい喧しい喧しいッ！　その音、その旋律……！　今ここで絶やしてくれるッ！≫
「させるものかッ！」
　クリスとあるこの曲――装者二人分の唄声だけに出力も通常の二倍ではあるが、それだけにイントロがやたらと引っ張るせいで、フィーネにレーザー攻撃のチャージ時間を与えてしまった。
　だがそれを途絶えさせるわけにはいかない。仲間を守る防人として、幾つもの戦場を越えた戦士として、そして何より彼女たちの旋律

に惹かれた歌女として、風鳴翼はその全力を以てフィーネの攻撃を受け止めた。
しかしこの体格差、相手は完全聖遺物３つの力を内包する『百魔獣を統べる者』……元より容易に受け止められるとは翼も思っておらず、回転する刃にて受け止めたそのレーザーは刃の角度を変えて偏向。
直撃は回避したが地面にレーザーがぶち当たったことで、レーザーの余波やらコンクリートの破片やらが彼女たちに小さくないダメージを与えた。
「防人ッ！」
「ちきしょうッ……！　行くぞあるこッ！」

Δ　荒くてキツめのドライビング！　Δ
Ψ　隣のヤツは不機嫌で　Ψ
Ψ　おい　Ψ
Δ　あん？　Δ
Ψ　はぁ……やれやれだ　Ψ

先に動いたのはクリス。直射型ではあるが貫通能力の高いボウガン状態での射撃でフィーネの居る赤き竜の喉元を狙うも、強靭なシャッターにて防がれる。
だがこれで視界を阻まれたと察したあるこが続き、即座にシャッターとシャッターの間にある柵部分まで跳んでライフルの先端を突き刺し、シャッターが開いた瞬間にミサイルを内部へと放り込んで離脱。
内部で爆発が起きたことが地上からでも確認できたが、おそらくネフシュタンの再生能力のおかげでダメージらしいダメージにはなっていないはずだ。

Δ　空気が重くて気が滅入る　Δ
Ψ　口下手　自分が恨めしい　Ψ

Δ　なぁ　Δ
Ψ　ん？　Ψ
Δ　いや……なんでもねえ　Δ

そしてそれはやはり。仕返しとばかりに翼のような突起の先端部分から放たれた誘導射撃がクリスとあるこに襲い掛かる。
しかしクリスはこの攻撃の一発一発をサイズに見合う威力とは思わず、高火力と連射性能の高いガトリングで迎え撃つと、彼女の予想した通り空中で巻き起こった爆発と衝撃は明らかに一発ずつが致命傷となるような威力だった。
「あれを受けるわけにはいかんな……クリス、あれらの迎撃は任せる。防人、私と共に前を頼めるか？」
「無論だッ！」
クリスに援護射撃を任せた翼とあるこは、再び赤き竜の喉元まで跳躍。
しかし今度はシャッターを閉めると同時に例の誘導射撃があるこに襲い掛かるも、クリスがそれらを撃ち落とし、あるこの肩を足場に翼がさらに高くまで跳び、赤き竜の頭部へと登る。
その流れをシャッターに阻まれて確認できなかったフィーネは自らの真上で何かが起きていることだけを理解し、竜の首そのものを上に向けると、天高くから凄まじいスピードで降下する巨大な剣を目にした。

X　天ノ逆鱗　X

その一撃は見事に赤き竜の喉を貫通。フィーネの僅か上を通過して彼女だけを傷付けることなく竜の首を切り落とした。
しかし――、
「これでもまだ再生するのか……！」
「だったらぁッ……！」

Δ　ＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＱＵＡＲＴＥＴ　Δ

「一斉発射（フルバースト）だあああぁぁあっ!!」

首を落とされてもすぐに再生を開始した赤き竜に、この機を狙って既に準備を終えていたクリスのフルバーストが炸裂。

ネフシュタンは常識では考えられないような再生力こそ持つが耐久性は決して高いとは言えず、シャッターを失った今ならばこの攻撃は有効だというのがクリスの読み。

だが――甘い。相手は仮にも完全聖遺物３段重ね。贅沢に贅沢を足してさらにそれを贅沢で乗算したような相手に、今さら養殖の真珠１つ程度のガラクタがどれほど対抗できるものか。

≪効かぬ……効かぬぅぅぅッ！≫

「嘘だろ……オイ……！　せっかく丸裸（マッパ）にしたのにまた元に戻りかけてやがるッ！」

「ここまでしてダメとなると、やはりネフシュタンの再生能力とソロモンのノイズを操る機能の二つを取り除く必要がありそうだ……」

ネフシュタンの再生能力と、ソロモンによる無尽蔵な肉体供給による巨体の維持。それらを止める手立てなど、そうそうあるものでは――と絶望しかけた時、三人の脳裏に「あること」がよぎった。

「グッジョブだノイズ因子！　残る問題はネフシュタンだが、まずはソロモンだ！　ひとつひとつ崩していけば可能性はあるッ！」

途端に士気とテンションが上がったあるこのシャウトを皮切りに、既にサビが近付いているデュエットが再開する。

ΨΔ　Ｇｙａｈａ　！　Ｌｏｃｋ　ｙｏｕｒ　Ｈｅａｒｔ　！　ΔΨ

Ψ　Ｐｌｅａｓｅ　ｙｏｕｒ　ｔｒｕｅ　Ｈｅａｒｔ　!!　Ψ

Δ　ココロの奥に隠してる嘘は捨てろッ！　Δ

相手が完全に再生するまでもう少しだけ時間がある。

クリスとあるこは翼に防御を任せてチャージに全力を注ぎ――そ

して、

ΨΔ　Ｇｙａｈａ　！　Ｌｏｃｋ　ｙｏｕｒ　Ｓｏｕｌ　！　Δ

Δ　Ｐｌｅａｓｅ　ｙｏｕｒ　ｔｒｕｅ　Ｓｏｕｌ　!!　Δ

Ψ　壊すべき邪魔があるのなら……　Ψ

ΨΔ　撃、ち、ま、く、れえええええッ!!　ΔΨ

Δ　ＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＱＵＡＲＴＥＴ　Δ

Ψ　ＢＬＡＺＩＮＧ　ＭＥＴＥＯＲ　／　ＳＨＯＷ　ＤＯＷＮ　Ψ

二張の弓のフルバーストが、赤き竜に――フィーネに炸裂した。

◆

ノイズギア・ビーストフォーム。フィーネ曰くＨｉｇｈＰｏｗｅｒ（ハイパー）ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ。

全長７０メートル、体重４万トン。ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡをそのまま巨大化させたような外見だが頭部にはバイザーがなく、左腕にウォッチベルトも確認できない。

ピロロロロ……という無機質な声は、時折唸るように「ゲット……オン」という鳴き声になることがあり、飛行時には背中に金色の発光体による細長い翼が展開されていて、まるで元が人間であるとは思い難い。

古唄の体内に存在するノイズ因子を『膨張』させることでその肉体を巨大化させ、主に大型ノイズに対して力を発揮するものの、暴走の可能性が最も高いとされていた危険なフォーム。

しかしＦＤ（フルドライブ）モードとなってノイズ因子の制御能力が格段に向上した今の古唄であれば、暴走することなくその力を十分に発揮することができた。

そして何よりこのビーストフォームは、ノイズギアの本来の目的―

―『ノイズに対してのみ発揮される攻撃力』を最も顕著に表した姿。位相差障壁の応用により街の建物には一切の被害を出すことなく、大量のノイズを一気に殲滅可能なのだ。

『……ゲッ……トォン……』

頭部の金色の発光体を明滅させながら、零れるようにして街へと響き渡る「ピロロロロ……」という無機質な彼の声。膨大なノイズ因子の制御自体はこれまでほど負担になっていないが、ノイズとしての面が色濃く出てしまっている今、彼はヒトの特徴である言語を失った。

だが自分は見失わない。この姿になってでも守りたいと思えるような人が、今まさに苦しんでいる。だから――今ここで暴走している暇などない。

むき出しの鋭く巨大な爪は、大地を抉るような一撃にて数百の小型ノイズを軽々と葬り、大型ノイズはまるで獅子の前に現れた鹿の如く貪られノイズ因子に変換されていく。

戦えば戦うほど、同族を葬り、散らし、暴食（くら）うほど、彼の力は増していき、巨大で強大な存在へと昇華を続けるが、その度に人ならざる存在に近づいていることを思い知らされる。

だが彼はそれを悔いはしない。自分が強くなる限り、人でなくなり続ける限り、犠牲者であり続ける限り、少しでも多くの「いつかどこかの誰か」が『人ならざる強き犠牲者（アナザー・ヒーロー）』でなくなっているはずなのだから。

『ゲッ……トォン……』

しかし数が多い。さすがにこのままでは埒が明かないと察した彼は、胸の発光体から巨大な火球を出現させ、それをノイズへ放つと、視界のに入っていたほとんどのノイズたちが蒸発。

実はこの時、ノイズ側の位相では大型ノイズ一兆匹分のエネルギーが熱エネルギーに変換され、１，０００，０００，０００℃の炎として発射されていており、ノイズたちだけがこの世のものとは思えない本物の灼熱というものを味わっていた。

彼の背中側でかなり離れた位置にいたノイズらも、彼が振り向くと一目散に拡散したが、彼は構わず同じ火球を3発放ち、初期総数の９

割以上１０割未満をたった４発の火球で殲滅した。
何匹かのノイズたちが彼に特攻を仕掛けるも、彼は微動だにすることなく半透明のノイズ因子による八角柱状のバリア『ハイパーゼロメガシャッター』で防御。
飛行型ノイズがその身を槍に変えて集団で襲い掛かると、防ぐことも避けることもせずそれを喰らい、すぐにノイズ因子に変換、さらには増幅して跳ね返す『ハイパーゼロメガアブソーブ』にて地上のノイズたちを皆殺しにするという無双ぶり。
おそらくフィーネやクリスが相手でやりたいようにやれなかったストレスを今ここで解消しているのだろう。聖遺物戦では見られないくらい伸び伸びとノイズたちを虐殺している。
『……ゲッ……トオオオン……』

終焉の黒鎧巨人あらため、滅亡の黒鎧邪神――降臨。

継槍―ガングニール―

イチイバルとアッキヌフォート。性質の類似する二つのシンフォギアによる戦闘聖詠の二重唱にて放たれた絶唱級の殲滅攻撃。

が、そんな殲滅力をもってしても赤き竜の再生力を上回ることはできず、すぐさまフィーネの姿に戻り、マザーギードゥラの姿へ。そしてマザーギードゥラが周囲の肉片を取りこんで再び赤き竜へと再生を果たそうとする。

だがそれでも構わない。元より彼女たちの狙いはフィーネの打倒ではなく救済。彼女たちの使命は、彼女が再生を完了し攻撃に転じないように攻撃し続け、完全再生を妨害すること。

（いかに無限の再生能力を持つといっても、苦痛を感じないわけではないはず……！　既に絶命級のダメージを何度も与えているというのに……彼女の執念、その志が正しきものであればどれほど素晴らしい人間であれたのかッ……！）

親友・奏の仇敵であると知りながら、翼の構える刃には迷いがあった。決して信念を揺るがすような迷いではなく、けれども己の正義にひとつの疑問を持たせるには十分な迷い。

彼女は――フィーネは本当に悪だったのだろうか。彼女の行いは確かに善とは言い難いが、それだけを根拠に彼女を悪なる存在に仕立て上げていいものなのか。それは己に問うまでもなく、否だろう。

正義はひとつではない。自分に「風鳴翼の正義」があるように、彼女にも「フィーネの正義」があり、善なる行為だけではそれを為し得なかったが故の悪行。

視点をひとつ変えれば、フィーネは「純粋すぎる想い」を胸に抱く英雄（ぎせいしゃ）なのだ。だから胸が痛い、だから心が苦しい。

武器ではなく、言葉で通じ合えたら――かつての自分が聞けば戦場で何を莫迦なことをと思ったかもしれないが、今の翼はそう思わざるをえなかった。

フィーネは善ではないが、悪でもない。まして不義などでは断じてない。自らの正義にどこまでも純粋な少女なのだ。

「ちきしょうッ、キリがねえッ！」
「下がれクリス！　弾幕は私が張るッ！　防人、今度はお前が唄え！」
「私が？　……なるほど、一斉掃射がダメなら高機動攻撃というわけか。試して損はなさそうだ。ならばしばし前を任せるぞッ！」
　動きながらでも唄うことは可能だ。しかし前線で常に気を張り続けながら唄っているよりも、一度バックに下がり落ち付いた状態で唄う方が、イントロをうまくやり過ごすことができる。
　Ａメロさえ始まってしまえば、少なくともサビまでは最高の全力疾走が持続できる。その間、僅か７７秒……されどその７７秒は、高機動型の戦士にとって永遠にも等しい。

Ｘ　――――　Ｘ

　イントロの開始と同時に、マザーギードゥラの攻撃が翼に集中する。
　だがその攻撃が届くよりも遥かに早く、あるこの放った銃弾はマザーギードゥラたちの胴を捉え、弾のサイズに見合わない規模の爆発を起こし、彼女たちを退ける。
　それでも翼から遠ざけることのできた個体は１体のみ。残る２体の片方はライフルを片手剣さながらに振るって止めるものの、もう片方は通してしまった。
「クリスッ！」
「わぁってるッ！」
　しかし、それに動揺することはない。既に息を整えたクリスがもう片方のマザーギードゥラを牽制して翼との距離を開かせてやれば、既にイントロはＡメロへと突入し始めていた。
　ここまで２５秒――たった２５秒だが、クリスとあるこがその２５秒を稼がなければ不可能だったと言いきれるほど、今の翼のコンディションは高まっていた。

Ｘ　空が昏み　橙（あか）く燃える　キミの髪と同じ色Ｘ

Ｘ　貴女の後ろ姿が　ちょっとだけ滲んでいるのは　なんで　Ｘ

唄と同時に、翼の高機動攻撃が3体のマザーギードゥラたちを一気に攻め立てる。

しかし、さすがに相手も相手。攻撃した端からすぐに再生し、敢えて攻撃を受け続けることで翼の攻撃パターンを読みきったのか、次第にカウンターも受けるようになる。

ならば、と再びクリスとあるこが援護射撃を行い、翼の攻撃に合わせてあるこが狙いの個体を攻撃、クリスが他の個体を牽制する。

Ｘ　耳障りな不協和音　私を追ってくるのであれば　Ｘ

Ｘ　今宵くらいならば　地獄まで付き合おうか　Ｘ

全身に滾る力を機動力に変えただけの攻撃ではマザーギードゥラを散らすことはできない。

そう理解した翼は、目の前の個体を蹴飛ばすとすぐさまアームドギアの形状を巨大な剣に変え、稲妻を纏った斬撃――蒼ノ一閃を放ち、マザーギードゥラから距離をとると、続く千ノ落涙にて3つの個体を同時に攻撃。

単純なスピード攻撃だけではない、それぞれの技を組み合わせた攻撃。土壇場の付け焼刃――しかし今の彼女にできる精一杯のコンビネーション。

シンフォギアやノイズギアの開発者であるフィーネは、その立場を利用して装者たちの能力データのほとんどを知っている。

いかに強力な完全聖遺物を持っているとはいっても、いち科学者であり戦士ではない彼女がここまで戦ってこられたのは、そのデータが最も影響しているからだろう。

しかし命ある者は常に進化し続けている。1日前までのデータなど――、

Ｘ　血を燃やせ　怒りの旋律　奏で　Ｘ

Ｘ　真っ赤に染めたカウル身につけて　Ｘ
Ｘ　喧しい断末魔（さけび）を掻き消すほど　雄叫びを上げて　Ｘ

千ノ落涙によって抉られた大地から溢れ出す土埃が張れると同時に、翼の姿が見えないことに気付いたマザーギードゥラたちは、すぐにその視線を上へと向けた。
するとやはり、そこには巨大な剣を押し出すように飛び蹴りを放とうとする彼女の姿があった。あの攻撃は間違いなく必殺級の威力を持つ天ノ逆鱗、受けたくはないと判断したマザーギードゥラたちはそれぞれに防御体勢に移ろうとするが、体が動かない。

Ｘ　影縫い　Ｘ

≪……ッ！≫
視線を下げれば、彼女たちの影を複数の短剣が突き刺し、動きを止めていた。
先程の千ノ落涙を利用して放った変則的な影縫い。ほんの今さっき思いついたばかりで翼自身もうまくいく自信はなかったが、だからこそフィーネも対処法がわからない。

Ｘ　ぎゃあぎゃあと喚くな　雑音（ノイズ）の群れ　Ｘ
Ｘ　彼方の果てに　散って消えよ　Ｘ

回避不能。防御不能。迫るは絶大なる必殺にして必殺なる絶大。
風鳴翼の繰り出したその一撃は、２体のマザーギードゥラを同時に葬るには十分な威力を持っていた。

Ｘ　花咲く夜に蒼き小鳥は飛び立つの？　Ｘ
Ｘ　風を薙ぎ、今――あの月を仰げ　Ｘ

叩きつけられる必殺。

再び巻き起こった土埃が邪魔になって2体のマザーギードゥラの亡骸は確認できないが、間違いなく仕留めた。そう確信した者はいなかった。

「まずいッ！　逃げろ防人ッ!!」

不意に耳に届いた言葉の意味を左脳が理解するよりも早く、赤紫色の光は翼の全身を呑み込んだ。

◆

―ＴＩＭＥ　ＯＵＴ―

制限時間の超過により巨人態を維持できなくなった古唄が周囲を見渡すと、そこには山のようなノイズの残骸が青白い炎に焼かれながら沈黙していた。

すぐにでも翼たちの支援に行きたいところではあるが、ビーストフォームで動き回りすぎたせいか目的地までかなり距離が開いてしまった。

距離にしておよそ道なりに8キロ程度か。通常の１０００倍、即ち約２５０００ｋｍ／ｈで動くことのできるアクセルフォームなら1.１５秒で辿りつく距離ではあるが、彼は今日だけでアクセルフォームを2度使用している。

どちらも時間制限内の解除ではあるものの、蓄積された肉体的ストレスを考慮すれば、今日中に発動できるアクセルフォームはあと1度まで。フィーネとの決戦で切り札のひとつを失うのは避けたい。

（ドナシュラークさえいてくれたら……）

長年の相棒さえ手元にいれば少しは楽だっただろうが、そのドナシュラークは翼たちのところに留まっているはず。

ＯＣＡ（オペレーションコールアタッチメント）を使って呼び出すことも考えたが、往復するのはあまりにも時間を使いすぎる――そう思っていた時だった。

獣のような静かな唸り声が彼の耳に届くと同時に、キュルキュル、という糸を巻き上げるような独特の音が彼に近づいてきた。

（この音は……！）
思わず音のする方向へと視線を向けた彼の目に飛び込んできたものは、最愛の相棒・ドナシュラーク。そして――、
「古唄さーん！」
『響!?　それに未来まで……!?』
彼がまるで我が子のように愛しながら守り抜こうとした二人の少女の姿だった。
「古唄さん！　わたし、ギアを纏います！　でもそれは戦うためじゃありません！　この戦いを観てる人たちに、本当のことを知ってもらうため……古唄さんが戦ってる意味を、みんなに知ってもらうためです！」
「お願いです古唄さん！　もう一度だけ、響の唄を信じてあげてください！　響の唄は決して誰かを傷付けるだけのものじゃないって……誰かと誰かを繋ぐことのできる唄なんだって、信じてほしいんです！」
響と未来から向けられる視線に宿った決意の炎。
戦ってほしくない。戦いの中で傷付き傷付けるような子になってほしくない。そんな古唄の願いは、いつしか「響を戦わせないこと」から「響にギアを纏わせないこと」にすり替わっていた。
しかし、古唄は忘れていたのだ。シンフォギアは武器であると同時に鎧であり、そこに流れる血は少女たちの唄にあることを。
立花響のアームドギアは、誰かを傷付けるためではなく誰かを守るための力。そして同時に、あらゆる『敵意』を拒絶しながらもあらゆる『誰か』を許容する力。
それを可能にする彼女の唄が、ただ誰かを傷付け誰かに傷付けられるための唄であるはずがない。自分も含めて、絶対に誰も傷付けたくないと願う彼女の唄は、戦わずしてギアを纏うことを可能にさせてくれる。
そんな無茶苦茶な暴論を納得させるだけの不思議な「なにか」を、響は持っているのだ。
『……後悔しないと、言い切れるのか』

「言い切れません。むしろ、いつか絶対すると思います」
『俺に全て任せてはくれないのか』
「フィーネさんのことは古唄さんに任せます」
『……未来が泣くぞ』
「もう泣かれました。けど、仲直りもできました」
『俺はキミを守りたいんだ』
「わたしも未来を守りたいんです」
『……それは、ギアを纏わないとできないことか？』
「はい。だって、そうしないと――」

―古唄さん、フィーネさんを救ったら死ぬ気でしょ―

何も言い返せず、沈黙という肯定だけがその場に残される。
しかし響はそんな静寂を打ち破るように、間髪いれることなく追いの言葉を続ける。
「……わたしと未来が悲しむって、わかりませんか」
『わかってるさ』
「自分だけが犠牲になれば全部が幸せになれるなんて思ってないでしょ」
『当たり前だ』
「古唄さん、不器用ですもんね。でも……ダメなものはダメですよ」
『……どうして』
「もし死のうとしたら、わたしは古唄さんと戦いますよ」
『……ひどい、脅し文句だ……』
震える声。震える肩。何かを決意するかのように握り締めた拳。
古唄は響からその視線を外すと、彼女に背を向けて静かに、啜り泣くような声で呟いた。
『……ギアの調子が悪いな。何も見えないし、何も聞こえない。……誰が、何を唄っているのかも……さっぱりわからない……』

彼の想いを聞き届けた響と未来は、その手を握り合うと、共に胸から込み上げるものを解き放つ――。

自分たちがやりたいことが、今ここで泣いている彼を泣きやませることのできる行為だと信じて、彼女たちは自分たちにできる精一杯を唄う――。

Φφ　バルウィシャル　ネスケル　ガングニール　トローン　φΦ

相対する恋心―ファイナルゲーム―

回避不能。絶対すぎる必殺『天ノ逆鱗』の直撃により葬られたかと思われた2体のマザーギードゥラ。

しかし攻撃に手ごたえを感じられなかった翼とフィーネの執念深さをよく知るクリス&あるこは、そのあまりにもあっさりとした結末を疑わざるをえなかった。

そこで意を決した翼がマザーギードゥラへと一歩近づこうとした瞬間、未だもくもくと立ち込める土埃の中から放たれた赤紫色の光線が彼女を呑み込んだ。

すぐに駆け付けるクリスと、そんな彼女を守るように土埃の向こうを警戒するあるこ。気付けば、いつの間にやら天ノ逆鱗の対象から免れていた1体の姿が見えなくなっていた。

≪風鳴翼……。さすがにシンフォギア装者の中でも飛び抜けて基礎修練と実戦経験を積んでいるだけのことはある……。ここまでのコンビネーションをあの短時間で即座に思いつくとは恐れ入る……≫

ようやく晴れた砂埃の中から現れたのは、1体のマザーギードゥラ。先程の2体と肉体の統合を果たしたことで再生スピードを高め、同時に影縫いから逃れたのだ。

翼が経験と修練の積み重ねで得た自信と直感をフルに使い、戦士としての機転を利かせたように、フィーネもまた自己データと完全聖遺物の性質を応用し、識者としての機転にて彼女のコンビネーションをかわしきった。まさに頂上の対決。

しかし翼は今の攻撃で大ダメージを受けベストコンディションとはとても言えない状態になっていた。これでは前衛を任されるどころかクリスとあるこの足枷になりかねない。

≪だがそれもここまで……。既に貴様は満身創痍、立ち上がることも満足にできぬその姿では、この手で葬るにも値せぬ……≫

口元を妖しく歪めながら振るったアディルヘイドがクリスへと迫る。翼を庇うようにして立っていたせいで反応に遅れたのか、咄嗟に

イチイバルで撃ち返そうとするも、それを弾いて捕えられてしまった。
　しまった、と言う間もなくあるこがクリスの拘束を解除すべくマザーギードゥラの手元――手首の関節部に射撃を打ち込み、弾丸を滑り込ませるが、彼女はそれを気にも留めず捕えたクリスを投げ飛ばし、それを受け止めようとしたあるこは凄まじい勢いで後ろへと飛ばされた。
　状況は絶望的――翼は全身に大ダメージを受け、クリスとあるこも翼という大きな戦力を欠いた状態では戦線を維持できず、消耗戦になりつつあった。このままでは、ただやられるのを待つばかり。しかし、そんな中でも彼女は諦めなかった。
「まだだ……まだ私は立てるぞ、まだ唄える……抗える、戦えるッ！」
　地べたに片手をつきながら、だけども確かに、風鳴翼は携えた刃を手放すことなく立ち上がり、再び構えた。
　これを見たマザーギードゥラは、思わずその脚を一歩後ろへと退けた。相手は既に再起不能とも思われた絶体絶命の満身創痍。剣を構えるどころか、四肢に力を入れるにも苦痛を伴う状態であるはずだ。
　そんな相手に、三つの完全聖遺物を我が物とした自分が怯え恐れて一歩を後ろへと下げるなど、フィーネにとってはこの上ないほどの屈辱であるはず。しかし彼女はその激情の赴くままに行動を起こせない。
　それは至極当然――目の前に立つのは風鳴翼。幽鬼の如くあれども百鬼夜行を斬り伏せる誇り高き防人（むそうのひとふり）。
　まるで大蛇の尾すらも切り裂くほど鋭く研ぎ澄まされた存在感と威圧感は、マザーギードゥラのポテンシャルとフィーネの知能を持ってしても凌ぎきれない怒濤の斬撃。
　理性では抑えきれない本能的な恐怖がフィーネを襲った。
≪バ……バカなッ！　まだ戦えるだと……ッ!?　何を支えに立ち上がるッ！　何を握って力と変えるッ!!≫
「わからないか？　私たちには、まだたったひとつだけ……だがとびきりの希望があるということを！　お前を救おうと、己が忌み嫌う姿

を大勢の人間に晒しながら戦っている者がいることをッ!!」
≪……ッ!!≫
フィーネに、何かとびきり大きくてとびきり熱くてとびきり痛いモノが突き刺さった。
しかし同時に、そのとびきりの何かが突き刺さった傷口からは、同じくらいとびきりの心地よさすらも感じられた。
「見ろ……既に街に放たれたノイズは全滅している。その意味がわからないお前ではないだろう……」
≪……ＦＤモードの完全制御……。ノイズの本能と同調することでノイズ因子を活性化させ、ノイズに対して極めて高い致死能力を得る、が……その代償として、ほぼ１００％の確率で暴走するとされていたモノを、奴は……≫
「それほどの危険性を孕むものを自覚できない大地ではない。しかし奴はその力を使い、制御してみせた……もっと言えば、制御できるという確証があったからだ。貴女を守りたいという想いは、たとえノイズの本能とひとつになっても変わらないと確信していたから、奴はあの姿になり、実際にその力を制御してみせた」
ノイズとひとつになっても変わらないと信じられるほどの想い……。それは奇しくも、完全聖遺物とひとつになってなおカストディアンを求めるフィーネと同じ。
故にフィーネはその気持ちをなんと呼ぶか知っていた。その気持ちがどれほど尊く、強く、美しく、儚いものであるかを誰よりも理解できていた。なにせ、その想いは彼女が数千年にも亘って抱き続けていた――、
『フィーネッ!』
――恋心、なのだから。
≪古唄……!≫
再び古唄との対峙を果たしたフィーネは、ついにマザーギードゥラの姿を保てなくなったのか彼女本来の姿に戻ると、そのまま糸が切れ

たように膝を地についた。
　そんな彼女にすぐクリスが駆け寄ろうとしたが、あるこがそれを無言で制すると、全員ただ静かにゆっくりとフィーネに歩み寄る古唄を見守っていた。
『……フィーネ……』
「……古唄……」
　自分の名を呼ぶ声に、フィーネはまるで縋るように視線を上げると、自らを包む硬くて冷たい鎧の、柔らかくて温かい体温を感じた。
『こんなになるまで、止めてやれなくてすまなかった……。お前がこんなに追い詰められるよりも前に、ちょっとでもお前の気を楽にしてやる方法くらい、たくさん見つけてやれたはずなのに……』
「なぜ……なぜお前はそうまでして私にこだわる……。私の計画を止めるためか……？　月の破壊を止めるため、私の心を知るためにこんな真似までするのか……？」
『……最初は、そのつもりだった。でも……もうそんなこと関係ないんだ。俺はお前が……フィーネが好きだ。お前を幸せにしたい……俺がお前を笑顔にしたい。この気持ちが……きっと、恋だ』
　本当なら、こんな醜悪な姿で愛しい彼女を抱きしめたくなどなかった。こんな身体になってしまっていても、せめて人間として彼女を抱きしめたかった。
　だが、それはできない。ＦＤモードとなった古唄は、内包する全てのノイズ因子を枯渇させるまで元の姿に戻ることはできない。
　フィーネから戦意が失われた以上、これからノイズの発生率は著しく低下し、ノイズ因子を発散する機会も減るだろう。
　そう思っていた矢先のことだった。
「……ごめんなさい、古唄……」
『フィーネ……？』
　古唄の懐から離れたフィーネの肉体が金色の光に包まれ、再びその身に金色の鎧を纏い始めたのは。
　≪おかしいわね……。あなたの想いに応えることは、あのお方たちへの裏切りにも等しい……絶対にあってはならないことのはずなの

に、こんなにも清々しくいられるなんて……≫
『フィーネッ！』
≪私の肉体は既に完全聖遺物との融合を果たしてしまった……。もう私の意思では、内に宿る完全聖遺物の力を抑え込むことができないのだ……≫
再びマザーギードゥラの姿となり、その肉体を膨張させ始めたフィーネは、まるで何かを悔やむような悲鳴を上げながらその身を赤く染め上げた。
≪最期の願いだ……！　せめて私の終着は、他の誰でもないお前の手で……≫
『誰がッ！　誰がそんなことするものかッ!!　俺は諦めない！　俺の想いも、お前の命も、そしてこの世界の未来もッ!!　俺は何一つ諦めないッ！』
黙示録の赤き竜――絶対的な終焉の象徴。その力は、数々の戦場を切り抜けてきた翼・クリス・あるこの三人が共闘してもなお消耗戦を強いられるほどの圧倒的な理不尽。
デュランダルの持つ無限のエネルギーを威力に転じた攻撃力と、ソロモンの杖にて操られたノイズを鎧として纏った巨大で強靭な体躯に加え、ネフシュタンの鎧が持つ驚異的な高速再生能力。
ただひとつでも対処に困るほどの力を持つのに、それら全てを束ねて一体化した赤き竜に、いったいどれほどの抵抗ができるのか。
だがそんな中、古唄の耳に一人の少女の声が響いた。
「奴を喰えッ！　大地ッ!!」
あるこだ。この追い詰められた状況で、彼女はずっとフィーネの――否、赤き竜の対処法を考え続けていた。確かに三位一体となった赤き竜の力は脅威の一言。だがそれは三つの聖遺物がひとつになっているが故の脅威。即ち、聖遺物ひとつひとつの対処は困難ではあるが不可能ではない。
そして赤き竜にとって最大の強みであり弱点となるのは、あの巨大な体躯と強靭な肉体を形作っているノイズ――それを操るソロモンの杖だ。

「アッキヌフォートの特性は絶対必中！　今のままではノイズが邪魔で不可能だが、ノイズを喰らえるお前が奴の装甲を薄めれば、私がフィーネからソロモンの杖だけを狙い撃てる！」
「そうか……！　ノイズの鎧さえ除去できればアッキヌフォートの力で他の聖遺物を除去することも不可能ではない……！」
「けどノイズを喰う間はオヤジもあるこも無防備になっちまうッ！」
　赤き竜の巨体を崩す術を見出したあるこではあったが、それを可能とするためにはあまりにも危険が伴いすぎる。ノイズを喰うこととソロモンの除去に専念しなければならない古唄とあるこは自衛が不可能であり、街への被害を抑えるためクリスは赤き竜の頭部へ持続的な攻撃を行わなければならない。
　この面子の中では翼だけが自由に動けるのだが、彼女たち3人を同時に防ることなど、いかに防人とて容易なことではない。なぜなら彼女は防人であると同時に一振りの剣。
　何かを全力で守り貫くには――守ることだけを求め窮めたものが必要なのだ。
「だったらッ、わたしがみんなを守りますッ!!」
　大切な誰かを守るためだけに、ギアを纏うような人物が。

英雄となった者―あいぼう―

「だったらッ、わたしがみんなを守りますッ!!」
元気いっぱい、やる気満タン。まるで太陽のように明るいオレンジ色のギアがよりいっそう輝いているようにも錯覚するほどの快活さで、彼女は――立花響は立っていた。
「立花ッ!?」
「なんであいつがここにッ!?」
響を見た途端、翼とクリスが驚愕の声をあげる中、あるこだけはどこか哀れむような表情で古唄の背を見遣った。
彼女は響がこの場にいる理由を、ほとんど直感的に理解していたのだろう。響を守りたいという古唄の願いと、響にギアを纏わせまいとする古唄の行動の僅かな矛盾……そしてそれを響が気付いたことを。
「……ノイズギアにマスクがあってよかったじゃないか」
『……そうだな、蜂よけにはちょうどいい』
センチな気分になる暇もなく、赤き竜の頭部先端に赤紫色の光が収束。翼を一撃で沈めかけたあの一撃が街に向けて放たれようとしていた。

Δ　CUT　IN　CUT　OUT　Δ

だがそれを阻むように、無数のミサイルが赤き竜の頭部に直撃。
貫通力よりも衝撃を優先して放たれたその攻撃は一撃目の着弾で発生した爆発により複数のミサイルが誘爆、大規模な爆発となって相手の巨大な体躯をのけぞらせた。
「ちくしょうッ！　ちったぁ空気を読めねぇのかよッ!!　おいオヤジ！　あるこ！　やるんならさっさとやれッ！」
「雪音の護衛は私が引き受けるッ！　街のことは気にせず役目を果たせッ！」
翼とクリスの言葉に背を押され、古唄とあるこが視線を交わし合う。今しかない。今ここでやらなければ、街も、ミライも、大切な存

在も、そしてフィーネ自身も守ることはできない。
古唄は最後の力を振り絞り、再びビーストフォームになろうとするが、既に彼はそれを可能にするだけの力を残してはいなかった。
ＨｉｇｈＰｏｗｅｒＺＥＲＯ―ＭＥＧＡになれなければ、これだけの体格差を埋めることはできない。いかにノイズを喰らうことができても、獲物に対して口が小さすぎるのだ。これでは捕食速度が再生速度に追いつけない。
『ドナシュラーク！』
『Ｔｒｕｓｔ　ｍｅ』
だがそれが諦める理由にはならない。再生速度に対して捕食速度と捕食範囲が足りないのであれば、そもそもの体積が小さい部分から捕食していき、Ｈｉｇｈ Ｐｏｗｅｒ ＺＥＲＯ―ＭＥＧＡではない単純な体積増加を試みればいい。
ノイズ因子を取り込み、それを物質化させることで体積の増加が可能であることは、他ならぬ赤き竜の巨体が証明している。もっとも、エネルギー保存の法則に従って両者の保有ノイズ因子量が反比例するかといえば、それは半無限にノイズ因子を補給するソロモンの杖が否定するが。
「がんばってください、古唄さん！」
「私たち、ここで見てますから……逃げませんから！」
無言のまま背を向けてドナシュラークに跨った古唄は振り向くことなく赤き竜の身体を登ると、その翼に乗り上がって、そのまま勢いよく噛みついた。
これに悲鳴を上げるように、赤き竜の翼から放たれた小型ミサイルが古唄へと降り注ぐが、彼はこれに気を留めることもなく、捕食を続行。
「やらせないッ！」
だがそのミサイルが古唄に届くよりも遥かに早く、まるで何かに「押し出される」ようにして軌道を変え、虚空にて爆発。

あのミサイルの威力を知る翼とクリスとあるこは今の攻撃による古唄へのダメージに一瞬だけ気をとられ、あやうくチャージを許すところではあったが、これに気付いたクリスとあるこは同時に頭部を攻撃。

だんだんと晴れていく爆煙がようやく靄にもならないほど姿を消すと、その中から現れたのはアンチノイズバリアを応用して古唄を守るドナシュラークと、その横で今度は赤き竜の首元に食らいつく古唄だった。

『Ｗａｔｃｈ　ｏｕｔ！』（危ないじゃないですか）

「ご、ごめんドナ！」

怒り心頭のドナシュラークに響が半泣きで謝っているのは、先程のミサイルの爆発が両者にとって予想以上に大きかったからだろう。

実はさっきのミサイルが古唄に命中することなく軌道が逸れたのは、立花響のアームドギア――広域に及ぶドーム型の超巨大なバリアコーティングによる押し出し。

本来ノイズの位相を調律して接触を可能にするバリアコーティング機能を「戦わないためのアームドギア」と認識した響だからこそできるこのバリアの波は、古唄や赤き竜のように膨大なノイズ因子を溜めこんだものまでは弾くことができない。

だが、だからこそ響は躊躇なくこのバリアを使った。このバリアなら、古唄をすり抜けて周囲の攻撃だけを弾くことが可能だからだ。しかし以前の戦いでこれを使うことができたのは、古唄によるブーストを受けたからこそ――即ち偶然の産物にすぎない。

ではなぜ、今回これを確実なものとすることができたのか。それは彼女の隣に寄り添い、手を繋ぎ合うもう一人の少女――小日向未来の存在あればこそだ。

「今のは……立花がやったのか？」

「らしいな。とても信じられんが……アームドギアを使った様子が見られないあたり、バリアコーティング機能の被膜範囲を拡大し、巨大なバリアとして転用したと見える」

無論、あのミサイルを押し出すほどのバリアを瞬時に展開するとな

れば、そのバリアが持つノイズへの毒性も高まるが、古唄ほどの膨大なノイズ因子の保有者であれば、ガワを僅かに削られる程度で済む。

まして今の古唄は無限に増殖する「食糧」を無尽蔵に喰い散らかしている真っ最中だ、その程度のことは「凄まじい違和感が身体を通過した」程度にしか思っていないだろう。

『悪い、ドナシュラーク。降りてくれ。いくらデカい翼といっても、さすがに二人で乗るには狭すぎる。それに、お前と響が二重でバリアを張れば少なくとも響と未来の安全は確実だ。そうなれば俺も存分に戦える』

捕食を中断してドナシュラークに振り返った古唄は、地上にいる響と未来を一瞥すると、ドナシュラークに彼女たちの護衛を命令した。

それにはおそらく、この狭い足場で古唄を庇っているドナシュラークが、万一にも落下して大破することがないよう、ここから逃がす意味も込められているのだと、ドナシュラーク自体も理解していた。

『……Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ（了解しました）』

どこか不満気味な様子は察するまでもなく感じられたが、ドナシュラークは古唄の言う通り、赤き竜の胴体を沿いながら地上に降り、古唄はようやくその身体に溜めこんだノイズ因子を体積に転化させた。

「またデカくなりやがった！」

「だがまだ１０メートル前後……このデカブツを喰うにはおちょぼ口だ！」

しかしそれでもまだサイズが足りない。全長ではＨｉｇｈＰｏｗｅｒＺＥＲＯ―ＭＥＧＡにも匹敵する赤き竜を、再生速度以上の捕食範囲・捕食速度で喰らうには、たった１０メートル程度では話にならない。

が、それでも古唄はこれを悪く捉えてはいなかった。たとえ少しずつでも体積を増やしていけば、それに比例して捕食範囲も拡がってゆく。喰えば喰うほど巨大化するということが確実とわかった以上、古唄はそのまま赤き竜の片翼の付け根を喰い千切り、落下しながらその翼を喰い尽くした。

≪――――≫

（既に言葉を紡ぐことすら叶わないほど侵食され始めているのか……。そうのんびりしていられなさそうだ……）

片翼をもがれた赤き竜は古唄を睨むように体をよじると、まるで怒りの慟哭を発するかのように赤紫色の光を収束し、彼へと放った。

咄嗟に響がバリアを張って古唄をかばおうとするが、間に合わない。隣に立つ未来が、悲鳴のように古唄の名を呼んだ。

その、僅か一瞬の出来事だ。

『I'll never let him die!!』

『ッ!?』

一筋の稲妻が、彼の体を突き飛ばして巨大な閃光に呑み込まれたのは――。

『ド……ドナシュラアアアアアアクッ!!』

赤い瞳の古唄―つどいしねがい―

『I'll never let him die!!』

『ッ!? ド……ドナシュラアアアアアアクッ!!』

古唄を庇い、赤き竜の放ったレーザーに呑み込まれたドナシュラーク。

咄嗟にアンチノイズバリアを張ったように見られたが赤き竜の一撃は重く、一瞬の拮抗もなくドナシュラークのカウルを熔解。

各部フレームも見事にひしゃげ、タンクに注がれたハイオクにレーザーが引火、大爆発を起こした。

『ドナシュラークッ!』

「行くな大地ッ!」

既にバイクと呼ぶことも躊躇われるほど原型を留めていないドナシュラークに駆け寄ろうとする古唄を、翼が止めた。

素人目に見ても、既にドナシュラークは大破している。フィーネを救うにも街を救うにも一刻を争う今、既に助からないとわかっている者のために割ける時間は無い。

誰よりも冷静に戦うことを最大の強みとする古唄は、当然それを理解していた。しかし――理解できていても納得できないことがこの世にはある。

ドナシュラーク――ＺＺＲ１４００は、古唄が大型自動二輪の免許をとって以来、ずっと跨り続けてきた己の半身とも言える相棒だ。

まだ普通二輪の免許しか持っていなかった頃……いや、それよりもずっと前、彼がまだ親殺しと呼ばれ嘲笑と侮蔑を向けられていたころ、それらを振り払ってくれたのが、ある雑誌に載っていたＺＺＲというバイクの魅力だった。

派手な外見。特徴的なヘッドライト。大型二輪特有の重量感と威圧感をストレートに表したフルカウル。まだバイクというものに詳しくなかった彼に、ＺＺＲは大型バイクだけが持つ独特の雰囲気を叩きこんだ。

古唄にとってＺＺＲというバイクは周囲の様々なしがらみを忘れ

させてくれた恩人であると同時に、少年時代から変わらず憧れ、ライダーとなった今も自分がそれに跨っていることを誇れる特別な存在――「だった」のだ。

絶対に生み出してはならなかったはずの英雄（ぎせいしゃ）。たとえ自分を投げ出してでも生み出さないと誓ったはずのもの。

なのに、願い叶わず生み出された英雄（ぎせいしゃ）は皮肉にも、彼が最も愛し、信頼していた最高の相棒（ベストフレンド）。

古唄の理性は――崩れた。

『ウ、うゥ……ッ！　ゥうウぅゥオおオォぁぁアあァぁぁぁアッ!!』

慟哭にも似た雄叫びと共に、ノイズギアのコントロールバイザーが変色。アメジストのような黒紫色だったそれは、一瞬にして血のように赤く染まり上がった。

誰の目にもわかる明らかな暴走。しかし、どこかおかしい。ドナシュラークを破壊された怒りから、すぐにでも赤き竜に取ってかかると思われた暴走古唄だったが、どういうわけかその場を動こうとしない。

「暴走してなお、フィーネへの攻撃を躊躇しているのか……？」

「理性で、というわけではなさそうだ。おそらく本能的にあれが櫻井女史であり、攻撃してはならない存在だと直感しているのだろう」

本能――即ち人間の根底にある抑えがたい衝動。その性質は自己防衛の根源であり、究極のエゴが形作るものだ。

しかし、極めて理性的な人間が暴力的になる時、この本能の性質が逆転――他者を防衛するためならば自己の全てを破壊し尽くすことも厭わない状態になることがある。

それこそ『本能的な他者の防衛』――極めて英雄的（じこぎせいてき）な破壊衝動である。

『ウぉオぉァあァぁぁァあああァぁッ!!』

戦鬼となった古唄の絶叫と同時に、周囲の景色が暗転。これを直感的に危険と判断した赤き竜はすぐさま古唄に向かってレーザーを発射した。

今度は間に合う。そう判断した響は再びバリアを拡大するが、それ

を感知した古唄は何を思ったかレーザーへ突進、無防備なまま直撃を許してしまう。
「オヤジッ!?　バカ野郎！　何をトチ狂ってやがるッ！」
　既に注意が古唄に向いていることが明らかな今、街の防衛を担当するクリスの防衛優先順位は古唄にシフト。慌てながらも赤き竜への注意は保ちつつ、彼の元へと駆け出す。
　が、自分へと近付くクリスを見た古唄はまたしてもそれから逃げるように赤き竜へと突進。二度目の直撃を受けるものの、なぜかその身にダメージは見受けられない。
　いったい彼の身に何が起きているのか。誰もがその疑問を抱いていると、古唄を見守っていた未来がふと何かに気付いたように声を上げた。
「響！　バリアを解いて！」
「！」
　響のバリアを挟んでなお状況が拮抗している今、そのバリアを解けという未来の言葉は、その場の誰もが愚策だと思ったことだろう。
　しかしそんな未来の言葉に対し、響は脊髄反射的にバリアを解除、古唄を防いでいた拡張バリアコーティングというシャッターが失われたことで、彼の体は赤紫色の極太レーザーに呑み込まれたかに思えた。
『ウオおぉオおォぁアあぁァぁあぁぁアぁぁァぁッ!!』
　しかし、彼女たちが目にしたのはその身を塵と変えた黒鎧巨兵ではなく、まるで無限のエネルギーを蓄える人型ブラックホールと化したかのように、赤き竜のレーザーを呑み込み巨大化した彼の姿だった。
「巨大化!?　どうしてッ!?」
「やっぱり……。あのレーザーは二種類の力をミックスしてたんだ……！」
　困惑する響に反し、未来はまるでこうなることをわかっていたかのように納得の表情を見せていた。
　そんな彼女に、翼とあるこもまた「なるほど」とこの状況を理解したが、そうでない響とクリスは彼女に説明を求める。

「二種類の力……？　ってぇか、それとアイツが巨大化してることとどう繋がんだ！」
「どう繋がるも何も、直線直結だよ。聖遺物由来の力を天敵としてる古唄さんが、聖遺物由来の力を含む二種類の力を元にした攻撃に拮抗してるなら、もうひとつはノイズ由来の力しかない」
　未来から得られたヒントを元に、もう一度すこしだけ前の言葉を思い出す。古唄が巨大化する直前、彼女が響に何をさせたのかを。
「そっか……！　聖遺物とノイズの力がまぜこぜになってて、わたしのバリア込みで拮抗できるなら……」
「ノイズを弾く拡張バリアコーティングを解除すれば、吸収できるノイズ因子が増加し、回復するノイズ因子が消耗するノイズ因子の量を上回る、か……。大した観察眼だ」
「デュランダルとソロモンの二つを主砲に織り込んだが故の僅かな死角を衝いたとすれば、いい判断だ。あの巨体を維持するために、ソロモンの杖を自分から剥がすようなことはないだろうからな」

　ビーストフォームほどでないにせよ、赤き竜の首根を食い千切るには十分な巨体となった古唄は、雄叫びを上げながらクラッシャーを開き、その鋭い牙で赤き竜へと喰らいついた。
≪――――！≫
　悲鳴を上げる赤き竜。しかし古唄はそんな悲鳴には目もくれず、その両翼を引き裂き、喉にあるシャッターを強引に開く。
　するとそこには意識を失い赤き竜の肉体に取り込まれたフィーネが磔にされていた。
『……ウぅウォぉオおおォおォぁアぁあアぁァッ!!』
　それを見た古唄はフィーネもろとも赤き竜の喉に喰らいつき、クリスたちに向けてフィーネを吐き出した。
「うぉわっ!?　っとと……危ねぇな！　もっと優しく投げるとかできねえのかッ！」
『グルルルル……』

「お、おう……」
　咄嗟にクリスが受け止めたものの、クラッシャーから吐き出されたということは約４０メートルの高さから生身で落下するということであり、すぐにクリスから非難が飛ぶものの、古唄は「そんな余裕はない」というように唸った。
　念の為あるこがフィーネの安否を確認するが、意識がないだけで呼吸はあり、脈拍も安定。何も纏っていないので体温の低下が心配される。まして彼女は３種類の完全聖遺物に浸かりきっていた。緊急時の安否確認だけではなく、聖遺物の影響も調べなければならない。
「おい、お前！」
「えっ？　わ、わたし!?」
　そんな中で、突然クリスが響に近づき、フィーネを彼女に預けてこう言った。
「ああ。お前のギアは防御にＳＰ全振りしてるようなもんだろ。しばらくフィーネを頼む。傷ひとつでも付けさせんじゃねえぞ」
「頼むって……まさか！」
「あのバケモノは３種類の完全聖遺物を融合して出来あがった悪夢の産物だ……。そしてその中の１つは、あたしが目覚めさせちまったソロモンが混ざってる。あれは……あれだけは、アタシが始末をつけなきゃならねぇ！」
　アームドギアを構えたクリスが、響と未来に背を向けながら伝えるもの――自分が自分だからやらなきゃいけないこと。
　そこには彼女が装者だから背負う覚悟ではなく、自分が『雪音クリス』だからやらなければならないこと、やり抜きたいと願う想いがあった。
「フィーネの自業自得ってのはわかってる。けどあいつを形作っているものの１つはアタシの不始末で、あいつは最後の最後でオヤジを信じようとしたフィーネを呑み込んだ！　アタシにゃそいつが我慢ならねェッ！」
　怒り――人類が誕生して以来、様々な進化の過程で形成と喪失を繰り返しながらも、まったく形を変えることなく受け継がれてきた最も

原始的な感情。
そんな極めて純粋な怒りの感情を爆発させた今、雪音クリスは「歴戦の古兵」から「一騎当千の戦士」へと姿を変えた。
≪――――！≫
フィーネという制御装置を喪った今、あの三種の完全聖遺物の融合体は「黙示録の赤き竜」と呼ぶに相応しくない暴虐の権化へと成り果てた。
このまま放っておけば近隣の市街地はおろか、天上に昇る月を穿ちこの星そのものを破滅へと導くだろう。
だが、それを何もせず良しとする者など、この場には誰一人としていなかった。
フィーネを引き剥がした今、古唄の中には黙示録の赤き竜に対する躊躇などまるでない。これまでどんな相手にも常に『躊躇』を抱いたまま戦い続けていた彼にとって、こんな暴走じみた行いはただの暴力でしかなかったが、そんなことは些細な問題だった。
頭部から無遠慮に齧りついて強引に頭部をもぎ取ると、首の付け根部分に銀色の何かが露出しているのがあるこの目に入った。
「まずは1つだッ！」

Ψ　ＰＨＯＴＯＮ　ＳＴＲＥＡＭ／ＣＡＮＯＰＵＳ　Ψ

絶対必中（アッキヌフォート）の弓より放たれた一撃は、まるで流星のように桜色の閃きを描きながら「それ」――ソロモンの杖へと直撃。破壊には至らないまでも、その衝撃によって赤き竜から切り離された。
しかし、あるこも元よりソロモンを破壊するつもりなどさらさらなかった。

Ｘ　影縫い　Ｘ

ソロモンの杖が相手の元を離れると同時に翼の放った天ノ逆鱗が赤き竜の影を捉え、その動きを封じる。

「クリスちゃん！　あれをこっちにッ！」
「わかってるッ！」

Δ　ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ　Δ

赤き竜の元を離れたそれ――ソロモンの杖は、人のみを殺戮する災厄『ノイズ』を支配し制御する忌まわしき杖であると同時に、人を守るノイズ『大地古唄』の暴走を抑え、制御し、彼を支援できる唯一無二の聖遺物である。
凶悪なほどの力を持つが故に、その力のほとんど制御のために使われていた古唄にとって、その制御を外部の誰かに任せられるということは、束縛という名の強化支援を受けることに等しい。
「受け取れぇッ!!」
ガトリングによる連射攻撃を止めることなく、ひと跳びで赤き竜の後ろへ回り込んだクリスは、その砲身でソロモンを響たちの方へと殴り飛ばす。
「クリスちゃんナイスッ！」
空中で回転しながら近づくそれを響がキャッチすると、彼女はそれを未来に渡し、バリアコーティング範囲を拡張。
これを危険と判断した赤き竜は、既にソロモンを失ったことで純粋な聖遺物の力によるレーザービームを二人に向けて発射。
「この風鳴翼の目の前で奏が守り抜いた者に手をかけようなど、愚の骨頂ッ！」
しかし、それを防人――風鳴翼が阻んだ。
「未来ッ！」
「うんっ！」
強き力に善悪は無い。人を殺めるために造られたこのソロモンの杖も、今は――！
「お願いッ……古唄さぁぁぁんっ!!」
あるこが、翼が、クリスが、響が、未来が――そして彼女たちを支えた多くの人々の想いが、明日（みらい）へと続く光差す道となる。

『ゲッ……トォン……！』

かつて暴虐の化身として振るったＨｉｇｈＰｏｗｅｒＺＥＲＯ（ハイパー）―ＭＥＧＡの力。

しかし今の彼は違った。その背の向こうにあるものを守るように凛然として立つ彼の姿は決して「巨大な災厄（ノイズ）」などではなく、愛する者たちのために必死になれる『人間』だったのだ。

「古唄さんのバイザーが……変わった……？」

「全身あんなに真っ黒なのに、あそこだけ太陽みたいな赤色になってる……」

――清らかなる戦士、心の力を極めて戦い邪悪を葬りし時、汝自らの邪悪を除きて、究極の闇を消し去らん。

終わりへ向かえ―ゼット・オン―

『ゲッ……トォン……！』

ＨｉｇｈＰｏｗｅｒＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ。

全てを破滅へと導く唯一にして無二の邪神でありながら、いざ対峙すれば百の魔獣を敵に回しているかのような絶望感と威圧感を放つ王者。

あらゆるものを壊すことでしか存在証明を為さないのではないかという圧倒的な存在感を持つ彼は今、その身に宿る無双の邪神と百魔獣の王を統べながら、黙示録の赤き竜と対峙していた。

≪――――！≫

先手を打ったのは、理性を失い暴走した赤き竜。既に己が力を御する術すら理解できないまま持て余す暴力のみを振るう存在となり、あの翼を一撃で追い詰めた凶悪なレーザーも脅威ではない。

ソロモンを失ったレーザーは純粋な聖遺物の力を由来とするものだが、真の意味で「完全制御」が可能になった古唄に、それが届くことはなかった。

体表のノイズ因子を硬化し、その外皮をすり抜けるように位相を逸れることでノイズ因子の外殻を空蝉として利用し、聖遺物とノイズ因子の衝突による炭素転換を煙幕として利用。

ディメンションシフトによって位相がズレていることで視覚的にしかその存在を察知できないことを利用して背後に回ると、再び位相をこちらに戻しノイズ因子を燃焼させた火球を赤き竜にぶつけた。

（これがビーストフォームの真の力か……。未来が制御してくれていなければと考えると、背筋が寒くなるな……）

相手が聖遺物である以上、ディメンションシフトは奇襲にしか使えない。しかしそれでもいい、古唄の放った火球は赤き竜を一撃で葬るには足りなかったが、その体積を大幅に削ることに成功した。

ノイズ因子の供給が無くなった以上、赤き竜は肉体の損傷を修復することはできても、修復前の体積を維持することができない。レーザーの直撃を避けながら、装者たちに被害が出ない程度の熱量で攻撃

を続ければ勝機はある。
　まして、ノイズ由来の攻撃に対して高い防御力を誇る響の拡張バリアコーティングが彼女たちを守ってくれている。ならば、多少の火の粉くらいは気に留めず戦える。
≪――――――≫
（またレーザーか。学習能力の無――ッ!?）
　しかし、全ての攻撃を避けるために動き回ったことが災いとなった。
　赤き竜が再びレーザーをチャージし始めたのを見た古唄がそれを避けようとした瞬間、彼は咄嗟に自分がどこにいるのかを理解し、回避が不可能となってしまったのだ。
「どうしたの古唄さんッ!?　早く避けてッ！」
「ダメだ！　あいつの後ろを見ろ!!」
　すぐさま古唄は自らの周囲に多角型全方位バリア『ハイパーゼロメガバリヤー』を展開するものの、ノイズ因子を由来とするこれでは聖遺物に対し付け焼刃ほどの力すら発揮されない。
　古唄≒ノイズという事実を正しく受け止める響は、その場を動かず防御態勢に入った彼に対しすぐさま避けるよう声を張り上げるが、彼がそうしない理由を即座に理解したクリスは、そんな響に彼の守ろうとしているものを伝えた。
「街――ッ!?」
「あれを避ければ、街……いや、シェルターに逃げ込んだ全ての市民を見殺しにすることになる。それをわかっていて、大地があれを避けられるはずがない……！」
　そう、彼の背の向こうにあったのは街。そしてこの街に住み、今もシェルターで怯えながら身を寄せ合っている大勢の命。
　響や未来を支えてくれた友達。街に来て最初に入ったお好み焼き屋のおばちゃん。何度か寄るうちに一言二言交わすようになったガソリンスタンドのアルバイト。この街のいろんな人が古唄や古唄の大切な人たちを支え続けてくれた。
　まして、彼のすぐ傍にはかつて『ノイズ』になりかけていた自分を

『ヒト』の道に正してくれた立花響がいて、いつも彼女の言葉に励まされ頼りきりだった古唄が、今度は彼女に頼られている。ならば退かない――退けない！

『ゼッ……トオオオン……!!』

Z―ON（終わりへ向かえ）。そんな彼の雄叫びは、決してこの世界の終焉を仄めかすものではなく……この絶望に満ちた現状をZへと向かわせてくれ、という優しくも儚い願いが込められた咆哮だった。

≪――――!!≫

解き放たれた魔祓いの聖砲は、街と人の命を守るために己を盾とした古唄に直撃。

ハイパーゼロメガバリヤーはその役目を果たす様子も見せずやすやすと破壊され、無言のままそびえたつ黒い鎧の胴には巨大な穴が開いていた。

『……ゲ……ッ……』

ゆらり、ゆらり、と風に吹かれるように力なく体を揺らし、糸が切れたマリオネットのように倒れる古唄。

空を見上げる彼は、もう指ひとつ動かす力もないのか、静かに輝きを失っていく全身の発光体だけが彼の『終わり』を少女たちに教えた。

『……トオ……ン……』

ピロロロロ……という無機質な音を伴ったその声は、最後の最後――ヒトとしての言葉を失いながらもヒトを守るためヒトであり続けた彼らしい、静かな幕引きの合図にも聞こえた。

「あ……ぁ……！　古唄、さん……！」

「そんな……っ！　こんな、ことって……！」

大地古唄。ある事情から父親という存在が少し遠のいてしまっている響にとって、古唄は血こそ繋がっていなくても、絆によって強く繋がり合っている『もう一人のお父さん』であった。

それは、親元を離れて久しい未来にとっても同じこと。口数は少なく態度も無愛想ではあるが、親友である響をとても大事にしながら自

分のことも大切に扱ってくれる古唄は、友人たちにも少し自慢できる素敵な父だった。
　そんな彼を目の前で喪った響と未来の心的ダメージの甚大さは誰から見ても明らかで――しかし彼の願いを確かに聞いていた戦姫たちは、その手の力を地に置くことなどできなかった。
「てんッ……めえええッ!!」

Δ　ＭＥＧＡ　ＤＥＡＴＨ　ＰＡＲＴＹ　Δ
Δ　ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ　Δ

　怒号と共に腰に展開されたミサイルポットから小型ミサイルを放ったクリスは、続けざまにガトリングにて頭部を集中的に攻撃、相手の上体を逸らす。
　そしてクリスはあるこにバトンを任せて後方に下がると、呆然と膝をつきながらもなんとかギアを纏っている響に声をかけた。
「呆けてんじゃねえッ！　お前はオヤジがさんざギアを纏うなって言ったのにギア纏ってここに来たんだろ！　戦わないなら戦わないでも構わねぇ！　でも何もしねえくらいなら最初からギアなんて纏うんじゃねえッ!!」
「……」
「お前はその子を守る為にギア纏ってんだろ……ならアタシらがあいつをブッ潰すまで諦めんな！　その子を守り切るまでギアを解くな！　オヤジなら守りたいものを守り切るまでギアを解かない！　今だってそうだッ!!」
「――――！」
　クリスの言葉に、響ははっとしながら彼女の向こうに倒れる黒い巨人に目を遣った。
　そこにいるのは、既に戦う力を失いながらも『ノイズギア』を纏ったままで居続ける古唄――力尽きてなお守りたいものを守り続けている夢を見ているのか、彼はそのギアを解くことなく眠っていた。
『……』

そんな彼の姿を見て、響と未来は何かを感じ、互いに視線を交わし合う。
「……わかったよ。お父さんがやれって言うなら……。お父さんが、本当にやりたいことなんだよね」
『……』
「……未来、いくよ……」
「……うん！」

Φφ　――――　φΦ

響のギアから放たれる心臓の脈動にも似たイントロミュージックがこの戦場に――そしてこの街に響き渡る。
（古唄さんが守った街があるッ！　古唄さんが守った人がいるッ！　そして今――わたしたちは古唄さんに守られてここにいるッ!!　なら、唄うしかない……大切な陽だまりを守るために、わたしはここに立ってるんだッッ!!）

φ　今　この手が　望み掴んだものは　φ
Φ　未来とどくような　陽だまり満ちた世界　Φ

「この唄――立花と小日向か？」
「全装者の出力増強およびバリアコーティングの強化……これが彼女たちの力か」

φ　瞳とじて　祈り続けてるのは　φ
Φ　「未来へできること　おしえてほしいよ」　Φ

翼とあるこは互いに目配せをし合うと、あるこのライフルの先端部が突出してが刺突式突撃銃に形状を変化。
ブースターを噴かして空高く跳び上がると、銃弾の雨を振らせながら赤き竜の脳天へと降下し、ライフルを突き立てる。

Ψ　ＢＵＬＬＥＴ　ＲＡＩＮ／ＣＵＲＴＡＩＮ　ＦＡＬＬ　Ψ
Ψ　ＢＵＬＬＥＴ　ＰＡＲＴＹ／ＳＨＯＷ　ＤＯＷＮ　Ψ

突き刺さったライフルをそのままに、苦しみ悶える赤き竜に追い打ちのグレネードカノンを放ったあるこは、爆発の勢いを借りてその場を後退。

φ　心　浮かんだ気持ちを　使命で隠さずに　φ
Φ　灼熱のハートで　さぁ　行こう　光の先へと　Φ

すると寸分の隙を与えず、三日月に似た青い刃が赤き竜の翼を刈り落とし、天からは無数の短剣と巨大な剣が風鳴翼と共に降りかかる。

無論、赤き竜はこれに抵抗しようと追尾式小型ミサイルを発射するが、それが翼に届くよりも早く、大量の赤い矢によって阻まれた。

Ｘ　蒼ノ一閃　Ｘ
Ｘ　千ノ落涙　Ｘ
Ｘ　天ノ逆鱗　Ｘ
Δ　ＱＵＥＥＮ’ｓ　ＩＮＦＥＲＮＯ　Δ

（まだだ！　まだ死んでない……！　わたしと未来がここにいる限り、古唄さんの鼓動は死なないッ!!）
（お願いソロモン……！　私たちの言葉を古唄さんに届けて……!!）

相手の攻撃をどれだけ凌げるかなどという保守的な防御はもういらない。今の彼女たちに必要なのは、1秒でも早くこの街の平和を取り戻し、この街に住む人たちに安寧を与えること。

ならばこそ、今こうして対峙する赤き竜を少しでも早く討ち斃すべく、翼たちの攻撃を全て確実に通させなければいけない。

響は、バリアコーティングの反射ベクトルを反転、この場で発生する攻撃を外部に漏らさないよう覆うと、ソロモンの力で古唄を再び蘇らせようとする未来を守るように立った。

（わたしたちのすべきことは、翼さんやクリスちゃんたちと一緒に戦

うことじゃない……。一生懸命に戦ってるみんながもっともっと全力になれるように、戦いとは関係のない人たちを絶対、確実、なにがなんでも１０００％、一切の例外なくキッチリと守り抜くこと！）

Φφ　絶対　諦めはしない　求める願い　あるのなら　φΦ
Φ　胸の唄と　Φ
φ　胸の想い　φ
Φφ　叫び合えばずっと――！　φΦ

「既に体積は元々の１／３以下だが、さすがに修復が早すぎてキリがないな……！」
「まったくだ。しつけぇにも程があるッ！」
クリスとあるこは共に愚痴りながら弾幕を張り翼を支援するものの、同じ弓型の聖遺物ではあれど対多数殲滅型のイチイバルと対単体狙撃型のアッキヌフォートでは基礎スペックもコンセプトも違う。
赤き竜はその体積ゆえに攻撃面積の広いイチイバルが有効だと思われていたが、たび重なる損傷と修復の繰り返しで体組織を散らし続けた赤き竜は既に「巨体」とは言えないほどにスケールダウン、アッキヌフォートの得意領域に入り込んできた。
そのため互いのギアの特性を理解し合うクリスとあるこはその役割を交代。これまで近・中距離を得意としていたあるこが前衛に出ていたが、今度は持続的な連続攻撃が可能なクリスが前に出て赤き竜の装甲を削り、残る２つの聖遺物が露出した瞬間をあるこが狙えるようポジションを変更した。

Φφ　Ｃａｌｌ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ!!　呼び続けたのは　φΦ
Φφ　Ｄｅａｒ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ!!　大好きな名前さ　φΦ
Φ　キミと繋がるために　この絆は　光り輝くのだろう　Φ

「雪音！　奴の動きは私が封じる！　大きいのを構えておけッ！」
「ハッ！　おあつらえ向きな仕事をありがとよ！　デカいのなら任せ

ときなッ!!」
ここが攻め時だと判断した翼はすぐさま両脚のブレードを展開。その身を逆さにし、駒のように回転しながら赤き竜へと突撃。

Ｘ　逆羅刹　Ｘ
Ｘ　千ノ落涙　Ｘ

ガリガリと削るように表皮の装甲を刻む翼に赤き竜の追尾式小型ミサイルが迫るも、彼女はこれをギリギリまで引き寄せて回避、爆発の余波を利用しながら天高く跳び、再び無数の短剣を展開すると、それを赤き竜の頭部に一点集束。
その内の何本かをわざと逸らして対象の影を地面に縫い合わせると、赤き竜そのものを盾とすべく、その陰に隠れながらクリスに合図を出す。

Φφ　貴方ト云ウ　音響キ　未来マデ　φΦ
φ　永遠に――　φ

「未だ！　雪音ッ！」
「これで――決まりだぁぁぁッ!!」

Δ　ＭＥＧＡ　ＤＥＡＴＨ　ＱＵＡＲＴＥＴ　Δ
Φφ　Ｈｏｌｄｉｎｇ　Ｎｅｘｕｓ!!　φΦ

雪音クリス最大の大技、ＭＥＧＡ　ＤＥＡＴＨ　ＱＵＡＲＴＥＴ。ガトリングと小型ミサイルに加え、大型ノイズすら一撃で葬る４基の大型ミサイルを同時に放つ大火力を叩きこまれた赤き竜は、今度こそその外皮を剥がされ、デュランダルとそれ覆うようにして浮かぶネフシュタンが露出した。
「あるこッ！」
「佳澄ッ！」

Ψ　ＰＨＯＴＯＮ　ＳＴＲＥＡＭ／ＣＡＮＯＰＵＳ　Ψ

今だ、と二人が声を発するよりも早く逆った桜色の光。
それはデュランダルに絡みついた連鎖光鞭を撃ち抜くと、その剣身を逸れてネフシュタンの装甲に直撃し、それを吹き飛ばした。
「合図など言われるまでもない。ずっとこの機を待っていたのだからな」
片膝を地についていたあるこは安堵の息を洩らしながら立ちあがると、少しだけ晴れやかな表情でクリスに近づき、彼女に声をかけた。
「あの少女たちにお前があんなことを言うとは……随分とお節介になったらしいな？」
「……そりゃ間違いなくオヤジとお前のせいだ」

Ｌｅｔ ｔｈｅ ｇｏｏｄ ｔｉｍｅｓ ａｌｌ―
フィーネ―

フィーネの暴走から一ヶ月。ようやく街の復旧もひと段落し、人々もその平和を取り戻し始めた頃。

二課および米国政府の一部の働きにより「地上からの追放」という処分が下された彼女は、二課から古唄の身柄と３つの完全聖遺物を預かると、先史文明期時代の星間航行船型巨大遺跡『フロンティア』を新天地として地上を離れ、月と地球の間に留まりながら地上への不干渉を認めた。

また、例外としてノイズに関する事件が起きた際、二課または各国政府の要請には無条件に従うことも条件づけられたが、彼女はそれに対しても素直に許諾。３つの聖遺物は彼女の手で加工され、デュランダルとソロモンの杖を元にしたギアならざる聖遺物をそれぞれ響と未来に与えた。

立花響の肉体に深く浸食したガングニールは、後にその範囲を拡大させていく危険性を孕んでいたためにフロンティア浮上の際に必要となった神獣鏡（シェンショウジン）の力を流用して除去。

自分の後釜となる転生個体『レセプターチルドレン』たちは一時的にフロンティアで保護し、二課に里親探しを頼みながら、永く『転生個体』として与え続けた恐怖を拭うべく甲斐甲斐しく世話を焼いている。

今のところ、４人のレセプターチルドレンたちが彼女の元を離れ里親に連れられていった。

◆

『――で、なんであんたは１ヶ月も毎日毎日こっちに連絡よこすんだよっ！　追放された意味ねぇじゃねえか！』

「あら、なぁにクリス。ずいぶんとツレないこと言うじゃない。朝食

はちゃんととったのかしら？　或いはもしかしてどこか悪いの？
それともアノ日？」
『不敵なツラしてニヤニヤしてても親馬鹿なとこ隠し切れてねえから』
フィーネが地上を離れて以来――いや、それ以前からその素質や兆候はあったのかもしれないが、彼女は見事に親馬鹿と化していた。
古唄のフィジカルチェックと聖遺物の加工、さらにレセプターチルドレンたちの世話などにも精を出しつつも、彼女はその合間を縫ってクリスとあるこに連絡を入れ、キュートな愛娘へのパッションをクールに抑えながら愛でて愛でて愛で抜いていた。
どちらかといえば少し大人びてしっかり者なあるこに対しては「ちょっと心配」くらいなのだが、クリスに対しては少し声のトーンが落ちているだけでイジメを疑うくらいには溺愛している模様。当のクリスからは「キャラ崩壊」と評されていた。
『はぁ……。それよりそっちこそどうなんだよ、オヤジの様子は』
「古唄の？　彼ならもう平気よ。ＦＤモードのせいでギア纏ったままだけど、死にはしないわね。ノイズ因子の７０％はごっそりやられてたけど……そのくらいじゃ古唄は死なないわよ」
『何度聞いてもノイズ因子ってインチキだと思う』
一ヶ月前の戦いで赤き竜のレーザーに直撃し、腹に巨大な穴を開けられた古唄だが、実は彼は死んでいなかった。というか、そもそもノイズギアを纏っている彼に『死』という概念は存在しないのである。
ノイズギアとは『鎧型の肉体』であって『肉体を覆う鎧』ではない。ノイズ因子の密度が濃くなったことによって鎧のように硬質化した彼の皮膚が鎧のように見えることから『ギア』と名付けられただけで、その肉体は純度１００％ノイズ因子の結晶である。
故にノイズギアを纏う彼の体には脳や心臓を含むあらゆる臓器が存在せず、腹に風穴が開こうと首から上がすっ飛ぼうと、ノイズ因子に彼の遺伝子が残る限り、全体の１％以下からでも再生するのである。時間はかかるが。
「数千年も独りぼっちやってきたのよ？　さすがに少しくらい、私の

愚痴を延々聞いてくれるお人よしが欲しくなったりもするわよ」
『……まさか、あんた最初からそのつもりでオヤジをノイズに？』
「それこそまさか。誰もがみんな私を高く評価するけれど、いくらなんでも初対面の相手のことを即座に『愚痴の相手』と判断できるほど、私は観察眼に優れてはいないわ」
クスクス、と笑うフィーネに対し、クリスはただ「そうかよ」とだけ返すと、少しだけ口元を緩ませて柔らかそうな声色でこう告げた。
『よかったよ……オヤジが生きててくれて。あいつなら、フィーネのことも絶対に大事にしてくれる。今はまだ寝たっきりだけどよ』
「……そうね、彼には感謝してるわ。彼が彼でなければ……彼がクリスや立花響、そして私にアクセスしてくれなければ、私は未だにカストディアンの幻影を追い続けていたかもしれない……」
どこかさびしげなフィーネの目を見て、クリスはこれまでの鬱憤を晴らすべく一言――特大の爆弾を放り投げると、返事を待たずそのまま通信を切った。
『……近い内にアタシに妹が出来てたりしてな』
「……。……ッ!?」
一瞬のフリーズから再起動した時には既に遅く、「通信切断」の文字だけが映されたパネルウィンドウがそこに残されていた。
「……あの子、最近ちょっとマセてきたんじゃないかしら……」
もしかして好きな男子でもできたのだろうか、と邪推して自己嫌悪に陥るも、そんな暇すら与えるものかとレセプターチルドレンの少女たちがフィーネを呼びにきた。
「フィーネちょっと来てっ！　キッチンが大惨事デースッ！」
「爆発……すごかった……」
「うううろろうろたえるなっ！」
長年の施設暮らしで教養がまだ不十分なせいか、まともに軽食も作れないような子供たちがなぜ勝手にキッチンを使ったのかとフィーネは頭を抱えたが、三人の少女のうち一番の年長である２０代前後の

女性が一番うろたえていたので追求するのはやめた。
　おそらく彼女たちだけでなく他にも何人か料理参加者がいるのだろう。怒られるのが怖くて来なかったのか、それとも今まさに片付けという名の証拠隠滅を図っているのかは不明だが、どちらにせよ素直に知らせにきたこの三人には後でレモン味ののど飴を贈呈しようと決めて、フィーネもその部屋を後にした。
「……ちょっと行ってくるわね、古唄」
『……』

――……ゲッ……トォン……――

登場人物紹介（随時更新・ネタバレ注意）
大地古唄（２／１９　追記）

Ω　大地古唄　Ω

本作の主人公。オリジナルキャラクター。
「人の心へとアクセスし、人と人とを繋ぐ存在」

◆見た目◆

身長２０６ｃｍ、体重８９ｋｇ。本人は大学卒業後まったく身長と体重を測っていなかったので大学時代のままだと思い込んでおり、第一話で描写された身長・体重と異なるのはそのため。全身の筋肉が非常に硬く、生身でも鎧を纏っているように錯覚するような巨漢。常にライディング用の黒いスーツ・プロテクトインナー・グローブ・ブーツを身につけていて、その巨体から全てがオーダーメイド。

バイクに乗っていない時はスーツの上からさらに黒いジャケットを着ていて、初対面の相手は高確率で「黒くてでかい男」という印象を受ける。

地の肌は一般男性よりも少し白いくらいなのだが、長年の旅とバイク生活による日焼け・オイル汚れで褐色気味になっている。

◆性格◆

外見にそぐわずとても温和で、女性受けはしないが子供受けはするタイプ。

本人も子供好きであり、旅先で野宿している時に寄ってくる子供の相手をしては、その親に不審者扱いされて泣きを見ている。

現代では差別主義と取られそうな「一昔前の好青年」で、女・子供は大人の男が守るもの、という思想を持っている。そのためシンフォギアに適合可能な者が少女ばかりと知った際には非常にショックを受け、彼がノイズとなる理由の一つとなった。

◆人間関係◆

・立花響・

ノイズギアを纏うようになった直後は半ば自暴自棄になっていたが、それは響との出会いによって一変する。

醜いノイズとなった自分にも普通の人と同じように心配してくれる響の「勇気」と「優しさ」を見て、自分の命の尊さを知り、根本的に自己犠牲主義の彼を何度も救った。

また、そんな響がシンフォギアを纏うことのできる存在と知った時はとてもショックを受け、以降は彼女にギアを纏わせないよう奮闘する。

しかし時には彼女を守り切れないこともあり、その度に不甲斐なさに打ちひしがれていたが、同時にそれこそが彼と響の絆を強くしていき、今では親子のような関係になった。

・小日向未来・

同じように、響の親友である未来とも親子のような関係である。

古唄が戦えない時や彼がいない時、代わりに無茶をする響を共に心配しあっており、響よりもさらに「一般人」であるため古唄の過保護ぶりが増している。

ノイズに対抗する力を持たない真の意味での「普通の子」として、初めて古唄を人間として認めてくれた人物であり、彼女の大切な人を信じる「強さ」は古唄の目標でもある。

・フィーネ・

古唄をノイズにした張本人であり、シンフォギア以上に整備の難しいノイズギアの発案・開発・整備を担っている。

アームドギアを生成しないノイズギアをサポートする「アタッチメントギア」の後付けも彼女の力あってこそのもので、ノイズギアの持つ力のほとんどはフィーネ頼り。

古唄とは最初こそビジネスライクな関係であったものの、彼がフィーネの正体とその目的に気付いて以降、彼女の「恋心」を理解しようと古唄の方からフィーネに急接近。

二課所属でないことを盾にフィーネ側への協力を惜しまず、物語の描写と描写の間でもフィーネの「理解者」として全力を注いでいた。
そのためフィーネも、最初こそ古唄を「ノイズ因子を研究するために有用なモルモット」と見做していたが次第に信頼を寄せるようになり、彼との衝突を極力避けようとしていた。
・風鳴弦十郎・
物語が開始するまで「親殺しの子」として古唄を知りながら理解を示してくれた唯一無二の友人であり、現在でも古唄は彼のことを深く信用している。
ノイズギアの発案当初は古唄ではなく彼がノイズになる予定だったが、ノイズ因子が暴走した際に彼を止められる存在が見つからなかったため古唄が適合者として指名された。
第二話で再会するまでにもメールなどで定期的に連絡はとりあっていたが、実際に会うのは7年ぶりで、当時は彼の趣味である映画鑑賞とその真似事に付き合って「モーゼごっこ」などをしていた。
※海を手刀で割ってどこまで歩いていけるかというＯＴＯＮＡの遊び。

◆ノイズギア◆

正式名称はＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ。人体にノイズ因子を移植して、ノイズの本能である「人を襲おうとする意思」を強靭な精神力と健康極まる肉体で無理矢理に抑え込んだもの。
本来は鎧の姿に変化するとは思われていなかったので、「ノイズギア」というのは関係者間でのみ使われる俗称である。なお、位相差障壁の展開と人体の炭素転換は任意で可能。
ノイズの本能を抑え込むこと自体は適合者の精神力のみで可能だが、それを制御して利用するとなると暴走の危険性が高まるため、ノイズ因子を制御する専用の装置「ウォッチベルト」が不可欠。
最初の手術で体内に移植されたノイズ因子は小型ノイズ1匹分にも満たないが、完全に制御できるようになってからはノイズを積極的

に「捕食」し、膨大なノイズ因子を次々に内包していった。作中最大保有時（「三つ首の金色竜」）のノイズ因子は「大型ノイズ１兆匹分」に匹敵する。

カットインは無いが、ＳＲＡで相手の動きを空間に固定し、持ち前の跳躍力とＡＤＳで空高く跳び上がり、落下速度とＡＤＳの推進力を使ってキックを放つ「アサルトスマッシュ」が存在する。

また、この時に体をノイズ因子の塊に換えて対象を透過し、相手を炭化させる「アメジストスマッシュ」というバリエーションが存在し、主に対ノイズ戦で使用される。

アメジストスマッシュを放った場合、対象を透過した直後、相手の体が青白い炎（ノイズ因子）に包まれてから炭化する。

両者の最大の違いは、おおまかに言えば「物理攻撃力の有無」で、アメジストスマッシュは膨大なノイズ因子（＝猛毒）による毒殺であり、キック力はゼロである。アサルトスマッシュは約１７ｔ。

・ノイズギア・アクセルフォーム・

古唄の切り札のひとつ。正式名称はＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・Ｓ。単にアクセルフォーム、または疾走態と呼ばれる。１０秒間だけ通常の１０００倍の速度で行動が可能だが、加速することなくこの姿を維持するだけなら３０秒は問題ない。

なお、スピードを増させるために体格をスリム化させたため通常時と比べると防御力が低下している。この姿になるには大型ノイズ３０匹分のノイズ因子を全てスリム化に費やす必要があり、加速にはさらに３０匹分のノイズ因子を必要とするため、計６０匹分のノイズ因子を一度に使い切ってしまう。

加速状態から放たれるアサルトスマッシュやアメジストスマッシュは、そのスピード故に連続で放つことが可能で、「（通常の威力―軽量化による体重の数パーセント）×攻撃回数」が最終的な威力となる。特に名称はないが、呼ぶとするならば「アクセルアサルトスマッシュ」と「アクセルアメジストスマッシュ」か。

・ノイズギア・ビーストフォーム

古唄の切り札のひとつ。正式名称はＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・Ｇ。単にビーストフォーム、または激情態と呼ばれる。その制御の難しさ故にＦＤモードでなければ確実に暴走し、さらには３分間しかその巨体を維持できない。

しかし発揮される力は折り紙つきで、最大で全長７０ｍ／体重４万ｔ、位相差障壁の応用である「ディメンションシフト」によりあらゆる攻撃はこちら側の位相を離れノイズ側の位相で行われるため、その巨体に見合わず街への被害は一切出ない上、それ故に古唄も遠慮なく大技を連発できるという、暴走の危険性にさえ目を瞑ればノイズギアらしくないほどメリットだらけのフォーム。

作中でも表現された通り対ノイズ戦、特に殲滅戦で真価を発揮し、ノイズ因子由来の攻撃を全て阻む「ハイパーゼロメガバリヤー」、ノイズ因子を含む攻撃を全て吸収・増幅して撃ち返す「ハイパーゼロメガアブソーブ」の他、テレポート能力や分身能力なども存在しており、飛行時はマッハ３３という驚異的速度で飛び回る。

また、このフォームの代名詞とも呼べる最大の必殺技「暗黒火球」はなんと大型ノイズ一兆匹分のエネルギーを熱エネルギーに変えて放出しており、その熱量は１０００，０００，０００，０００℃。もしもこちら側の位相で放てば地球が蒸発しかねないほどの大火力であり、間接的にディメンションシフトの有用性を示している。

（追記）

これまでウォッチベルトとコントロールバイザーの併用によって自分を制御していた古唄だが、未来の持つソロモンの杖により全ノイズ因子の制御を彼女に任せられるようになった。

自分の力のほとんどを制御に回していた彼はこれによって極めて理性的かつ安全な状態で全ノイズ因子を活性化させることに成功し、２度目のビーストフォーム化に成功。制御に苦しめられ続けていた彼だったが、仲間たちの働きにより本当の意味で「全力全開のフルパワー」を振るえるようになったのだ。

なお、コントロールバイザーが行うべきノイズ因子の制御をソロモンの杖が行っているため、この場合のバイザーは待機状態の赤色と

なっており、彼の「安心感」「安定感」の象徴となっている。

・ノイズギア・ＦＤ（フルドライブ）モード・

古唄にとって最大にして最後の切り札。正規名称はＺＥＲＯ―ＭＥＧＡ・ＦＤ。古唄がそれまでに蓄えてきた全てのノイズ因子が彼の激情に感応して膨張と増幅を繰り返し、ノイズまたはノイズ因子由来の力に対してのみ極めて高い力を発揮できるようになった。

ただし類似概念として扱われるシンフォギアのＸＤモードと違い、新たに追加された機能は何一つ無く、単純に出力のみが向上し、制限時間が（ほぼ）無制限になったのみである。通常時でも「理論上は可能」とされていたが何かしらの条件を満たせず不可能だったことも、この状態であれば可能になっている。（ノイズ因子の意識的な増幅など）

また、この状態での膨大なノイズ因子はあくまで「古唄の感情の激化」によるものであり、根源的なノイズ因子の量はそれまでと同じなので制御はむしろ以前よりも安定している。だがノイズ因子以外は通常時とまったく同じで、対人戦では古唄の格闘能力に依存し、対聖遺物戦では今までよりは抵抗力が増したが、まず何をどうやっても勝つことはできない。

また、ＦＤモードは発動するとノイズ因子が尽きるまで解除できない。しかし古唄の内包するノイズ因子は膨大にして濃密。さらにはノイズ因子が尽きることはギアを纏えなくなることを意味する。

◆バイク◆

古唄の愛車であり正妻。元々は市販のバイクであった「ＺＺＲ１４００」を、彼のポテンシャルに合わせて二課の技術班が改造し、特殊装甲仕様（スペシャルスキンカスタム）――ＺＺＲ１４００ＳＳＣとなった。

主力兵装である「アンチノイズバリア」はノイズの位相差をチューニングし、古唄以外のノイズを寄せ付けない膜状の防御壁であり、これを展開して突進することで生身の人間もノイズと戦闘が可能。ただしＺＺＲ１４００ＳＳＣの加速力に耐えきれるのは古唄か弦十郎

などの一部の人間であり、リミットオフ状態の「フルアクセル」時や各種ブースター展開時は古唄ですらギアを纏わないと耐えきれない。
また、根本的な問題として人工知能を得たＺＺＲ１４００ＳＳＣは基本的に古唄以外の人間をあまり乗せたがらず、古唄も自分以外が乗ることを好ましく思っていない。（二人乗りやサイドカーの使用は除く）
古唄が「ドナシュラーク」の名を与えてからはさらにお互いへの独占欲（？）が増していき、彼の危機にはどこからともなく現れ、その凄まじい突進力を武器に彼を救う。
通常時の最高速度は３４０ｋｍ／ｈ、フルアクセル時は４８０ｋｍ／ｈ、ＥＣＢ展開時は２４００ｋｍ／ｍｉｎ。ただしＥＣＢ展開時の数値はあくまでスペック上のもので、古唄が操縦可能なのは直線でも５８０ｋｍ／ｈまで。
※アクセルフォームならば１８６０ｋｍ／ｈまで操縦可能。